

平成26年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書・第5年次

平成31年3月 三重県立四日市高等学校

## 目 次

巻頭言 校長 松岡 泰之

1	平成30年度SGH研究開発完了報告書（別紙様式3）	1
2	実施報告書	
	（1）グローバル・マインド	13
	（2）グローバル・リーダー学	20
	（3）グローバル・アクション	52
	（4）白熱英語講座	64
	（5）市民性・社会性の育成に関する効果測定	66
	（6）その他，グローバルな取組	68
3	関係資料	
	（1）市民性・社会性の育成に関する調査結果の概要	73
	（2）スーパープレゼンテーション発表論文	80
	（3）平成30年度実施教育課程表	119



## 巻 頭 言

本校は、平成26年度に、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)第1期研究校の指定を受け、「三重・四日市から世界へはばたき、新たな価値を創造する国際人」を育むことを目指した新しい教育活動に取り組んできました。

研究を進めるにあたって、地元四日市市をはじめ、運営指導委員の皆さま、関係機関の方々からのご支援、ご協力に心より感謝申し上げます。

本校が、四高SGHに取り組んだ目的は、1つには、卒業後も「高いレベルの学び」を継続できる基盤となる学力を培うことにあります。高いレベルの学力とは、幅広く且つ深く知識を求め理解するだけでなく、獲得した知識や理解を「疑い」、既成の「枠を超えて」価値を創造しようとする力のことです。2つめは、創立以来、本校の使命でもある「世のため人のため」に尽くそうとする志を培うことです。そして、3つめは、多くの課題を抱える現代にあって、「来たるべき社会はいかにあるべきか」その新しい社会の在り方を創造する力、切り拓く力を育むことです。

これらの力を育成するため、四高SGH研究開発プログラムとして、3つの新しい教育活動に取り組んできました。1つめは、生徒全員が取り組む課題研究「グローバル・マインド論文」作成です。大テーマ「三重・四日市発 グローバル課題への提言」のもと、6つの小テーマ「環境問題」「教育・ボランティア・人権問題」「文化研究」「法・歴史研究」「医療問題」「グローバル・ビジネス」から、各自が独自の課題を設定し、大テーマ講演会やテーマ毎の討論会等により研究を深め、論文にまとめあげました。2つめは、より一層深く学びたいという意欲の高い生徒が選択履修する学校設定教科・科目「グローバル・リーダー学」です。年間8回、土曜日の午後、大学教員や企業の方々の特別授業を受講するとともに、他のSGH校の生徒との交流会や海外フィールドワーク等を経験しながら、課題研究を深化させました。さらに、3つめは全校体制での実践活動「グローバル・アクション」です。校内論文発表会や地域にむけた提言や意見交換フォーラム「四高SGHスーパープレゼンテーション」の開催、大学留学生との交流活動、ボランティア活動や国内外への大会への参加等を積極的に取り組んできました。

本報告書は、SGHに指定された5年間（平成26年4月から平成31年3月）の研究成果をとりまとめたものです。この5年間の研究成果をさらに発展・進化させて、本校教育活動に新たに組み込み、引き続き、生徒たちが、高い志をもって、新しい時代を切り拓くグローバル・リーダーとして羽ばたいていってくれるよう、取り組んでまいります。

最後になりましたが、これまで本校の研究に多大なるご支援ご指導を賜りました関係者の皆様方に改めて感謝を申し上げます。

三重県立四日市高等学校  
校長 松岡 泰之



# 1 平成30年度SGH研究開発完了報告書（別紙様式3）

## (1) 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

## (2) 指定校名

学校名 三重県立四日市高等学校

学校長名 松岡 泰之

## (3) 研究開発名

「三重・四日市から世界へ！新たな価値を創造する国際人育成プログラム」

## (4) 研究開発概要

- ① 1, 2年生は、グローバル課題に係るテーマを選択し、専門性を有する教員や企業人等からの講演やディベートにおける論議等を踏まえて、課題研究論文を作成する。あわせて、全校生徒が校内グローバル課題討論会等に参加し、グローバル課題についての意識を高めるとともに、日本語及び英語でのプレゼンテーション能力を身に付ける。
- ② より意識の高い生徒は、学校設定教科・科目「グローバル・リーダー学」を履修し、大学教員や企業人等の専門家からの継続的な指導や、課題研究テーマに関わる短期留学、連携する自治体や企業の海外現地法人での就労体験等を通じて、課題研究を深化させる。
- ③ 生徒主体のサークル活動等を通じて、生徒が自ら行動し、積極性や主体性を身に付ける機会を持つ。また、外部機関主催の各種研究発表やコンクールへの出場、海外の高校生や大学生との交流会、地域への提言フォーラム「四高SGHスーパープレゼンテーション」等への参加により、多様な価値観を学ぶ。
- ④ 外国人講師の指導による「白熱英語講座」を通じて、生徒は課題研究テーマに関する内容について英語で討論を行う経験を積み、グローバル・リーダーとしての資質を向上させる。
- ⑤ 大学と連携した「グローバル・リーダー育成の取組に係る効果測定 of 尺度（生徒の変容測定）」の開発について、総括する。

## (5) 管理機関の取組・支援実績

### ① 実施日程

業務項目	実施日程								
	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
運営指導委員会		第1回							第2回
高校生の留学促進事業		留学支援金 第1次募集 第1回 留学フェア	短期海外 研修旅行		留学支援金 第2次募集 第2回 留学フェア	短期海外研 修旅行成果 発表会	第3回 留学フェア		
みえ未来人育成塾		実施							
三重県高校生レベル別 英語力UPセミナー							実施		
CAN-DOリストを活用 した英語教育改善事業	授業 研究会			授業 研究会	授業 研究会	授業 研究会	実践報告会 教員研修会	授業 研究会	

### ② 実績の説明

グローバル化が進展する中、豊かな語学力やコミュニケーション力に加え、異文化理解の精神や主体性、積極性等を身に付け、さまざまな分野で活躍できるグローバル人材の育成が求められていることから、本県が策定する「三重県教育ビジョン」（計画の期

間は平成28年度から平成31年度まで)に基づき、グローバル教育を推進した。留学の促進、海外における企業体験やインターンシップ等に取り組んだ結果、海外留学(短期留学を含む。)や海外研修等に参加する高校生の数は過去5年間で1.5倍となった。また、国内におけるグローバル人材育成に係る各取組への参加者数や参加校数も年々増加しており、四日市高校の生徒をはじめ、多くの高校生が学校の枠を越えて積極的に活動しようとする意欲の向上が見られた。

○ S G H運営指導委員会

- ・ 第1回運営指導委員会(平成30年6月21日(木)開催)
- ・ 第2回運営指導委員会(平成31年2月5日(火)開催)

これまでのS G Hの取組に係る総括的な協議を行った。また、第2回運営指導委員会では、代表生徒が課題研究や海外フィールドワークに係る成果を発表し、各委員から指導・助言を受けた。

○ みえ未来人育成塾の開催

課題解決能力の向上や学校の枠を越えた高校生のネットワークの構築を図るため、6月2日、3日に、留学生や大学生も交えて、テーマに基づくディスカッション及び発表を英語で行った。56名(高校生は36名)の参加があり、満足度は100%であった。

○ 高校生の留学等の促進

海外の高等学校等に長期留学する者に対して10万円の支援を予算化し、1名への支援を行った。また、海外の産業現場の視察や異文化体験を行う短期海外研修旅行を主催するとともに、参加費用のうち1人10万円の支援を予算化し、10名への支援を行った。

○ 三重県高校生レベル別英語セミナーの実施

12月26日(水)、27日(木)に実施し、中学生23名、高校生66名の参加があった。英語のみを使用する環境で、スピーチ、プレゼンテーション等をおおして、英語コミュニケーション力の向上に取り組み、参加した中・高校生の満足度は、94%であった。

○ C A N - D Oリストを活用した英語教育改善事業

英語による言語活動中心の授業や、4技能を総合的に育成するための授業等及びその評価に係る実践研究を行う県立高等学校を指定し、特色ある取組を支援した。また、指定校を中心に公開授業研究会を5回開催し、英語の授業改善に係る研究協議を行った。

○ 教員研修会、実践報告会等(のべ57校108名参加)

英語教員、国際理解教育担当教員、探究活動担当教員等を対象とした研修会や実践報告会を4回開催し、S G H校における取組の成果等を県内他校に普及した結果、課題研究発表や海外フィールドワークの実施、留学生との国際交流活動等の取組が県内他校にも広がった。

(6) 研究開発の実績

① 実施日程

業務項目	実施期間（30年4月2日～31年3月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバル・マインド	論文指導				論文指導							
	資料作成				グループ発表							
	講演会	講演会 2回								講演会	SGH スーパー プレゼン	論文集 作成
グローバル・リーダー学		1回	2回			1回	1回	1回	1回		1回	
グローバル・アクション			各種ボランティア活動								SGH スーパー プレゼン	
白熱英語講座			2回	2回			2回	2回				
市民性・社会性に係る効果測定			アンケート H-QU									

② 実績の説明

(a) グローバル・マインド

SGH中間評価における課題であった「カリキュラムの整合性を高め、目指す人材育成プロセスのさらなる明確化をはかっていくこと」について、平成29年度より総合的な学習の時間で行う1, 2年生の論文作成の取組を、2年間かけて計画的にスパイラルアップできるカリキュラム内容に改善して実施した。1年生は、論文作成に必要な知識の獲得及びディベートやコミュニケーションスキル向上のための学習や、2年生との論文発表の交流学习などを経て、グローバル課題に係るテーマの選択と論文構想の作成を行った。2年生は、6つの小テーマからグローバル課題に係るテーマを選択し、講演会や討論等における学びを踏まえて、論文作成に取り組んだ。3年生は、1, 2年生とともに大テーマに関する講演会（3回）に参加するとともに、2年生が作成する論文についてアドバイスを行った。また、自分の将来の展望をグローバルな視点から考察し、小論文としてまとめた。

2名のSGH専任教員が昨年度作成した、論文作成指導及び評価に係る「教職員指導マニュアル」を改善し、全教職員が1, 2年生に対してより組織的に指導・助言を行う体制を確立した。また、若手教員に「グローバル・マインド」の取組へのより積極的な参画を求めることで、当事業の終了後も課題研究論文作成に係る指導を継続できる組織づくりを進めた。

6つの小テーマとその選択人数

環境問題 1年63名, 2年92名	教育・ボランティア・人権問題 1年26名, 2年78名	文化研究 1年44名, 2年40名
法・歴史研究 1年63名, 2年32名	医療問題 1年85名, 2年82名	グローバル・ビジネス 1年79名, 2年35名

(b) グローバル・リーダー学（学校設定科目 1年で1単位（計2単位まで））

1, 2年生の希望者を対象に、「グローバル・マインド」で選択した小テーマについて、土曜日に年間8回の授業を実施した。外部講師による講義をとおして、生徒は新たな知見を得て、広い視野を養うとともに、講師との対話及び数名のグループ内での意見交換や討論を実施し、思考力、表現力の育成を図った。講義の進め方について工夫するとともに、授業の進行や議論のファシリテーターの役割を担う担当教員を講座毎に3名配置するなどの改善を図ったことにより、生徒は質の高い課題研究を行うことができた。特に意欲と能力のある生徒をカンボジア（生徒12名）及び中国（生徒12名）に派遣した。生徒は、現地において高校生や大学生との交流を行うことで、国際交流や国際友好及び国際平和の大切さを体感し、グローバル・リーダーとしてのありようにヒントを得た。また地元のグローバル企業見学会を実施し、キャリアビジョンを育成した。

【グローバル・リーダー学受講生徒数】

環境問題	: 27名（1年 23名, 2年 4名）
教育・ボランティア・人権問題	: 20名（1年 14名, 2年 6名）
文化研究	: 22名（1年 19名, 2年 3名）
法・歴史研究	: 19名（1年 18名, 2年 1名）
医療問題	: 39名（1年 35名, 2年 4名）
グローバルビジネス	: 41名（1年 34名, 2年 7名）
合計	: 168名（1年143名, 2年25名）

(c) グローバル・アクション

生徒会執行部、英語部、新聞部等に所属している生徒を中心として「SGHサークル」を結成し、課題研究テーマに即したボランティア活動を行った。また、地元企業等への提言フォーラム「四高SGHスーパープレゼンテーション」において、課題研究の成果を地域に向けて広く発信した。さらに、海外の高校生や近隣の大学に留学している留学生との交流、高山グローバルサマーフェスタ、Meijo Global Festa 2018、カンボジア研修合同研修会等への積極的な参加をとおして、異文化理解を深めるとともに、コミュニケーション力を向上させた。

(d) 白熱英語講座

昨年度に引き続き南山大学等で英会話を教えているEdward Scruggs講師を招いて、英語による討論を中心とした課外授業「白熱英語講座」を実施した。「グローバル・マインド」で研究している6つの小テーマについて意見を出し合うことにより、思考力・判断力・表現力・語学力等、グローバル・リーダーとしての資質・能力を育む機会となるとともに、本校教員の授業改善に係る研究にもつながった。

(e) 市民性・社会性の育成にかかる効果測定

市民性・社会性の育成にかかる効果測定結果を尺度である「コミュニケーション能力」「論理的思考力」「セルフコントロール」「チームワーク」「情報集約, 活用」「学習動機」「自国, 異文化受容」の各項目について、平成27年度入学生の調査結果（3年間で5回実施）の分析を行った。全体的な傾向としては、「コミュニケーション



「学習能力」の計画性、情報集約力、自尊心や、「学習動機」の内的調整、取り入れの調整の各尺度の得点が上昇傾向にあった。このことから、日々の教育実践により、グローバル人材に求められるいくつかの能力が育成されたと考えられる。「学習動機」尺度については、人との競争的な進学に対する意識が強くなると「内的調整」の数値が下がり「外的調整」の数値が上がる傾向があるが、第3回目以降の「内的調整」項目が向上して「外的調整」項目は横ばいであることから、競争的進学を余儀なくされている環境下においても、本校のSGH各種プログラム、アクションを体験した結果、自律した学習意欲を維持・向上させることができたと考えられる。

(7) 目標の進捗状況、成果、評価

【研究開発の仮説】

[仮説1]

全生徒が、1・2年生時にグローバル課題をテーマとした「課題研究」論文を作成し、全校でグローバル教育に取り組んでいるという当事者意識をもつことにより、また、グローバル・リーダーを目指す生徒向けのプログラム（学校設定教科・科目「グローバル・リーダー学」）を提供し、その履修生徒が「ピア・サポート」等を通じて他の生徒と関わりを有することにより、相乗効果が生み出される。

【検証】

指標 (アウトカム)	平成25 年度	平成26 年度	平成27 年度	平成28 年度	平成29 年度	平成30 年度
入学後一年間でグローバル・マインド、市民性・社会性が向上したと自己評価した生徒数（1年生）		189人 (52.5%)	213人 (59.2%)	247人 (68.6%)	257人 (71.4%)	287人 (81.1%)

「入学後一年間でグローバル・マインド、市民性・社会性が向上したと自己評価した生徒数(1年生)」について、事業5年間をとおして、年次が進むにつれて数値が上昇した。2年間かけてスパイラルアップさせて課題研究に取り組むカリキュラムの開発や、論文交流会などにおけるピア・サポートの効果により、グローバルな課題を自らの課題と捉えることができる生徒を多く育成することができたと考えられる。

【参考】「グローバル・リーダー学」を履修している生徒を対象としたアンケート結果  
問：論文を作成・発表した経験は、あなたにとってプラスになりましたか。

いいえ .....					はい
1	2	3	4	5	
0.0%	3.8%	7.7%	38.5%	50.0%	

昨年度よりも1ポイント高い概ね89%の生徒が論文作成の経験をプラスと考えていることから、大半の生徒がグローバル課題について当事者意識を持って取り組めたと考えられる。生徒からは、「他人が納得する主張を適切な根拠と共に明確に述べ、PCを使いまとめるという作業全般をとおして社会に必要なスキルを獲得できた。」「発表したり質問を考えたりして、質問する楽しさを知ることができ

た。」「他人の考えを取り入れつつ、今までとは違った形で自分の考えを表現できた。」「論文を作成することで、どのような点から考察すれば新たに展開していいのか等を考えることで順序立てて物事を考える力を付けるきっかけとなった。」などの意見があった。

問：グローバル社会を担うリーダーとしての自覚を育むのに役立ちましたか。

いいえ	.....				はい
1	2	3	4	5	
1.8%	6.5%	22.6%	41.7%	27.4%	

概ね70%の生徒が肯定的な回答をした。「グローバル・リーダーとは何か。」を講師から問われる場面があり、講師による講義や実践活動をとおして、各生徒が自分なりの「真のリーダー像」を思い描くことができたと考えられる。

[仮説2]

グローバル課題をテーマとした「課題研究」論文を作成することにより、当該課題についての解決のために国際化を進めている大学への進学意識が高まり、自主的、継続的に学習する生徒が増加することにより、大学での主体的な学びにつながる。

【検証】

指標 (アウトカム)	平成25 年度	平成26 年度	平成27 年度	平成28 年度	平成29 年度	平成30 年度
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合	42.70%	59.92%	56.51%	56.85%	60.56%	58.53%

「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したりしたいと考える生徒の割合」は、昨年比2.03ポイント減少したものの3年生は61.56%で、学年が上がるにつれて数値が上昇した。またSGH事業指定前の平成25年度の生徒と比較すると、15.8ポイント上昇した。学校としてグローバル教育を推進し、異文化交流活動、グローバルな視点からの論文作成、海外フィールドワーク等を行ったことは、生徒が国際的な課題に気付き、主体的にグローバルな観点で物事を考える端緒となり、5年間で半数以上の生徒が国際的な活躍を意識するようになった。

[仮説3]

文系または文理融合のグローバル課題をテーマとした「課題研究」論文の作成や、グローバル課題にかかる討論会への参加等を通じ、当事者意識だけでなく、探究心が向上するとともに、コミュニケーション能力、論理的思考力、行動力等が育まれる。

【検証】

市民性・社会性の育成にかかる効果測定（3年間で5回実施）の分析結果によると、3年間を通じて生徒は探究心を維持し、コミュニケーション能力、論理的思考力ともに向上したことが分かる。生徒は高校生活をとおして、グローバル社会で生き抜く素養

や、一層深く学問に取り組む姿勢を身に付けることができたと言える。またセルフコントロール、チームワークなどの尺度の各項目において、3年次（平成30年7月調査）で数値の向上が見られたことは、生徒が自主的、継続的に「グローバル・マインド」における課題研究・論文作成に取り組んだ成果であると考えられる。また、「リーダーシップ」「情報集約力」「自尊心」「自己主張」の各項目が向上したことは、生徒自ら研究課題を設定し、課題に関連する情報を独力で、又は友人との交流等をとおして収集し、各年度末に成果物である論文等をまとめた成功体験が影響したと考えられる。

[仮説4]

外国でのボランティア、留学やホームステイの機会のほか、大学との連携による英語集中講義や、留学生、招聘外国高校生等との国際交流を行うことにより、英語力の向上や異文化理解が進む。また、異なる考え方や異なる意見をもつ者がお互いに歩み寄るためにはどうしたらよいか思考する力や行動力が身に付く。

【検証】

指標 (アウトカム)	平成25 年度	平成26 年度	平成27 年度	平成28 年度	平成29 年度	平成30 年度
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合	—	— 3年生がSGH対象外であったため	(60%)	28%	31%	40%

SGH事業指定前は測定指標となる英語力検定を全員に対して実施していなかったため、CEFRのB1～B2レベルの生徒数を、授業での様子や大学受験の結果から判断して60%と算出した。一方、SGH事業指定後の入学生についてはGTEC for Studentsを受験させ、1回目（1学年春）と2回目（2学年冬）の点数の伸び具合から卒業時の英語力を類推して、卒業時にB1以上になる生徒をシミュレートして、40%という割合を算出した。今後もGTEC for STUDENTSを活用して生徒の英語力の伸びを把握するとともに、英語科を中心に必要な改善を図りながら、今後もSGH事業で育んだ英語力や異文化理解等の教育活動を継続して取り組んでいく。

[仮説5]

学級の雰囲気によければ学習意欲も高まり、学力が向上するとともに、全ての生徒について、グローバル・リーダーとなるために必要な能力の育成につながる。

【検証】

平成23年度から実施しているhyper-QU（尺度：①学級満足度②学校生活意欲③ソーシャルスキル尺度）によると、本校の生徒について、次のような特徴が見られる。

- 平成23年度調査と比較して、学級満足度尺度では、「学級生活満足群」に属する生徒の割合が向上し、「学校生活意欲尺度」では、「学習意欲」が向上している。このことは、学級の雰囲気が良好になれば生徒の学習意欲が向上することを示唆している。
- 平成26年度入学生以降は、「ソーシャルスキル尺度」では、「かかわりのスキ

ル」と「配慮のスキル」両方の領域が高い水準でバランス良く形成されている生徒の数が増加している。このことは、各種SGHプログラムの実施により、集団形成に必要な対人関係を営むためのスキルが向上したことを示唆している。

#### 【SGH中間評価において指摘を受けた事項の改善・対応状況】

- カリキュラムの整合性を高め、目指す人材育成プロセスのさらなる明確化をはかっていく必要がある。
- 若手教員を積極的に参画させ、継続的な取組として学校文化の土壌を構築することを期待したい。また、管理機関である教育委員会の支援について、さらなる積極性が必要である。
- 今後生徒の学びを確かなものにしていくため、学校全体で取り組んでいけるような体制づくりが望まれる。

#### [改善・対応状況]

総合的な学習の時間で行う「グローバル・マインド」では、平成29年度に、1、2年生の論文作成について、2年間かけて生徒が計画的に内容をスパイラルアップできるカリキュラムに改善した。このことにより、1年生は課題研究を行うための基礎的なスキルを獲得した後に、自身の進路選択を踏まえて論文作成に取り組むことができるようになった。さらに本年度はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定され、1年生のカリキュラムに学校設定科目「探究」を新たに設定し、これまで開発してきたグローバル・マインド育成の手法を継承していくこととした。

また、本年度から、各学年担任と各分掌教員が連携して、すべての教員が生徒の課題研究活動に参画する体制に変更した。また、平成29年度に論文作成指導及び評価に係る「学年別の指導マニュアル」を作成したことで、どの教員でも容易に指導・助言が行えるようになり、事業終了後も全校体制で課題研究を継続的に実施できることとなった。

#### (8) 5年間の研究開発を終えて

- ① 教育課程の研究開発の状況について
- (a) グローバル・マインド

「総合的な学習の時間」における課題研究のあり方について研究開発を行った。1、2年生全員が、グローバル課題の中から1テーマを選択し、課題研究を行ってマインド論文と称する課題研究論文を作成した。単なる調べ学習にとどまらないように、必ず提言を盛り込むことを課した。2年間にわたる授業をとおして、質の高い論文作成に向けて、生徒の創造的思考力や批判的思考力を伸ばすために、教員はプレゼンテーションやディベートなどさまざまなスキルを身に付けさせる授業やワークシートの工夫などに取り組んだ。また、協働的思考力を育成するために、論文の構想段階でグループ討議を行ったり、中間発表会を開催して、聞き手の生徒からさまざまなアドバイスを受けたりする時間を設け、それらを取り入れてより良い論文に仕上げるための取組を行った。事業開始当初は、1、2年生でそれぞれ1テーマを選択し、論文作成を行うカリキュラムであったが、探究の質や内容の深まりの不足などに鑑み、1年生で論文作成に必要なさまざまなスキルを身に付けさせたり、十分な構想の時間や考察の時間を確保したりするなどの改善を重ねた。本年度は、2年間とおして実施する論文作成に係る指導マニュアル

の質の向上を図った。特に、1年生については、本年度から始まったSSH事業の探究活動ともリンクさせながら、課題研究に取り組むよう指導した。このことにより、次年度以降も「グローバル・マインド」で培ったノウハウを教科「SSH」の科目「探究」にて継承し、継続的に課題研究を行っていくこととした。

(b) グローバル・リーダー学

学校設定教科「グローバル・リーダー学」を設定し、研究開発を行った。この教科は、本校スーパーグローバルハイスクールとしての一つの大きな柱と位置付け、将来のグローバル・リーダーを発掘し、かつ、その意識、自覚を高めさせる目的で設置したものである。この教科は1、2年生のうち希望者が選択できる授業で、土曜日に年間8回実施した。1回の実施時間は4時間で、履修した生徒は単位を修得できる。生徒は、グローバル課題について、企業人や大学教員等の講義を受けるとともに、グループで講義内容に関するディスカッション、発表、質疑応答を行い、授業をとおして、協働的な思考力や批判的な思考力を培い、さまざまな角度から自ら考え、学ぼうとする意欲を身に付けた。昨年度から、課題研究テーマの異なる生徒同士のディスカッションを導入したところ、生徒間の交流活動では予想以上の相乗効果が見られ、生徒の満足度も高い結果となった。また「グローバル・リーダー学」受講者に対して、国内外におけるフィールドワークへの参加やグローバル社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会への参加を働きかけ、課題研究内容の一層の深化を図った。

本年度の「グローバル・リーダー学」受講者へのアンケートによると、「将来、大学などで自らの学びを実践できる力をつけるのに役立った。」、「社会貢献について、その意義も踏まえて取り組んでいこうと思った。」と回答した生徒はともに79%で、SGHの取り組みを一過性のものではなく、将来に役立つものとしてとらえていることが分かった。

来年度以降、本教科科目は開講しないが、これまでに本事業への協力を依頼した企業人や大学教員等の講師に引き続き本校の教育活動への支援を依頼するとともに、グローバル企業や地域環境施設等との連携を継続し、引き続き本校において、国際舞台で活躍するために必要となる資質・能力を育成する諸活動の研究・開発に取り組む。

(c) グローバル・アクション

地元企業への提言活動を行う「四高SGHスーパープレゼンテーション」について、地元企業や四日市市の関係者、本校SGH運営指導委員に出席を依頼し、本年度は生徒の課題研究の成果をより広く発信した。3名の代表生徒による課題研究の成果発表・提言に対して、会場の多くの生徒から意見や質問が出されるなど、活発な議論が行われ、企業や大学から招へいした3名のパネリストから「本年度は過去最高の議論ができた。」と高い評価を受けた。また各パネリストによる専門的な見地からの助言や講評は、全生徒にとって今後の論文作成の参考になった。

次年度以降はSSH事業の中で「四高版科学の祭典」を実施し、探究活動の成果をポスターセッションで発表したり、フォーラムを開催したりして、同様の取組を実施するとともに、海外の高校生や近隣の大学に留学している大学生との交流活動を継続し、異文化理解、コミュニケーション力の一層の向上を図る予定である。また、課題研究テーマに即したボランティア活動や、留学生との交流、SGH活動で連携した他高校等との活動等のうち、実施可能な取り組みも引き続き行う。

(d) 白熱英語講座

前期（Ⅰ期）に4回，後期（Ⅱ期）に4回実施した。これまではⅠ期の受講希望者が多く，Ⅱ期には受講希望者が大幅に減少する傾向が見られたが，本年度は年間を通じて受講する生徒が増加した。このことは，講座の趣旨目的が生徒に浸透した結果といえる。グローバル教育推進の観点や国際舞台で活躍する人材育成の視点から，今後も英語でさまざまな話題について討論する機会を創出するよう努める。

(e) 市民性・社会性育成にかかる効果測定

S GH事業実施後に本校に入学した生徒が，S GH事業に係る諸活動を3年間継続して体験したことにより，効果測定結果を尺度である「コミュニケーション能力」「論理的思考力」「セルフコントロール」「チームワーク」「情報集約，活用」「学習動機」「自国，異文化受容」のうち多くの項目について，事業の成果が確認できた。この結果を受けて，効果的な取組については継続して実施していくことを検討している。

② 高大接続の状況について

平成30年度は，グローバル・リーダー学（全8回）のうち6回について，東京大学，京都大学等をはじめとする大学教授等を講師として本校に招き，講義，討論，意見交換を主とした授業を行った。また，東京大学教養学部が年間14回実施している「高校生のための金曜講座」に，毎回30名前後の生徒が参加し，専門性の高い学習に興味を持って取り組んだ。オンライン会議システムによる双方向のやり取りをとおして，生徒は大学の知の世界に一足早く踏み込み，学ぶ喜びを経験した。また各大学の大学教員等による出前講座の取組を活用して，1年生を対象として10～13講座実施した。1年生は，「グローバル・マインド」で自分が選択したテーマに関する講義を受け，視野を広げ，多様なものの見方に触れることができた。また，大学における研究手法や研究内容を学ぶ貴重な機会となった。SSH事業においては，大学との更なる連携協力が必要不可欠であることから，高大接続の取組については今後一層推進していく予定である。

③ 生徒の変化について

本年度のグローバル・リーダー学受講生徒対象のアンケートによると，「普段の授業以外の学びを経験することで視野が広がった。」は90%，「これからのグローバル社会を担うリーダーとしての自覚を育むのに役立った。」は69%，「他国の文化や習慣，宗教などについての理解が深まった。」は79%，と生徒の意識に大きな変容がみられた。本年度のグローバル・リーダー学受講生徒数は2年生25名，1年生143名であった。本校生徒，教員が協力して5年間に渡って本校S GH活動を実施し，成果を発信し続けた結果，「四日市高校で勉学に励むとともに，S GH活動に積極的に参加したい。」という意欲をもって本校に入学する生徒が増加したことが，1年生の受講者数が大幅に増加した要因であると考えられる。

④ 教師の変化について

全教職員がマインド論文指導を通じて，「課題に対する解決策を提示しているか。」「オリジナルの提言であるか。」「グローバルな視点で書かれているか。」等の共通の

基準を持って、課題研究論文の指導を行うようになった。また、教科に関係なく、質の高い論文を作成するために必要なものの見方や考え方を養うための授業の改善・工夫が進んだ。このことは、中間評価で指摘のあった3つの課題について真摯に改善してきた成果であり、今後も若手教員の教科等指導力の向上を図り、教職員全員体制で教育活動に取り組む体制を維持し、新たに配属される教員であっても、スムーズに本校の教育活動に対応できる学校文化の土壌を構築していく。

⑤ 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

本年度のグローバル・リーダー学受講生徒対象のアンケートによると、「マインド論文を作成・発表する経験はプラスになった」は88%、「自分の考えを表現する力が伸びた。」は83%で、生徒の満足度は非常に高く、実際、多くの生徒が、授業において積極的に自分の意見を表明できるようになった。本年度の「四高スーパープレゼンテーション」に参加した保護者対象のアンケートでは、「若いフレッシュな目で海外のさまざまな物を見、聞き、感じてきたことがよく伝わってくる。」「若い人が問題意識を持っていることが、課題解決への可能性を感じる。」等の意見があった。

⑥ 課題や問題点について

(a) 「グローバル・マインド」における論文作成

総合的な学習の時間の中で「グローバル・マインド」を実施し、当初3年間は1、2年生が、各自で課題を見つけ「構想シート」を作成して論文を仕上げていく方法を採用した。9月に構想シートに基づく論文交流会、10月に論文作成、11月に論文発表会及び校内プレゼンテーションを実施した。しかし、論文作成時間が短く内容が希薄であったため、4年目からは、2年間かけて論文を作成する方法に改善した。あわせて学年別「教員のための指導マニュアル」も作成し、指導体制を確立させた。1年生前半ではコミュニケーションスキルを中心に学習し、後半に論文タイトルを設定、2年生当初から論文を作成するプログラムに変更した。また、作成過程の論文を2回提出させて、担当教員からの指導を行った後、9月、10月の論文交流会の討議を踏まえて、各自論文を完成させた。しかし、データ収集等の調査研究活動に充てる時間が確保できなかったことから、夏季休業を有効に活用して、指導を行うべきであったと考える。

(b) 土曜日実施の学校設定教科「グローバル・リーダー学」

学校設定教科「グローバル・リーダー学」は、土曜日午後に全8回授業を実施した。専門性の高い講師陣による講義・演習は生徒にとって大変刺激になり、生徒の進路選択にも大きな影響を与えるなど、キャリア教育の視点からも、大変有意義であった。一方、本校は文武両道を校是とし、1年生は原則全員いずれかの部活動に加入することとしていることから、部活動の中心的役割を担う2年生にとって、「グローバル・リーダー学」の受講と部活動との両立は難しい面があった。このことから、今後は、課題研究活動は平日の授業時間中に実施する計画が必要である。

(c) グローバル・アクション

白熱英語講座や海外フィールドワークの実施、他校SGH活動への参加、全国高校生フォーラムにおける発表など、多様な活動に取り組んだ。年度を重ねるにつれて、対外的な活動の引率や、発表の事前指導等の業務が大きな負担となった。

(d) 四高SGHスーパープレゼンテーション実施及び発表会の在り方

5年間の間に徐々に、発表者、傍聴生徒、パネリストの一体感が感じられるようになった。効果的な発表方法、会場設営方法、時間設定等について、さらに工夫の余地があることから、今後の検討課題としたい。

(e) 海外フィールドワーク、語学研修等の海外生徒との交流活動

カンボジア、中国の2ヶ国で海外フィールドワークを実施し、それぞれ参加した生徒は大学生等との交流学习や現地企業見学等、有意義な体験をすることができた。またその成果をスーパープレゼンテーションにおいて報告することで、海外フィールドワークに参加しない生徒にも現地の現状や課題を伝える機会となった。また、約10日間のオーストラリア語学研修（2学年30名）も実施しており、参加生徒は異文化や多様な価値観に触れる貴重な機会となっていることから、SGH終了後も海外研修を継続する予定である。しかし、実施に向けては、仕様書作成・業者選定、参加生徒の募集、事前研修、保護者説明会、引率教員手配、事後研修、発表報告指導等の業務があることから、計画的に進める必要がある。

⑦ 今後の持続可能性について

平成30年度よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、新たな教育課程の研究開発に取りかかっている。本校のSSHにおける研究開発の一つは、「国際舞台で活躍するために必要となる資質・能力を育成する学校設定科目及び諸活動の研究・開発」である。すなわち、グローバル人材の育成を掲げており、SGHの精神を受け継ぐものである。すでに、論文作成の方法論やプレゼンテーションスキルの獲得、グループ討議などを経てよりよいものに仕上げていくといった方法論を発展的にSSHの探究の授業に取り入れている。特に、2年次より文系を選択した生徒の探究活動については、テーマはSGH事業において設定した6つの分野とは限らないが、ポスター発表や論文作成は、SGH事業で開発した方法を引き継ぐ計画である。また、SGH事業のグローバル・アクションで実施してきた、白熱英語教室、エンパワーメントプログラム、東大金曜講座などの取組は、生徒の勉学への意欲やグローバルな視野を養うためにも引き続き実施する予定である。

管理機関としては、四日市高校がSGH事業をとおして得られた知見を活かしながら、今後もスーパーサイエンスハイスクールの指定校として、「課題研究」の実践を中心に据えた、新たな価値創造を生み出す学校設定科目「探究」や、国際舞台で活躍するために必要となる資質・能力を育成する諸活動の研究・開発を円滑に行えるよう、引き続き支援していく。また、四日市高校におけるグローバル・リーダーの育成に係る先進的な教育実践を積極的に他校に公開し、県内の各校においても、グローバル教育の充実が図られるよう必要な取組を進める。



## 2 実施報告書

### (1) グローバル・マインド

グローバル・マインド育成に向けて、「総合的な学習の時間」において、全校生徒が参加して行う大テーマに関する講演会（全4回、英語による講演も含む）や、1、2年生の論文作成に向けた実践を行った。特に昨年度から1、2年生の論文作成については別々のメニューで実施している。

1年生は、論文作成に必要な知識、ディベートやコミュニケーションスキル向上の学習や、2年生との論文発表の交流学习などを通して、グローバル課題に係るテーマを選択して論文構想を作成した。2年生は、6つの小テーマからグローバル課題に係るテーマを選択し、講演会や討論等における学びを踏まえて、論文作成に取り組んだ。3年生は、1、2年生とともに大テーマに関する講演会に参加するとともに、2年生が作成する論文についてアドバイスを行った。また、自分の将来の展望をグローバルな視点から考察し、小論文としてまとめた。

#### 6つの小テーマとその選択人数

環境問題 1年63名，2年92名	教育・ボランティア・人権問題 1年26名，2年78名	文化研究 1年44名，2年40名
法・歴史研究 1年63名，2年32名	医療問題 1年85名，2年82名	グローバル・ビジネス 1年79名，2年35名

#### (a) 大テーマ講演会

##### ① 第1回SGH大テーマ講演会（全校対象）

日時 平成30年4月18日（水）14：30～15：45

講師 京都大学大学院医学研究科形態形成機構学教授  
萩原 正敏 さん

演題 「The Impossible Dream（見果てぬ夢）」



萩原先生は、ケミカルバイオロジー、RNAバイオロジーを専門とされ、完治が難しいとされる遺伝病の創薬の研究に携わってみえます。講演では、若い頃は、外科医を志すも、医学以外の物にも興味関心を示し、シベリア鉄道での旅や読書に没頭する一方で、研究に打ち込み何度も失敗を重ねながら運良く創薬に結びつき、自らが創製した薬を武器に、これまでの医療では治せぬ難病に苦しむ人々を救うことが「The Impossible Dream（見果てぬ夢）」だと語られました。

また、医学のお話だけでなく、「ヒト」とは何か?の問いに、生物学的見地から「言葉」（文字）の重要性を説かれました。さらに、脳神経学の見地から「頭がよくなる学習法」なども説明していただき興味深いお話が続きました。

最後にこれからの高校生に必要なものとして英国の作家ウォルポールの「セレンディピティ」という言葉を引いて「何かを探しているときに、探している物とは別の価値のあるものを偶然見つける」ことがある。是非とも「宝の山」をめざして様々なことを頑張してほしい。恩師の言葉「Prepare for the future」「Be systematic!」を実践してほしいと講演を締めくくられました。会場でも多くの生徒から質問も出されました。

講演後も先生のもとに多くの生徒が詰めかけ、旅の話、分子生物学のこと、どのような勉強をしたらいいのかなど様々な質問が出され、丁寧な回答をされる一方「今は多くの友達をもつこと」「本をたくさん読んでほしい」と語りかけてみえました。

## ② 第2回SGH大テーマ講演会（全校対象）

日時 平成30年5月2日（水）14:30～15:45  
講師 映画監督 瀬木 直貴 さん  
演題 「創造～差別意識と向き合うところ～」



瀬木さんは本校卒業後、大学時代に映画と出会い、卒業後映画界へ。地域を舞台にした作品に定評があり、四日市観光大使なども務めています。1997年に東京都4区共同制作で自ら監督をした映画「お～い！」上映と講演をしていただきました。映画は実際にあった差別調査を素材に被差別部落出身の教師と会社で土地調査を行なったその友人と同和問題に対する意識の違いから傍観者の態度の誤りを指摘していました。20年以上も前の映画ですが、今も変わらない「知らない」ことからおこる差別意識の広がりや警鐘をならす作品でした。自ら監督した作品でもあるのでねらいやこめられた思いなども語られました。講演後、生徒からは「作品はどのようなテーマで作っているのか」「そのつもりはなくても差別してしまう気持ちがおこってしまうのはどうしたらいいのか」などの質問が寄せられ、「差別的な感情は誰もが持ちうるが、他人を抑圧したり傷つけないようにすることが大事だ。」と語られました。

終了後も瀬木さんのもとに集まった生徒たちに対して、学生（高校含む）時代の話や映画監督としての裏話、「差別」をどのように考えたらいいのかなどの質問について1つ1つ丁寧に答えていただきました。

### ③ 第3回SGH大テーマ講演会（全校対象）

日時 平成30年5月16日（水）14:30～15:45

講師 認定NPO法人テラ・ルネッサンス理事 鬼丸 昌也 さん

演題 「こうして僕は世界を変えるために一歩を踏み出した」



海外経験豊富な鬼丸さんは、2004年に訪れたアフリカのウガンダやコンゴの内戦、そしてそこで見聞した悲惨な子ども兵の話から始められ、どうして自らNPO法人を立ち上げ支援を行っているかなど舞台から降りて、身振り手振りをして生徒達に語りかけるように講演を行いました。「微力ではあるが無力ではない」という信念のもと、200名ものウガンダの子ども兵の起業を支援し、社会復帰している状況や国内的にも東日本大震災で津波の支援として「大槌復興刺し子プロジェクト」を立ち上げ、精力的に活動を行っていることも報告されました。自分は弱い人間だと自認しながら自分の仕事が「好き」だから支援に取り組めるとおっしゃった鬼丸さん。最後に「自分にしか救えない人が必ずいる」そのためには自らの命を大切に、私たちにできることとして、①事実を知る ②できることを実践（行動）する ③周りに伝える ことを示されました。最後に上映された元子ども兵からのメッセージも感動的でした。

意見交換では、生徒からは「どうしてそんなたいへんなことができるのか」「自分は受験生だが今の自分にできることは」という質問が出され「自分が今できることはすべて将来に生かせる。好きなことをやってみて」と答えていました。

講演後の懇談会には11名の生徒が集まり、「アフリカでなぜ戦争が起こるのか」「NPOが政府に働きかけていることはないのか」など次々と質問を投げかけられ、鬼丸さんはその返答にもユーモアを交えて納得のいく回答をされ、皆が一様に満足な様子でした。



#### ④ 第4回SGH大テーマ講演会（1，2年生対象）

日時 平成31年1月30日（水）14：30～15：45

講師 南山大学講師 エドワード・スクラグズ さん

演題 「How Will the English Language and its Place in the World Change in Your Life time? How Should We Prepare?」



本校の白熱英語講座でご指導をいただいているエドワード先生に1，2年生全員を対象としてオールイングリッシュの講演をしていただきました。世界的な言語となっている英語がどのような歴史の変遷を経て今日の地位を築いているか、また私たちがどのようなグローバルな視点を持って英語を使って世界の人々とコミュニケーションをしていけばよいかについて、クイズを交えて分かりやすくご講義をいただきました。講演後のアンケート結果では、「講義内容をとても理解できた、大体理解できた」生徒の割合は67.8%で、昨年度の英語講演会時の61.5%から上昇しました。また、「グローバルな視点や能力が向上する」と回答した生徒の割合は87.7%で、昨年度と同じ水準でした。少し聞き取れない部分があっても、エドワード先生のメッセージを最後までつかもうとする生徒たちの姿が印象的でした。

#### 【参加生徒の感想】

- ・英語を第一言語とするエドワード先生が英語について語ってくれたのが新鮮でした。自分の英語力でもけっこう理解できたのでうれしかったです。
- ・白熱英語講座を前・後期取っていたので、とても分かりやすかったです。
- ・全部英語だと分からない単語があったりしたけれど、クラスの人と教え合ったりできて充実した時間となりました。
- ・これからの自分の言語との向き合い方を考え、これまでの母語との向き合い方を振り返るいい機会となりました。
- ・英語が理解できるか不安だったけれど、先生の英語は聞き取りやすくて集中して聞くことができました。

(b) 論文作成（1年生）

① 年間計画

以下の年間計画のとおり実施した。

グローバル・マインド（1年）年間計画表

回	月日	内 容	
1	4/12	ガイダンス	S G Hの内容説明
		GW課題	図書館の本を1冊読み、周りの人に紹介する準備
2	5/9	プレゼン①	『My Favorite Books』 GW中に読んできた図書館の本をグループで紹介しあう
3	5/30	プレゼン②	「学生のためのプレゼンテーション・トレーニング」 (実教出版) テキストとして使用 (以降UNIT) UNIT 5 「プレゼンテーションの構造」 ・プレゼンテーションの骨組みを理解し、構成できる ・説得力あるプレゼンテーションができる →SNSについてプレゼンの準備
4	6/20	プレゼン③	UNIT 5 「プレゼンテーションの構造」 (続き) →各グループでプレゼンを実施 クラス全員の前でも発表
		夏季休業課題	「探究I」課題 (ポスター発表) のレジюмеを作成 UNIT 8 「レジюмеの書き方」 *を参考にする ・わかりやすいレジюмеを作ろう! →自分の主張を最小限のスペースでまとめることができる
5	9/12	プレゼン④	・夏休み課題の「レジюме」を元に「探究I」の ポスター発表の予行 →各グループ「探究I」課題のポスター発表
6	9/19	プレゼン⑤	UNIT 7 「文章とプレゼンテーションの相似性」 ・文章をプレゼンテーションの発展形としてとらえることができる ・説得力のある文章を書くことができる →実際に説得力のある文章を書いてみる
7	10/10	ディスカッション①	UNIT 6 「主張の裏づけかた」 ・自分の主張の正当性を裏づけることができる ・主張の根拠を強化し、説得力のあるプレゼンテーションができる →自分の意見の正当性 (裏づけ) を言うことができる
8	10/17	ディスカッション②	UNIT 1 3 「ディスカッションの基礎知識と実践」 ・特定の問題について、集団の中でそれぞれの立場から意見交換して、解決策を導き出したり、新たな提案を行ったりできる →問題解決型の話し合いを行う

9	10/24	ディスカッション③	UNIT 14 「ディベートの基礎知識と実践」 個人編 ・ディベートのルールなど方法を学ぶ ・4人で簡単なディベートを体験する 「部活動は全員参加すべき」
10	11/7	ディスカッション④	UNIT 14 「ディベートの基礎知識と実践」 グループ編 ・前回やったディベートを今度は4～5人1グループで 対抗して実施 A：「日本国内の外国人労働者を拡大すべき」 B：「被選挙権は選挙権同様18歳以上にすべき」
11	11/14	SGH出前講座	興味関心のある12テーマについて大学の先生から講義 を受ける
12	11/21	校内論文プレゼン参加	2年生のマインド論文プレゼン発表会に自分の関心のある 小テーマに参加，聴講，意見交流
13	2/5	四高SGH スーパー プレゼンテーション	意見交流を行う
14	2/13	SGH振り返り	アンケート

参考文献 「中学高校教師のための教室ディベート入門」 (創拓社)

「中高校生のためのディベート入門」 (学事出版)

### (c) 論文作成 (2年生)

#### ① 年間計画

#### グローバル・マインド (2年) 年間計画表

回	日時	内 容	
1	4/25 50分	一次論文作成に むけて	・1年生時に各自の論文テーマ決定，構想シート提出済み マインド論文進捗状況シートを新論文担当者 (チューター， 担任) に提出 ①進捗状況シート，論文下書きシートに記入 ②テーマ別にミニ面談
2	5/30 60分	一次論文作成 (5限+6限) *学年集会あり	一次論文作成 (各クラスにて作成) チューターが各クラスへ ・構想シートに基づいて各自論文作成を行う ・表紙を除き，A4用紙3枚以上 (ワープロ使用可) (表紙は所定の用紙。左上隅をホチキスで綴じること) ・情報室，図書館利用可とする。
	7/9	一次論文提出	各クラスからSGH担当へ提出 論文担当者は論文チェック
	8月 登校日	一次論文返却	チューター・担任が添削して8月上旬，登校日に生徒へ 返却

3	9/19 50分	一次論文 交流会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小テーマごとに割り当てられた会場に移動。数人ずつのグループを作り「一次論文」についてプレゼンをする。</li> <li>・アドバイスシート記入，交換→最終論文の作成へ</li> </ul>
4	10/24 100分	プレ論文 交流会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作成途上の論文を回覧し，最終論文の作成にむけてコメントを記入</li> <li>・GL学受講生以外で校内プレゼン発表者の推薦</li> </ul>
	10/26 20分	校内プレゼン発 表者決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各小テーマでの推薦論文の中から校内プレゼン発表者を選ぶ。（GL学受講者以外の発表者の決定）</li> </ul>
5	11/7 100分	マインド論文 意見交流会 最終論文提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小テーマごとに4人（or 5人）のグループを作り（10/24のプレ交流会とは違うメンバーで）最終論文を回覧し，「評価」を記入する。</li> <li>・論文について意見交換を行い「自己評価シート」を作成</li> <li>・最終論文提出</li> </ul>
6	11/21 100分	校内SGH プレゼンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GL学受講生，マインド論文推薦者のプレゼンテーションを1，2年生が聴講（一人8分。各会場でプレゼンを行い，当該会場ごとに論文を推薦する。推薦作の中からSGHスーパープレゼン出場者候補を選出する。</li> </ul>
	12月	最終論文評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論文担当者による論文評価</li> <li>・SGH委員会で論文集掲載者の決定</li> </ul>
	1月	論文指導 スーパープレゼンテー ション発表者指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スーパープレゼンテーション発表者の論文，PPT指導</li> <li>・論文集掲載論文の作成者への指導（論文担当者）</li> </ul>
7	2019/ 2/5 午後	四高SGH スーパー プレゼンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外研修報告 10分×2件</li> <li>・「代表論文」のプレゼン発表（発表10分＋[コメンター助言＋質疑応答]10分）×3人（オープニング，エンディング含め2時間30分程度）</li> <li>・会場は，四日市高校体育館</li> </ul>
	2/13	SGH振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケート実施</li> </ul>

(d) SGHの成果と進路について論文作成（3学年） 6月20日（水）

【目的】

- ・ 昨年1年間のSGH活動および本年3回の大テーマ講演会聴講を受けて，グローバル化する世界についての考察をまとめるとともに，これから自ら選択していく進路について考えさせる。
- ・ 現段階での自分の生き方・在り方の到達点を文章化し，自らの進路実現へ向けて決意表明という視点で作成する。

論文テーマ：

- ・ グローバル化する社会の中で自らの人生をどう生きるか。
- ・ グローバル化する社会の中で自らの進路をどうデザインするか。

(e) S G H出前講座（1学年） 11月14日（水）

【目的】

- ・ 1年生の生徒がグローバル・マインドのテーマに応じた大学の教員等の講義を受けることにより、視野を広げ多様なものの見方に触れる。また、どのように研究がなされるのかを学び、大学で学ぶことへの関心を高める。

【実施方法】

- ・ 6つのテーマに沿った計12講座を開講して講義を受ける。その後、同じテーマの生徒同士で講義内容や感想を交流する。

【講座一覧】

分野	講義題名	講師所属先	講師名
教育	心理学とは何だろう	名古屋市立大学 人文社会学部	天谷 祐子
文化	地域研究と言語学 —スイスの事例を中心に	三重大学 人文学部	大喜 祐太
ビジネス	人々のコラボレーションを支援する AI 技術	名古屋工業大学 工学部	白松 俊
法	刑法入門—罪と罰について考える—	三重大学 人文学部	田中 亜紀子
歴史	史料を用いて歴史の闇に光を差す ～ある裁判官の失脚をめぐる～	立命館大学 文学部	山崎 有恒
環境	気候変動対策の現状と課題	名古屋大学 工学部	白川 博章
環境	カエルは必ずオタマジャクシを経るか？ —「常識はずれ」の発生学あれこれ—	岐阜大学 応用生物科学部	山本 謙也
環境	世界最大の加速器で探る素粒子と宇宙の謎	神戸大学 理学部	山崎 祐司
環境	地震時の建物の揺れ方と地震対策技術	関西大学 環境都市工学部	池永 昌容
環境	高校の物理・化学とロケット・航空機	中部大学 工学部	荻田 丈士
環境	「材料科学入門」～鉄，アルミニウム からレアメタルまで～	東北大学 工学部	竹田 修
医療	三重大学に求められている外科医療 —最先端外科治療を中心に	三重大学 医学部	水野 修吾

(2) グローバル・リーダー学（学校設定科目 1年で1単位（計2単位まで））

1, 2年生の生徒のうち、さらに研究内容を深めたいと希望する生徒168名（昨年度113名）を対象に「グローバル・マインド」で選択した小テーマについて、外部講師による講義を含め、土曜日に年間7回の授業を実施した。講義を通して新たな知見を



得て広い視野を養うとともに、講師との対話及び数名のグループ内での意見交換や討論を実施し、思考力、表現力の育成を図った。講義の進め方について工夫するとともに、授業の進行や議論の活性化を担う担当教員を講座毎に3名体制とするなどの改善を図ったことにより、生徒は質の高い課題研究を行うことができた。講師依頼や講座展開方法については、昨年度の生徒アンケートにて学びたい講師の把握を行い、生徒からの評価が高かった講師を選定して依頼したり、複数の小テーマグループが合同で講座実施することで相乗効果が得られた講義演習内容を本年度も計画したりして、生徒の興味・関心を引き出すことができる講師陣に依頼することができた。こうした取組により、質の高い課題研究を行うことができ、その成果については、交流会・発表会等を通じて一般生徒にも還元することで、学校全体への広がりを図った。すべての授業終了後には閉講式を行い、1年間の振り返りを行うとともに、受講アンケートも行った。アンケートから、問「論文を作成・発表した経験は、あなたにとってプラスになりましたか」に対して昨年度よりも1ポイント高い概ね89%の生徒が論文作成の経験をプラスと考えていることから、グローバル課題について当事者意識を持って取り組めたと考えられる。記述のコメントには、「他人が納得する主張を適切な根拠と共に明確に述べ、PCを使いまとめるという作業全般を通して社会で必要なスキルを獲得できた」「発表したり質問を考えたりして、質問する楽しさを知ることができた」「他人の考えを取り入れつつ、今までとは違った形で自分の考えを表現できた」「論文を作成することで、どのような点から考察すれば新たに展開していけるか等を考えることで順序立てて物事を考える力を付けるきっかけとなった」などがあつた。

さらに、「グローバル・リーダー学」受講者のうち、希望する者の中から特に意欲と能力のある生徒を海外フィールドワークに派遣した。今年度は、カンボジア（生徒12名）及び中国（生徒12名）の両国にそれぞれ派遣した。参加生徒はこの海外フィールドワークを通して、グローバル化が進むこれからの社会における自らの在り方生き方を考える機会を得るとともに、現地において高校生や大学生との交流を行うことで、国際交流や国際友好及び国際平和の大切さを体感し、将来のグローバル・リーダーとしてのありようにヒントを得た。海外フィールドワークについては後に記載する。

また、他のSGH校との交流会にも積極的に参加し、共通のテーマについて考える中で、多様な意見や考え方に接するとともに、同じSGH校生徒同士の親交を深め、お互いに好影響を与え合うことができた。

また、地元四日市商工会議所の協力を得て、グローバル企業見学会を実施し、キャリア教育を育成した。この詳細は後に記載する。

#### 【グローバル・リーダー学受講生徒数】

環境問題	: 27名 (1年 23名, 2年 4名)
教育・ボランティア・人権問題	: 20名 (1年 14名, 2年 6名)
文化研究	: 22名 (1年 19名, 2年 3名)
法・歴史研究	: 19名 (1年 18名, 2年 1名)
医療問題	: 39名 (1年 35名, 2年 4名)
グローバル・ビジネス	: 41名 (1年 34名, 2年 7名)
合計	: 168名 (1年 143名, 2年 25名)

① 「グローバル・リーダー学」講義の講師及び内容

(a) 第1回グローバル・リーダー学 5月12日(土)

<内容>

○あいさつ

三重県立四日市高等学校長 松岡 泰之

「SGHを学ぶ意義について」

○グローバル・リーダー学概要(1)

- ・SGH年間計画
- ・リーダー学講師予定表
- ・グローバル・マインドとの関係
- ・論文作成



松岡校長先生の挨拶

○講義1 「難民問題と国連の役割」

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 渉外担当官 古本 秀彦 様

内容： 国連難民高等弁務官事務所の古本秀彦さんから難民の現状や、UNHCRの活動、自らのイランやイエメンでの経験を踏まえて説明していただきました。途中には、「難民になった際に何が必要か」を疑似体験するワークを行なったりしました。その後、6つの小テーマごとに「難民」との関わりについてのお題が出され、15分という短い時間ながら各グループで活発な意見交換が交わされました。次に各グループでの話し合いの発表が行なわれ、次々と挙手してそれぞれの話し合った内容が報告されました。

「難民」に対する考え方や、自分たちの提言、あるいは「難民問題は自分たちが作っている」という発言もあり、講師の古本さんも驚くほど斬新で積極的な意見がたくさん出されました。終わってからの質問も時間の関係で3人で終わりましたが、まだまだ出そうな雰囲気、休憩をもとめる暇もないあっという間の3時間の講義でした。生徒達にとってはかなりインパクトのある講義内容だったのではないかと思います。



熱く語られる古本 様



小グループでの討論



グループ発表

○テーマ別分散会

テーマ別分散会では、各テーマ別担当者のもと、TA(ティーチング・アシスタント)の選定や連絡先の確認などが行われた。

最後に小テーマ別に集まり、ティーチング・アシスタントや小グループのリーダーを決めて終了となりました。

(b) 第2回グローバル・リーダー学 6月16日(土)

1年生

○講義・演習 「小論文・レポートの書き方」

○講師 三重大学教養教育院講師 和田 正法 様

2年生

○講義・演習 「論文のプレゼン作成, 発表」

○講師 SGH担当教諭 北川 貴史

<内容>

今回は1年生, 2年生別々のメニューで講義, 発表を行いました。1年生は昨年度同様, 三重大学の和田先生による, 「小論文・レポートの書き方」と題して研究論文の書き方の基本を講義していただき, 簡単なワークを行い各小グループで意見交換を行いました。一方, 2年生は北川教諭指導のもとで, 7月9日提出の論文について, 各小テーマグループで各自の論文内容を紙芝居風の資料を作成してプレゼン発表を行いました。



三重大学 和田先生



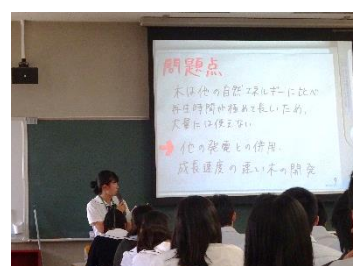
グループワーク



北川教諭




そして発表者1名を決定し, 休憩後2年生は1年生の会場に移動して, 全体での発表を行いました。環境問題, 教育・ボランティア・人権問題, 文化研究と法・歴史研究, 医療問題, グローバル・ビジネスの5テーマに関する発表をそれぞれ5分程度で行い, 全体での質疑応答のあと, 論文内容や発表等について和田先生からコメント指導をして頂きました。

発表生徒は, バイオマス, 震災時のトイレ, 少年法について, 糖尿病, AIなどどれも興味深いテーマで発表も堂々としており, 1年生からの質問に的確な応答ができていました。また1年生も非常に鋭い質問を投げかけ, 2年生との質疑応答も充実していました。自分の考えを発表し, それに対して周りの仲間と議論し, かつ質疑応答することでより深く考える機会が得られたのではないかと思います。これぞリーダー学という時間だったのではないかと思います。



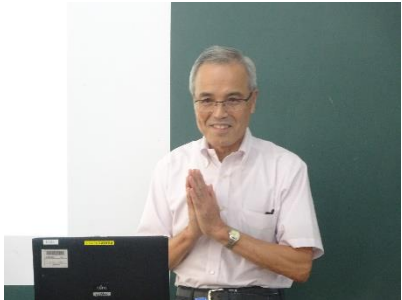

各テーマ代表者が発表する様子

(c) 第3回グローバル・リーダー学 6月30日(土)

<p>①環境問題</p>	<p>四日市公害と環境未来館                  未来館職員：井川 和道 様，小池 真理子 様                  環境保全課：桂山 航輔 様，木塚 晴久 様</p>
<p>講義タイトル</p>	<p>三重・四日市発，グローバル課題への提言</p>
<p>「環境問題は，科学技術，法律（システム），人々の意識の3つの観点が複合的に改善されて初めて問題解決につながる。」これが今回の講義や見学の中でも重要なキーワードであった。四日市公害と環境未来館にて四日市の歴史と現在の環境問題に関する取り組みについて学んだ。館内の見学では，公害裁判の歴史的背景や過程その後の経過，対策に関して，館内の視聴覚資料や職員の方の説明から具体的に学ぶことができた。その後，四日市公害の大気汚染常時監視や地球温暖化の現状・対策についての講義を受けた。</p> <p>グループ討論では，「森林破壊」「気候変動」「大気汚染」「酸性雨」「砂漠化」のそれぞれのテーマについて問題点，原因を洗い出し解決策を考え，発表を行った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<p>②教育・ボランティア・人権問題                  ⑥グローバル・ビジネス</p>	<p>独立行政法人 国際協力機構（JICA）                  東京国際センター経済基盤開発・環境課 三牧 純子 様</p>
<p>講義タイトル</p>	<p>キャリアを考える2</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・デザインスクールについて，国際協力から国際社会の発展を考える。</li> <li>・共創…天職とは？好きなこと，得意なこと，稼げること，世界が必要としていること の4要素が重要。</li> <li>・物事の見方について，視覚優位，聴覚優位，体感覚優位の3パターンがあり，それぞれ話し方や学習方法の違いがあり，自分がどれに該当するかワークショップ形式で確認。</li> <li>・シュブランガーの6つの価値観について，複数の質問に答えてどのパターンに該当するか確認し，異なる価値観で共同作業を行う必要がある。</li> <li>・将来に対してビジョンを持つことの大切さ                      15年後の自分の想像，究極の未来の想像を今のうちしておく。</li> </ul>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	

<b>③文化研究</b> <b>④法・歴史研究</b>	帝塚山大学文学部 文化創造学科教授 西山 厚 様
講義タイトル	「叡尊」こんな人がいた！
<p>鎌倉時代、奈良の西大寺の発展に尽力した叡尊という僧侶について講義をして頂いた。叡尊は「正しい仏教を盛んにすることで世界を変えることができる」と考え、人々を幸せにするために生涯をかけて活動を行った。</p> <p>この講義を受けて生徒からは「始めたことを貫き通すことの大切さ」や「昔のことを学び今について考えること」などについての感想や、叡尊の僧侶としての活動に幼い頃に亡くした母への思いがうかがえることに触れ、遠い昔のことであっても親近感を持って捉えている様子が見られた。</p> <p>質疑応答では、「叡尊が世界を救おうとしている時に当時の朝廷は何をしていたのか」などといった鋭い質問が飛び、生徒の熱心さがうかがえる時間となった。</p> <p>最後はグループワークを行い、生徒同士で活発な意見交換と本日のまとめを行った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<b>⑤医療問題</b>	社会医療法人社団正志会 南町田病院 二宮 宣文 様
講義タイトル	災害総論 外部からの医療支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新潟中越地震、スマトラ沖地震津波被害などについての説明。 災害の種類について、短期の自然災害には地震・竜巻・津波があり、長期の自然災害には洪水や干魃がある。また、自然災害とは別に人為災害がある。世界の災害被害者の死因は日本とは異なり餓死が多いことが特徴である。</li> <li>・災害サイクルから見た災害医療についての説明。 災害医療と救急医療について、災害発生直後は需要と（人的・物的）資源のバランスが崩れる。そのため救援（医師・看護師・救急隊員）を増やす一方で、患者を被災地から外に送ることが必要である。</li> <li>・日本の災害医療の現状展望について、救急災害システムが必要。 多くの災害現場の動画や画像を用いて、災害医療の現状についての説明があった。</li> <li>・約65万人のロヒンギャがバングラデシュに避難している問題について、難民キャンプの運営や、劣悪な水環境の改善などの説明があった。</li> <li>・講義の最後に、二宮先生の医師としての考えや、医療支援に対する思いの話があった。</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	

(d) 第4回グローバル・リーダー学 9月8日(土)

<p>①環境問題</p>	<p>宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 社友 (前副理事長) 樋口 清司 様</p>
<p>講義タイトル</p>	<p>宇宙の視座と地球環境問題入門</p>
<p>地球環境問題を宇宙から考えることの重要性や、現在の地球の現状を知るために地球観測衛星が活用されていることを学んだ。プラネタリーバウンダリーに関わる環境の各データを集めるために地球観測衛星が使用されており全データの約80%は地球観測衛星が無ければ得られないデータである。プラネタリーバウンダリーの中で生物多様性の項目は危険領域に入っており、一刻もはやい対策が必要である。環境、経済、社会の課題は相互に連携、複雑化しており、持続可能な社会を作るために、新しい価値観、人生観が変わる時代が来ている。そのような中で、それぞれ個々が意識をもって生活していかなければいけないことの重要性を学んだ。生徒達は宇宙の話にも関心を寄せていたが、身近な問題として環境問題の重要性をさらに認識できたようであった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<p>②教育・ボランティア・ 人権問題 ③文化研究</p>	<p>光文文化財団 常務理事/ 光文社古典新訳文庫 創刊編集長 駒井 稔 様</p>
<p>講義タイトル</p>	<p>古典新訳で世界の多様性を学ぼう</p>
<p>第1部・・・まず、ご自身の仕事の経験を数多く話していただく中で翻訳の奥深さをお話しいただき、ご自身の仕事に対するポリシーを感じることができました。</p> <p>～古典はなぜ敬遠されるのか～</p> <p>古典を読むことはそんなに大変なのか。世界の優れた古典作品は、本来魅力あふれる作品ばかり。</p> <p>～分かる翻訳、読める翻訳、楽しめる翻訳～</p> <p>少し昔、古典を読むことは必須の教養とされた。その訳は直訳調で難解。これでは古典を皆嫌いになる。しかし、今世紀になって古典の新訳が盛んになってきた。</p> <p>～村上春樹の新訳が与えた衝撃～</p> <p>『キャッチャー・イン・ザ・ライ』という代表作で名翻訳家の作品を全く新しい本に変えた大胆な新訳本。これを機に『新訳』という言葉が世界に広がった。</p> <p>～世界には異なる考え方があり、感じ方がある～</p> <p>SNSにより、従来では考えられない情報の流れが起きるようになる。→価値観の多様性を知らしめることに。</p> <p>～普遍性を学ぶべき時代～</p>	

文化的な他者との出会いが飛躍的に多くなった時代。その出会いをより深いところで受け止める力を養う必要がある。そのために世界の古典作品を学ぶことが最良ではないか。同時代の無数のテキストの中で、時代を超えて読み継がれてきたものだけが生き残る古典新訳。その普遍性を学ぶ時がきた。最近の風潮は、「十分に豊かになった我が国に、もはや外国の文化に学ぶところはない。」という考え方。そうではなく今こそ世界に対する興味を持つことがますます重要になってくる時代。欧米諸国だけではなく、ラテンアメリカ・アフリカ諸国の文化も学ぶべき対象になってきた。

古典はいつも新しい。わくわくするような現代作品として読むことができるものなんだと伝えたい。高校生の時に途中で挫折してもいいから古典に触れるべき。いろいろな年代で作品の感じ方が変わる。

## 第2部・・・「トゥルゲーネフ／沼野恭子・訳『初恋』」の読書会

昨年度も講義していただいたが、古典の奥深さに生徒達も改めて読書欲に駆られたようであった。



④法・歴史研究

⑥グローバル・ビジネス

日本社会事業大学学長・東京大学名誉教授 神野 直彦 様

講義タイトル

君たちはどう生きるかー経済学から考えるー

1. 学問とは、生きる「状況」を理解すること
2. 学問を学ぶということ：学ぶことは人間の心の中のプロセス、「栽培型」の教育に
3. 人間の「点」を創る：その人をたらしめている「点」がある。人間は人間と触れあいながら、人間になっていく
4. 部分ではなく、全体を：真理を追求する2つのアプローチ
5. 市場社会は要素市場が存在する社会：政治システム・経済システム・社会システムのしくみと構造
6. 自然環境と人的環境の破壊：現代の状況
7. 歴史の「峠」としての「危機」を乗り越える：軽工業→重工業→頭脳産業の変遷
8. 「所有欲求」から「存在欲求」へ：「ものの豊かさ」→「心の豊かさ」
9. 共同体の人間関係を補強する社会的セーフティネット：社会の基盤としての家族関係、スウェーデンモデル：国家は「国民の家」という社会観

以上の説明を聴講し、法・歴史研究、グローバル・ビジネスのグループで話し合い、質疑応答を行った。経済学は何なのか、日本経済をよくするには、教育について、AIとの関わり、経済学の力を使って強くなっている市場システムの力をおさえること、私たちはどう生

きるかなどについて討議したり，家族の定義，家族関係，家族についてスウェーデンモデルが取り入れられないかなどの質問が出され，それぞれ先生から解説や，コメントを頂いた。経済学というテーマから，家族や哲学に至る幅広い分野の内容について触れられ，生徒達は議論をして知識を深めたようであった。



### ⑤医療問題

鈴鹿医療科学大学学長 豊田 長康 様

講義タイトル

答えのない問題を考えてみよう

生徒がどのように考えているか，ボタンを押してPCで瞬時にわかる装置を駆使しながら大きく次のテーマについて話された。

#### 1. 倫理について考えさせられた個人的な経験

水頭症（頭部が肥大）の胎児を穿頭術（頭に穴を開けて脳や髄液を出し，頭を小さくして娩出させる）によって経膈分娩させる方法があるが，この処置により死亡する可能性が高い。もし，帝王切開に同意してもらえない場合，穿頭術を行うことは倫理的に許されるか。

#### 2. トロッコ問題が投げかける倫理的ジレンマ

結果が同じ事象に対して，その過程の違いによる倫理観の差がある。

→理性による判断と感情による判断の違い

#### 3. 人工妊娠中絶について，世界各国の制度の大きな違い

日本では，胎児異常による人工妊娠中絶は認められていない。

（多くの国では母親の求めに応じて可としている。）

人工妊娠中絶を前提とした出生前遺伝学的検査は倫理的に許されるか。

どの問題にも正解はなく，正解のない判断を迫られることが現実では多数起こる。先生の様々な問いかけに生徒達はグループ討議する中で深く考えることができた。常日頃から様々な場面でどのように対応していくのか考え続けていく必要があるだろう。





(e) 第5回グローバル・リーダー学 10月20日(土)

テーマ：各小テーマの抱える身近な課題とその解決策～グローバルな視点から～

講師：三重大学教養教育院講師 和田 正法 様

内容：「各小テーマ（環境、文化など）の抱える身近な課題とその解決策～グローバルな視点から～」と題してそれぞれの6つの分野に沿って、各テーマにおいて、事前にそれぞれが考えてきた課題と解決策をまず小グループで出し合って話し合い、それぞれ発表出来るよう、以下のように進めた。

①分野ごとに、各小グループでテーマを一つに絞りをポスター作成。（80分）

②分野ごとに、小グループのポスター発表。（30分）

③分野ごとの代表グループが大講義室で、リーダー学受講者全体の前でポスター発表、質疑応答、まとめ。（60分）

和田先生には、グローバル・ビジネスの分野でもポスター発表の作成、発表についてのアドバイスを頂き全体としては6本のポスター発表に関して、コメントを頂いた。本日の一連の活動の意義として、「作業を最後まで仕上げるための逆算する力」、「作業を仕上げる瞬発力」が意識されたことだと指摘して頂き、短時間でのポスター作成、発表についてお褒めの言葉を頂いた。



(f) 第6回グローバル・リーダー学 11月17日(土)

①環境問題	京都大学大学院教授 木村 亮 様
講義タイトル	発展途上国の道路環境を考える
<p>土木とは、環境を修復する活動であり、道を作る、治水、緑化など、普通の暮らしを支えていることや、何か問題・課題を発見したら、それを解決しようと思う気持ちと、使命感、技術革新が必要（Question→Passion→Mission→Innovation）であることを学んだ。</p> <p>また、観察力、問題の単純化、情報収集、言葉の壁を超えること、そして発想力が大切である。日本では90%以上の道が舗装されているが、世界、特にアフリカの国々では80%以上の道が舗装されておらず、雨季にはぬかるみ、通行できないほどの悪路となる。</p>	

道が整備されていないせいで、学校にも病院にも行けず、農作物を市場に売りに行くこともできないため、貧困が解消されない現状がある。道を整備することは、暮らしを豊かにすることに繋がっていく。機械を使わずに住民が自力で道を整備する方法として、木村先生は土嚢を使った工法を考案し、現地の人々に技術教育を行った。土嚢工法は低コストのためメンテナンスが必要だが、現地の人々が自力で行うことができるため、「自分たちでできる」という自信につながった。また、道が通れることによって現金調達が可能になり生活が豊かになる第一歩にもなった。木村先生は土嚢工法の普及活動を通じ、若者の雇用創出プロジェクトをビジネス化し、政府を巻き込んだ社会企業として発展途上国の手助けを行っている。



②教育・ボランティア・  
人権問題  
③文化研究

京都大学名誉教授 藤田正勝 様

講義タイトル

グローバル化時代における学問の意義—とくに人文学 (humanities) が果たす役割

グローバル化時代における学問の意義について、パワーポイントを用いながら高校生にもわかりやすく講義していただいた。

最初に「人文学」とは何か、その定義と現状について。人文学の重要性を理解するため、次にスコレー（閑暇）の重要性について。さらに自由学芸という考え方についてお話いただき、それを実現するのが大学（universitas）であると。最後に人文学が果たしてきた役割・果たすべき役割について。人文学は他者に開かれたものである。排他的なナショナリズムが力を持ち、民族や宗教、国家のあいだの対立や軋轢が深まっている現代において、改めて多様な文化や価値に目を向け、相互に理解しあうことが必要であり、そこで人文学が果たす役割は大きい。そのような地道な努力を通してしか、現代社会が抱える諸問題は解決されない、という言葉で締めくくってくださった。また次のような質疑応答がなされ、生徒の理解が深まった。

Q 進むグローバル化をどう考えるか。

A 立ち止まって考える必要がある。

Q 古典を対話的に読むとは具体的にどういうことか。

A 自分の知識や考えとの相違やズレなどをどう受け止めるか、相手にどう疑問を投げかけ、相手は何を答えてくれるのか、架空のイメージをもって読むということ。古代の文章は対話的に書かれたものが多く、自然と対話に引き込まれる。

Q 人文学で何をすればいいのか。

A 人と議論すること。たくさんの文章と対話する、疑問をもちながら文章を読むこと。

Q 現代の哲学者はどんな考えをもっているのか。

A 現代の哲学者には今回の講義内容について論じている人はあまりいない。文部科学省

が即利的な通達を出したときは多くの人が反対した。

Q 哲学を学ぶ面白さとは。

A 相手に自分の考えを伝えること。様々な人と議論すること。等々



#### ④法・歴史研究

三重大学人文学部教授 樹神 成 様

講義タイトル

記者殺害（サウジ），公文書破棄（日），T w i t t e r（米）から考える民主主義


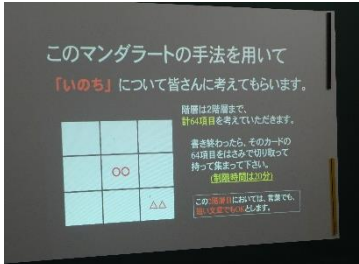



次の3つの話題について講義がなされました。

- ① シリア取材で拘束され、先日解放された安田純平氏や、トルコのサウジアラビア総領事館で殺害されたカショギ氏について、危険な取材を行うジャーナリストとその自己責任論の是非などについて。
- ② 経済産業省が公文書を書く際、「政治家との折衝について、個別のやりとりまで記録する必要はない」とする内部文書を作成していたことを題材に、情報公開と民主主義の関係性について。
- ③ トランプ大統領が自身に批判的なメディアを会見から退席させたことを受け、アメリカの新聞社が一斉に報道の自由を主張する社説を発表したことを題材に、権力者とマスコミの関係性について。

これらを受けて、生徒たちの意見交流、発表を行い、以下のような発言がなされました。

「ジャーナリストの自己責任論を語るには、まずその報道に意義があるかが重要。その意義とは、国民に利益を与えるかどうかである」「公文書の問題については、政府とつかず離れずの距離感で、独自に判断を下すことができる監視機関を置くべき」「フェイクニュースの問題について、トランプはメディアが国民の敵だという。では、メディアは誰の味方なのか。そもそもメディアが本当にいいものなのか疑わしい」



⑤医療問題	三重北医療センターいなべ総合病院 救急総合診療統括部長 久留宮 隆 様
講義タイトル	「私と医療」命をつなぐものー世界の医療の現状ー
<p>前半は講師の先生から国境なき医師団で実際に体験した時の話を、後半はマンダラートという手法で「いのち」についてのグループワークを行った。</p> <p>(前半) 世界のどこかでは常に戦争が行われており、十分な医療が受けられずに苦しむ人々が数多くいる。講師である久留宮先生は、紛争地域で医療活動に従事された経験をお持ちで、リベリア・シエラレオネ・ナイジェリア等の紛争地帯における過酷な医療活動の実態についてお話しされた。生徒は、けがや病気で苦しむ患者の実態や実際に行った手術に関して、興味深そうに聞いていた。</p> <p>(後半) マンダラートという手法を用いて、いのちから連想される物事を書き出し、ポスターにまとめて発表を行った。生徒たちは活発に話し合いを行い、命の大切さについて改めて考えることができた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>	
⑥グローバル・ビジネス	JICA 専門家元タンザニア産業貿易省政策アドバイザー 水野 由康 様
講義タイトル	もし君がアフリカの経済アドバイザーになったら？
<p>JICAでのアフリカ派遣の経験からアフリカの現状を説明しつつこれからのアフリカ支援について考えました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アフリカ経済のスクラップ&amp;ビルド</li> <li>・農産物輸出から、農産物加工業へ</li> <li>・タンザニアで活動する日本企業、日本人</li> <li>・自分が経済アドバイザーならどうするか？（ディスカッション）       <ol style="list-style-type: none"> <li>①国際規格を適用するべきか？村の生産者にその力は無い。</li> <li>②限られた資金を、老人医療に回すか？生産性の向上に回すか？</li> <li>③インド系大企業よりもアフリカ系企業を支援することは不公平か？</li> </ol> </li> </ul> <p>最後は、各班で話し合ったことをまとめて発表し合いました。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	

①環境問題	東京大学大学院農学生命科学研究科准教授 久保田 耕平 様
講義タイトル	生態系の生物間相互作用に及ぼす地球温暖化と外来生物の影響
<p>最初に食物連鎖と生物間相互作用についての講義の後、前半は地球温暖化によって、後半は外来生物によって生じる生物間相互作用への影響について、話をいただいた。また、前半・後半とも、それによってどのようなことが起こりえるのか、また、その影響を最小限にするためにどのようなことを行えばよいか、についてグループワークを行った。</p> <p>(前半) 生徒は、温暖化を食い止めるために自分たちに何ができるかについて互いの意見を積極的に交換していた。SNS等を通じて自ら発信していくことの大切さや、「何もしなければ何も変わらない。小さなことでも継続を。」という言葉に共感していた様子であった。</p> <p>(後半) 生徒は、外来生物による影響について意見交換し、班としての意見をまとめて発表を行った。今まで知らなかった外来生物やその影響について話を聞くことができ、深く考える機会となったようであった。</p>	
	
②教育・ボランティア・人権問題	ノンフィクション作家 中村 安希 様
講義タイトル	グローバル化社会における人権課題と解決に向けた取り組み
<p>高卒後、渡米されアメリカの大学を卒業。26歳から2年間に渡って世界47カ国を旅された経験などをもとにお話しいただいた。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 偏見：社会に潜むステレオタイプ・・・ 日常的に人をひとくくりに見てしまいがちである。例えば、人種によって偏った役ばかりがあてられたり、見た目だけでテロリストと思われてしまう。</li><li>2. 人権侵害：ロヒンギャ難民の例（ミャンマー&amp;バングラデシュ）・・・ 民族差別と迫害、信仰への抑圧、移動の制限、教育を受ける権利の侵害、女性差別と性暴力、SNSを使ったヘイトクライムなど不当な人権侵害が起こっている。</li><li>3. 解決にむけて：NPOの取り組み（日本）・・・ 日本難民支援協会、ビッグイシュー・ジャパンなどの活動について</li></ol>	

【グループ討議・発表】

グループで、「身近な偏見やステレオタイプ」または「身近な人権問題」を取り上げて話し合い、具体的な解決策を挙げる。各グループからは、「SNSを使った悪口」「男性の人権」「学歴と人権」「日本在住の外国人の人権」等について発表があり、講師先生からコメントをいただいた。



③文化研究

⑥グローバル・ビジネス

読賣テレビ放送株式会社

取締役（編成・制作・コンテンツ担当）小石川 伸哉 様（読売テレビ編成局マルチメディア推進部）辻出 国彦 様

講義タイトル



メディアの存在意義と将来のメディア，そしてテレビについて

メディアの歴史とテレビの歴史から話され、2002年のテレビ欄と当日のテレビ欄の番組構成を比較しながら、わかりやすく解説していただきました。また、少子高齢化する日本の現状を未来の人口動態について話され、メディアの社会的役割や、テレビ番組を中心にしたマルチメディア展開の実例（映画、配信、web、イベント、グッズ、海外展開など）を紹介していただきました。2つのことについてグループディスカッションをしました。

- ①「テレビ番組はずいぶん変わっていますが、この中から何を読み取ることができるでしょうか？テレビ界の変化、世の中の変化について、考えられることをまとめて下さい」
- ②「10年後のテレビ番組企画を考えよう」

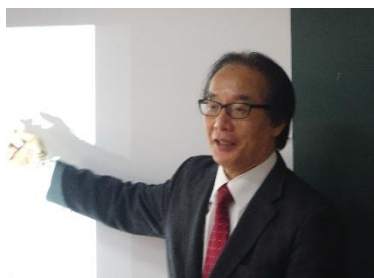
まとめ：②のディスカッションで、講師の方々から「生徒の皆さんが考えた企画は、VRなど現在検討中のものが多くあり、素晴らしいと思います。さらに、是非採用させてもらいたい企画もありました。編成に提案します。」と講評されました。



④法・歴史研究	名古屋大学大学院法学研究科教授 愛敬 浩二先生
講義タイトル	日本国憲法の普遍性と固有性 改憲論議のための準備運動
<p>・イギリスのEU離脱レファレンダムから何を学ぶべきか→Scottish nationalist partyの訳を例にとり、各主要人物の思惑や論調、さらにレファレンダムの結果の説明。</p> <p>・日本国憲法の普遍性について</p> <p>→憲法論議と改憲論議の違い。ブルックリン美術館事件と菊池寛全集事件を例にとり、芸術への公金支出と憲法との関係性の説明。芸術における市民の多数決による決定は可能かどうか。</p> <p>・立憲主義とは何か</p> <p>→個人の基本的人権の保障が目的であり、政府はそれをよりよく実現するための手段として知恵・工夫としての憲法がある。</p> <p>・憲法9条のリアリズム</p> <p>→戦後日本が「非武装」であったことは一瞬たりとも無い。自衛隊を合憲にただけで目的が達成するという事ではない。しっかりと政治家に議論してもらう必要がある。広く情報を集めて現状の課題を把握してほしい。9条の改憲議論については日本の利益だけを考えるのではなく、東アジアなどの情勢についても考えていく必要があるのでは。安全保障というのは自国だけの問題ではない。例えば中国との関係性は非常に興味深いものである。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
⑤医療問題	京都大学医学研究科・放射線遺伝学 武田 俊一 先生
講義タイトル	医学部卒業後のキャリア
<p>前半は、武田先生の履歴を中心に、今までに研究・体験した時の話や医者にとって必要な要素を語られました。医者は医学に関する膨大な知識を筋道立てて覚え、活用する能力と人間関係に気を配る能力が特に重要とされるようです。また、本当に医者になりたいのであれば、有名大学の医学部にこだわり何年も浪人するよりも、早く医学部に入学してキャリアを積む方が有益であり、特に若いときには積極的に海外留学をして自分の好きな研究に打ち込むことで貴重な体験や経験を積めると勧めてくれました</p> <p>後半は、今年ノーベル賞を受賞された本庶佑先生のガン免疫治療について紹介をされ、治療費用や日本の医療制度、医療保険等について語られました。途中で、「現在増え続け</p>	

る医療費の赤字を減らすためにどのような工夫をすることができるか」についてグループワークを行い、互いに発表を行いました。

最後に、四日市高校の卒業生で京大医学部に進学した生徒で、現在、スタンフォード大学で研修を受けている生徒とタイの大学病院で実習をしている二人を紹介されました。

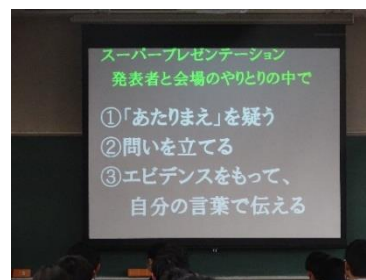
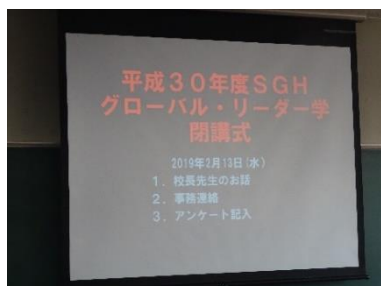


(h) 平成30年度グローバル・リーダー学 閉講式 2月13日(水)

今年度、グローバル・リーダー学の閉講式が行われました。

5月に第1回の開講式に始まり、168名の1, 2年生の生徒が、計7回の講義を受講しました。環境問題、教育・人権・ボランティア、文化研究、法・歴史研究、医療問題、グローバル・ビジネスの6つの小テーマに、のべ19人の講師先生から様々なお話を聞きました。そこで、グローバル・リーダーとしての知識や考え方を学び、また、同じグループの仲間と議論や発表を通してコミュニケーション・スキルを身につけてきました。

今回はそのまとめとして松岡校長先生から、その振り返りとして講話をしていただきました。先行きが不透明な未来に向けて、「持続可能な世界を実現する」「地球上の誰一人として取り残さない」というメッセージを生徒に伝えていただきました。5年間にわたるグローバル・リーダー学での数多くの講師先生から得た貴重な経験をまた引き続きSSH事業に引き継いでいけたらと思います。





② 海外フィールドワーク

(a) カンボジア海外研修

初年度から引き続き、今年度もカンボジア研修を計画・実施した。実施に当たっては、本校のSGH海外交流アドバイザーがJICA勤務の経験を生かして、本校が研究テーマとして設定している分野を幅広く学べる事を念頭に計画した。

<行程>平成30年12月16日(日)～21日(金)

参加生徒12名(1年:4名 2年:8名)

日時		研修場所・内容等
12/16(日)	8:00	中部国際空港集合
	10:00	中部国際空港出発(ベトナム航空VN341便)
	16:05	ホーチミン空港発(VN920便)
	17:00	プノンペン到着
	20:30	ホテル到着
	21:00	ミーティング(ホテル)
	12/17(月)	8:00
8:30		JICA事務所訪問
10:10		JMAS事務所訪問
14:00		トゥールスレン虐殺博物館
16:00		地元マーケット視察
20:30		ミーティング(ホテル)
12/18(火)		8:00
	10:00	カンボジア日本友好学園(プレイベン州) ・学校視察 ・ホームビジット
	18:30	本校卒業生山口さん講義(ホテル)
	20:30	ミーティング(ホテル)
	12/19(水)	8:00
9:00	Tonle Bati(トンレバティ)遺跡見学	
10:30	キリングフィールド見学	
13:00	クラタ・ペッパー訪問	
14:00	ひろしまハウス訪問	
15:00	王宮見学	
17:00	イオンSC視察	
19:30	ミーティング(ホテル)	
12/20(木)	9:10	ホテル発
	10:00	王立法経大学訪問 ・大学生との交流
	15:00	セントラルマーケット
	21:10	プノンペン国際空港出発(VN3850便)
	22:10	ホーチミン国際空港着
12/21(金)	00:35	ホーチミン国際空港乗継(VN346便)
	7:35	中部国際空港到着

<主な訪問施設と訪問日，探究活動となるテーマ>

[12月17日]

・国際協力機構（JICA）（環境問題）

外務省所管の独立行政法人，我が国のODA（政府開発援助）の実施機関。世界80カ国余に海外拠点を持ち，発展途上国に対する資金協力，技術協力，ボランティア派遣等を行う。JICAカンボジア事務所は1993年開設。1991年まで続いた内戦で荒廃したカンボジアに対して，経済インフラの整備，保健，医療，教育から，現地に進出する民間企業の支援まで，幅広い分野で活動を展開している。

・日本地雷処理を支援する会（JMAS）（歴史問題，環境問題）

地雷処理，不発弾処理を支援する団体で，自衛官経験者が中核となって活動している。これら爆発物の処理活動は非常に危険であり，特別な訓練を受けていない一般のNGOでは実際の処理は事実上不可能とも言える。海外のNGOでも，地雷を始めとした爆発物処理に成果を上げているのは軍歴経験者が中核となった団体のみとなっている。JMASは，これら海外の例に倣い，軍事知識の豊富な元自衛官が積極的に関わることで，実際に成果を上げている。2002年（平成14年）7月1日，カンボジア・プレイベーン州における不発弾処理から活動を開始。2008年度（平成20年度）から，カンボジアとアンゴラで地雷除去機を使用した地雷除去活動を開始。同時に，井戸の掘削，地雷を除去した跡地への学校建設や道路整備，文房具などの寄付活動を行っている。また，現地住民の地雷事故防止のため，パンフレットや紙芝居を使って地雷の危険性の周知徹底・啓蒙活動を行っている。

・トゥールスレン虐殺博物館（人権）

1976～79年，クメール・ルージュ支配下のカンボジアにおいて，知識人を収容し，「政治犯」との名目で拷問・虐殺をおこなっていたS21収容所が現在博物館として公開されている。ポルポト時代の負の歴史を現在に伝える。

[12月18日]

・カンボジア日本友好学園（教育問題）

カンボジア内戦時代，共同通信の記者で，ポルポトの虐殺を逃れて難民として来日したコン・ボーン氏が，「内戦で復興した国の未来を作るのは良質の教育しかない」との理念のもとに，1999年にプレイベーン州に設立した中高一貫校。1日6時間の正規授業，規律正しい学校生活，教師のアルバイト禁止など，日本式の教育方法を取り入れ，日本人ボランティアが常駐し日本語の授業を受け持つ。貧しい家庭の子供たちも奨学金を得て学んでおり，寄宿舎もある。コン・ボーン氏は，カンボジアにおける教育への貢献が認められ，2014年秋の叙勲で旭日小綬賞を授与された。今回は現地の高校生と交流を行う。

[12月19日]

・Tonle Bati (トンレバティ)遺跡 (文化研究)

トンレバティは、プノンペンから南におよそ35キロメートル進んだ先にある湖である。アンコールワット時代の歴史的な寺院もある。この寺院は12世紀後半のアンコールワット時代に建てられたとされ、カンボジアの歴史を垣間見ることができる。歴史的な建造物のみならず、現代寺院も建っており、地元の人たちが参拝をしている様子が見える。

・キリングフィールド (歴史問題, 人権問題)

クメール・ルージュの秘密警察は、知識人・伝統文化継承者・教師・宗教関係者などを反革命的な者と見なして次々と殺害した。後には、クメール・ルージュの地方機関や事業所の幹部までもが反乱の恐れ有りとして殺害されていった。これら多数のカンボジア人が殺害された刑場である。

・クラタ・ペッパー (グローバル・ビジネス, 文化研究)

1997年創業のコショウ専門店。高品質のカンボジア胡椒は「Kurata Pepper」ブランドとして日本のみならずヨーロッパでも高い評価を得ている。内戦で荒廃したコショウ生産を復興させたいとの思いから現地で起業した倉田浩伸社長 (津市出身) を訪問し、ソーシャルビジネスやカンボジアに寄せる思いを聞く。

・ひろしまハウス (教育・ボランティア・人権問題, 歴史問題)

ひろしまハウスは、カンボジアの首都プノンペンにあるウナローム寺院に、ひろしまとカンボジアの平和と友好を祈念して建てられた。現在、貧困家庭の児童を対象に無償で教育と給食の支援をしている。

・王宮 (文化研究)

1886年に創建され、のちにフランス人の建築家により、レンガ造りの建物に改装された。現在も王宮として使われている。王宮とともに、ノロドム王時代に王室の菩提寺として建立された寺院シルバーパゴダやロドム王時代に建立されたかつての木造寺院チャンチャーヤ館などを見学した。

[12月20日]

・カンボジア王立法経大学 (法・歴史問題, 教育問題)

名古屋大学は、アジア8か所に「日本法教育研究センター」を設立し、現地の優秀な人材に日本語教育および法律の授業を行っている。その一つであるカンボジア王立法経大学を訪問し、授業風景の見学や、日本語を学ぶ大学生と交流やディスカッションを行う。



JICA



JMAS



カンボジア日本友好学園



クラタ・ペッパー



ひろしまハウス



王立法経大学



Tonle Bati 遺跡



王宮

## 『生徒アンケート結果』

- (ア) 今回のプログラム中、自身にとって最も影響を受けた、または印象に残った訪問場所（例：カンボジア日本友好学園、キリングフィールド等）や事柄（現地の人との出会い、食文化、等）を3つ選び、なぜ印象に残ったのかを記入してください。

### <訪問場所>

#### ◆カンボジア日本友好学園

- ・日本からたくさんの支援を受けていることを知って自分は何もしてないけど母国に誇りを持ってました。生徒たちのなんでも積極的にやってみる精神に感動しました。
- ・日本友好学園でとても仲良くなった友達が別れの時に泣いてくれたときに、こんなにも短時間で人と人の心は国境、民族、言語の壁を超えてつながることができるということを確認できた。
- ・カンボジア日本友好学園の生徒はとても積極的で、私たちが質問など出来ずに会話が止まった時も彼らがたくさん質問してくれた。また、彼らは勉強熱心で、学校が終わったらそこから3時間くらい塾で勉強すると話してくれた。家では電気がないから勉強しないようなことも言っていた。彼らは勉強できる時間が少ない中で必死に勉強しているにもかかわらず、私たちは勉強できる時間がたくさんあるのにダラダラしてしまっていることに気付き、彼らに申し訳ないような気がしたと同時に、もっと時間を有効活用しようと思った。
- ・ホームビジットで私が訪問した家庭は農家の家で、高床式の家には部屋は1つしかなく、電気も電球が1つだけ部屋の中央にぶら下がっているだけだった。そんな環境の中でも勉強が好きだと言っていて、楽しそうに遊びも勉強も一生懸命取り組んでいる生徒の方の姿に元気をもらえて、また私も頑張らないと思わされた。

#### ◆王立法経大学

- ・学生さんのレベルの高さと、積極性に刺激を受けたから。

#### ◆トゥールスレン虐殺博物館

- ・収容所であった建物がそのまま残されていて、大虐殺というのは本当にあったことなんだという実感がわきました。たくさんの絵があって当時のカンボジア人の苦悩がよくわかりました。
- ・ポルポト政権の暗い歴史については事前学習で調べたつもりでいたが、実際その場に行ってみると空気がとても重くなった気がして、写真や絵を見ていると収監されていた人々の悲しみがしみじみと伝わってきた。また、実際に収監・拷問されていた Chum Mey さんにお会いすることが出来て、このような歴史がまだまだ遠い昔というわけではないことを実感した。

#### ◆キリングフィールド

- ・ポルポトの大虐殺時代のことは事前学習で勉強してきていても、その残酷さは、このキリングフィールドで実際に自分の目で見て感じないと分からないことがたくさんあった。
- ・ここでは、ポルポト政権の時に無惨に殺されたたくさんの人の遺骨や処刑場、殺す時に使った武器などを見ました。想像以上に生々しくて、かなりのショックを受けました。たくさんの罪のない人々が酷いやり方で殺されていたのを聞いたり、たくさんの亀裂や穴の空いた頭蓋骨を見て、絶対にこれから再びこんなことを起こしてはいけないと再認識しました。

◆ひろしまハウス

- ・カンボジアの普通の子供達の生活を見れた。充分じゃない教育を受けていることは授業を見て話を聞くだけでわかった。これからカンボジアを発展させるには教育という分野を強化する必要があると思えた。
- ・ここで1番印象に残ったのは、現地に着くと子供達が会うたび会うたび、大きな声で「こんにちは！」と言ってくれたことです。とても気持ちが良くて、今でも心に残っています。驚いたこととしては、授業で間違えた場合に顔にペンで書かれるというのは、日本では絶対にありえないので流石に驚きました。授業中はすごくみんな楽しそうで、私も入りたいぐらいでした。

◆JICA

- ・JICAは海外で働けるという部分ですごく興味を持っていたので楽しみにしていました。自分が思っていたよりJICAの存在は大きく、たくさんの人を助けていることを知り、より魅力を感じました。結果がでるのは何年もかかると知りながら一所懸命に仕事をする職員さん達はすごく輝いて見えました。

◆クラタ・ペッパー

- ・倉田さんの話を聞いていままで気づかなかったけど実は価値観を固定してしまっていて、外国を支援する時も相手は何も出来ないと考えてしまうけど、実際は相手の国のことは現地の人が1番知っていてその価値観を変えるのが大事だと思いました。

<事柄>

◇現地の人々、現地でがんばる日本人の方との関わり

- ・フレンドリーに話しかけてくれたり、日本について積極的に知ろうとしたりして関わってくれたのが嬉しかったし、初対面でも打ち解けることができた。
- ・現地の人との出会い地雷で足をなくし右耳も聞こえなくなった人と会話をして、どんな困難にも絶望せず笑顔の彼に衝撃を受けた。
- ・マーケットで、日本の学校ではなく現地という場所で、実際に現地の人とコミュニケーションを取ることができ、普段学校では学べない他国の人とのコミュニケーションを体験した。

◇バスの車窓に映る風景

- ・プノンペンの市街地や一面に広がる田んぼなど、見たことない風景に釘付けになった。地平線を初めて見て、世界の大きさを感じた。しかし、路上にゴミが多いことがすごく気になった。子どもたちが缶のポイ捨てをしているところを見たので、まだまだ街の美化という意識や教育が足りないのかなと思った。
- ・プノンペンには高層ビルが建っていたり道路がしっかり整備されていたりして発展していると感じたが、カンボジア日本友好学園の近くは建物のほとんどが二階建てで道路もボコボコしていた。日本と比べて都会と地方の貧富の差がこのようにとても大きいことに驚いた。

(1) ツアー参加前、カンボジアに対してどんなイメージを持っていましたか？ またそれは、参加後にどのように変わりましたか？

- ・カンボジアは小学生の頃に本とテレビで知り、地雷が埋まっている農村地帯が広がっているイメージがあった。また、ハーブが有名という話も聞いたことがあり、かなり自然が豊

かなところだと思っていた。あと、西原理恵子の漫画でたびたび登場しており、物乞いの子どもたちがいるぐらい貧しい国というイメージがあった。

実際、自然は豊かだが、プノンペンビルばかりで驚いた。みんなスマートフォンを持っているし、想像以上に経済が発展していて驚いた。農業が豊かなことを利用してビジネスをするのはぴったりだなと納得した。だれでも成功するチャンスを得られる夢のある国だという新たなイメージを持った。

- ・ ツアー参加前は、カンボジアは日本より貧しい国だと思っていました。参加後は、実際に経済的には日本より貧しい部分もあるけれど、それが日本より豊かでないと表現するのは正しくないということに気づきました。カンボジアの生徒さんたちは何をするときもとても楽しそうで、何かに困っているようには見えないうらい生き生きとしていて、本当の豊かさの意味を知っているのはカンボジアの人たちなのかもしれないと思いました。
- ・ 行く前には想像していなかった1番大きな違いはカンボジアの人は誰もが幸せそうな笑顔だったこと。 けっして余裕のある生活とは思えなかったが、カンボジア友好学園の時にいったホームビジットでは向こうの家族は暖かく迎えてくれて、飲み物や食べ物まで豪華に振舞ってくれてとても感動した。

(ウ) 今回のツアーを通じて、以下の点で自分の中で以下のような変化がありましたか？

(5 = とてもそう思う, 4 = どちらかといえばそう思う, 3 = どちらでもない, 2 = あまりそう思わない, 1 = まったくそう思わない)

(1) コミュニケーション力について

①初めて会う人とも積極的に話せるようになった

⑤7名 ④5名 ③0名 ②0人 ①0人

②英語力が高まった

⑤1名 ④8名 ③3名 ②0名 ①0人

③語学力を高める必要性を感じた

⑤10名 ④2名 ③0名 ②0人 ①0人

(2) 意識・態度の変化について

①様々な課題により関心を持つようになった

⑤11名 ④1名 ③0名 ②0人 ①0人

②もっといろいろな国に行ってみたいと思うようになった

⑤10名 ④1名 ③1名 ②0人 ①0人

③次世代を担う一員として、何かしなければと感じた

⑤11名 ④1名 ③0名 ②0人 ①0人

④積極的に新しいことにチャレンジしたいと思うようになった

⑤11名 ④1名 ③0名 ②0人 ①0人

⑤日本人としての自覚をより強く持つようになった

⑤4名 ④5名 ③3名 ②0人 ①0人

⑥異なる文化や価値観を持つ人ともやっつけける自信がついた

⑤8名 ④3名 ③1名 ②0人 ①0人

⑦上記①～⑥以外で、自分の中で何か意識や価値観に変化がありましたか？あれば、それはどんなことですか？

- ・ 少しでも気になったり、気づいたり、疑問に思ったりしたら、必ず質問をして解決しようという意識を持つことができた。そこから新たな気づきを得て、話がより深く入

ってくることを実感した。

- ・自分は視野を広げることができた。国際協力という目標を持って働く人を見て、また仕事内容を聞いて、世界の人を助けるのはたくさんの方があることに気付かされた。だからたくさんの方のことをみて自分にあった貢献の仕方を考えることが大切だとも思った。
- ・この研修を通して豊かさ 幸せ やはりの2つが1番考えさせられたものです。今までこの2つについて考えたことも違いも分からなかったけど、今カンボジアと日本の2カ国をみた自分だからこそ気づきがありました。これからもこの2つについて考えていきたいと思います。
- ・今までは目の前のことだったり、自分のことだけだったり、狭い視野の中で生きてきて、沢山の人の力を借りて甘えながら生きてきたけど、今回の研修により自立することの大切さと難しさを知りました。他の国について知る前にまずは自分が生まれ育った日本をよく知ることが異文化理解をするうえで大切だと思った。

(エ) 今回のツアーへの参加により、今後の進路や将来の夢に何か影響がありましたか？

- ・今まで記者になりたいという夢があったが、今回のツアーで、世界を股にかけて、記者として活躍したいという思いが強くなった。また、起業にもすごく興味を持った。自分の全く知らないところで、試行錯誤して、成功を目指すことにすごくかっこいいと思う。そして、JICAで働くということもいいなと思った。プロジェクトを成功させるために、みんなで協力して立ち向かって行くことに憧れを感じた。他にも一緒に行ったみんなの夢を聞くことができてすごく刺激を受けた。
- ・はじめは、自分の将来の夢と今の自分がかけ離れ過ぎているから、夢を諦めた方がいいのかなと思っていました。しかし、「Happy Day」での昼食の時にオーナーの人の言葉を聞いたり、カンボジアの子供達の何事にも一生懸命に取り組んでいる姿を見るうちに、やっぱり自分のやりたいことは貫き通して真っ直ぐに頑張ろうと思うようになりました。またその他にも、いろんな国で働いてみたいと思うようになりました。日本にずっと暮らして働くのではなく、行ったことのない国に行ってたくさんの方と関わってみたい。
- ・私はもともと大学に進んだら工学部に入って何か人の役に立つ物を開発したいと思っていましたが、その「人の役に立つ物」というのがあまりはっきりしていなかった。しかし、今回の研修のおかげで、「発展途上国の人の役に立つ物」を作りたいと思った。例えば、先進国の方がより便利に生活できる製品を開発するよりも、発展途上国の人のための安い値段で効率よく農業が出来る機械を開発する方がいいと思ったし、もっと発展途上国の人のために自分の知識を活かしていきたいと思った。
- ・今回を通して、海外に目を向け、JICAやひろしまハウスなどの子供にかかわる仕事につけたらいいなと思いました。その2つは決して簡単ではないと行って感じましたが、それでも多くの人に感謝される仕事であるので、挑戦したいと思いました。今できることはもっともっと現状を知ることだと思っています。

(オ) これから、カンボジアと何らかの形で関係を保っていききたいと思いませんか？

- ・これからもカンボジアと関係を保ちたいと思う。自分が大人になってからもカンボジアがどれだけ発展したのかプライベートで旅行に行き感じたいと思ったし、仕事でもカンボ



ジアに関係出来たらいいなと思えた。

- ・日本友好学園や王立法経大学の人たちと Facebook で何人か繋がったので、この出会いを無駄にしないために頻繁にメッセージのやりとりをしていこうと思います。たくさんのカンボジア人と交流することで、カンボジアについて理解を深め、学んだことをたくさん日本人に発信してカンボジアについて関心を持ってもらいたいです。
- ・ひろしまハウスに何度も遊びに来てしまうという女性の話聞いて、次カンボジアに来た時には私ももう一度ひろしまハウスを訪問し、日本語や日本の文化を伝えたいと思います。

(カ) S G H海外FWとしてのカンボジア研修は今回で終了しますが、プログラムの全体の印象など、何か思うことがあれば自由にお書き下さい。

- ・初めて行った海外ということもあり、たった5日だったけど沢山の発見や沢山の出会いもあり、カンボジアという国が大好きになりました。日本は経済的には豊かなのかもしれないけれど、カンボジアは人柄が豊かな人ばかりで、豊かな人に囲まれて会話したり一緒に遊んだりすると自分の生き方や自分の考え方を見直すことができました。それだけでなく、何事にも一生懸命取り組んでいた現地の方々を見ると元気や勇気をもらえました。
- ・行く前に、事前にカンボジアのことについて調べたのですが、実際に行ってみると想像とは全く違いました。とても素敵な国で、日本では絶対できないような貴重な体験もたくさんできました。本当に今回この海外研修に参加できてよかったと心から思ったし、一生の思い出です。ありがとうございました。
- ・このS G Hの企画は素晴らしい企画だと思った。高校生のうちにこのような発展途上国に行く機会は滅多にないと思うし、海外と言ったらほとんどの人は先進国に行きたがると思うので、本当に自分はこのような経験をさせてもらえてよかったと思う。
- ・S G Hを2年間とって得たものは計り知れません。四日市高校に来ていなかったら、S G Hを通して世界を少しでも知ることはなかったし、知ろうともしていなかったと思います。また海外と関係をもつ職業につきたいという感情も生まれなかったと思います。やりたいことが見つけられて本当に良かったです。

(b) 中国（天津）海外研修

今年度で4度目となるこの研修は、本校SGH運営指導委員会が橋渡しをして実現できたプログラムである。地元企業や自治体と連携することで実現できた。日本に流れてくる情報だけでなく、海外を自分の目で見て知ることの重要性を感じる事ができる研修となっている。

<行程>

平成30年12月16日（日）～12月20日（木）

参加生徒12名（1年：6名 2年：6名）

日時	場所	現地時間	行程・内容
12/16 (日)	中部国際空港  天 津	8:30	中部国際空港集合 * 出国手続き
		11:00	空路 天津へ (JL841)
		13:25	天津国際空港
		15:30	周恩来記念館
		16:30	天津広播電視塔 解放北路 (車窓見学)
		20:00	ホテル到着
12/17 (月)	天 津	9:30	天津外国語大学附属外国語学校 * 学校説明, 授業見学, 交流会
		15:00	商業施設(イオン)
		20:00	ホテル到着
12/18 (火)	天 津	8:30	天津中医薬大学 到着 * 学校説明, 病院見学
		13:00	楊柳青博物館・石家大院
		18:00	天津民族博物館見学, 古文化街
		20:00	ホテル到着
12/19 (水)	天 津	9:00	天津理工大学 * 施設見学, 授業見学, 交流会
		14:00	万亩農業模範基地 * 訪問見学
		15:00	香奈維斯(天津)食品有限公司 * 太陽化学株式会社現地法人訪問工場見学
		20:00	ホテル到着
12/20 (木)	天 津	9:00	近代天津博物館
		10:00	五大道見学
		12:30	天津国際空港 到着 * 出国手続き 17:45到着予定
	中部国際空港	14:35	空路 中部国際空港へ (JL840)
		18:20	中部国際空港 到着
		18:45	解散

主な訪問施設と訪問日，探求活動となるテーマ

[12月16日]

- ・周恩来鄧穎超記念館（歴史問題，文化研究）

中華人民共和国初代首相・周恩来とその妻・鄧穎超に関する記念館。周恩来の幼少青年期から中国建国の歩み，首相としての業績などテーマ別に展示されている。

[12月17日]

- ・天津外国語大学附属天津外国語学校（教育問題，文化研究）

英語と日本語を専攻している生徒たちとの交流を中心に計画。中学校段階から英語の他に第2外国語を学んでおり，中国での語学教育の充実さがうかがえる。滞在先の同年代の生徒との交流を行う機会として，生徒の満足度も高い。

[12月18日]

- ・天津中医薬大学（医療問題，教育問題，文化研究）

中国で初めての伝統医学を教える大学として設立され，医学部をはじめとする4つの学部が設置されている。兵庫県神戸市に日本校がある。学生の研修室や実験室で実験器具や模型の見学や実演，治療中の診察室やリハビリ室にまで見学できる貴重な機会となる。

- ・楊柳青博物館・石家大院（歴史問題，文化研究）

楊柳青鎮は1000年以上の歴史を持つ中国北方地区有数の古鎮として知られる町。版画や凧など多くの民間芸術が花開いた。町中には露天が出ており市民の観光地になっている。

- ・古文化街・天后宮（文化研究）

800年の歴史を持つ古い町並み。天津の発祥の地ともいえる場所。中心に天后宮という海の女神を祭った廟があり廟内を見学。約600mの通り沿いには古い書籍や玩具，伝統的手工芸品，飲食物などを扱う店が建ち並ぶ観光地となっている。

[12月19日]

- ・天津理工大学（教育問題，文化研究）

学生数26202人（聴講生10000人以上），教職員数1877人。61の学士号，69の修士号が習得できる。「理工」大学だが，外国語やビジネス，法政治学，中国文化などについても学習することができる。海外からの留学生も多く学ぶ。

- ・万亩農業模範基地（グローバルビジネス，環境問題）

国家農業総合開発計画の一環で21世紀に入ってから設立された。育苗研究やバイオテクノロジーを利用した生産研究，微生物を利用した有機栽培野菜の研究をしている。何カ所かのビニールハウスでプチトマト，スターフルーツ，唐辛子，茄子を栽培している様子を見学。最近ではみみずの養殖研究を始めた。

- ・香奈維斯（天津）食品有限公司（グローバルビジネス）

三重県四日市市に本社を置く太陽化学株式会社の現地法人。近年の中国市場の食の欧米化にともない，さらなるベーカリー事業を目指し株式会社フランソワ（本社福岡市）と合弁してベーカリー事業をおこなう現地法人を設立した。

中国のセブンイレブンで販売される食パンや菓子パンのうち、北京の60%、天津の80%が同社の製品。会社概要の説明を受けた後、工場見学を行う。

[12月20日]

・近代天津博物館から五大道（文化研究）

1953年に開館した歴史博物館。10万点を超える貴重な資料が展示されており、天津の歴史と文化を細かく紹介している。五大道は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてイギリス租界だった場所。多くの西洋人が居を構え、天津を特徴づける町並みとして多くの人を引きつけている。



楊柳青博物館



天津外国語大学附属天津外国語学校



天津中医薬大学



天津理工大学



双街万亩農業示範基地



香奈維斯（天津）食品有限公司

『生徒アンケート結果』

<訪問場所>

(ア) 次の質問に対して、①～④の中から選んで回答してください。(記述含む)

<④とてもそう思う ③そう思う ②そう思わない ①全くそう思わない>

Q. 周恩来記念館はよかったですか？

④ 5人 ③ 7人 ② 0人 ① 0人

- ・中国の歴史と中国人の愛国心が良く分かった
- ・世界史で習った知識をさらに深めることが出来た

Q. 天津の西洋建築群・五大道散策はよかったですか？

④ 7人 ③ 5人 ② 0人 ① 0人

- ・劉さんの分かりやすい説明のお陰でとても良かった。
- ・異国情緒溢れる街並みが良かった。

Q. 楊柳青博物館(石家大院)はよかったですか？

④ 8人 ③ 3人 ② 1人 ① 0人

- ・歴史的な建造物を見ることで中国の歴史的な文化や暮らしがよく分かり、面白かった。
- ・天津の歴史を詳しく学ぶことができました。世界史で習ったこともたくさんあった(袁世凱など)。

Q. 天后宮・古文化街はよかったですか？

④ 10人 ③ 2人 ② 0人 ① 0人

- ・歴史的な感じを味わうことができよかったです。
- ・店の人が優しくかった。映画に出てきそうな町並みだった。

Q. 天津外国語大学附属外国語学校での研修はよかったですか？

④ 12人 ③ 0人 ② 0人 ① 0人

- ・英語の授業が生徒主体で生徒も積極的で日本も見習うべきだと思った。
- ・日本の英語教育も生徒が主体的に発表して、先生が効果的に進行出来るようなシステム整備が必要だと思った。
- ・英語専攻したいので刺激になりました。
- ・中国の教育事情がよくわかったし、学生交流も楽しかった。
- ・中国の教育水準の高さにすごく驚いた。自分も勉強を頑張ろうと改めて思うことができた。

Q. 天津中医薬大学での研修はよかったですか？

④ 9人 ③ 3人 ② 0人 ① 0人

- ・東洋医学を専門に学べる医大を日本ではあまり聞かなかつたので、東洋と西洋の医学を融合させようという姿勢が興味深かった。
- ・舌で健康を判断する機械など普段では見ることの出来ないものまで見せてもらえてよかった。大学生にもたくさん質問ができてよかった。
- ・今まで針や灸について触れる機会がなかったのでよかった。去年のように実際に病院の方へ行ければなお良かった。

Q. 天津理工大学での研修はよかったですか？

④ 8人 ③ 3人 ② 1人 ① 0人

- ・留学生が目的をしっかり持っていて私も見習いたいと思った。
- ・工場を模した学習環境を見て、常に生徒の将来の活動を意識していることが面白いと思った。
- ・留学生の方々のお話はとてもためになった。
- ・すごく広く感じた。また設備がとても整っていた。質問ができてよかった。

Q. 万亩農業示範基地での研修はよかったですか？

④ 11人 ③ 1人 ② 0人 ① 0人

- ・ドラゴンフルーツの実の色が赤くて衝撃だった。
- ・日本ではあまり見られない大規模で頑丈なビニールハウスに、日本でも応用が可能ではないかと思った。

Q. \*香奈維斯（天津）有限公司での研修はよかったですか \*太陽化学現地法人

④ 9人 ③ 3人 ② 0人 ① 0人

- ・清潔感があってこれまでの中国のイメージが覆された。
- ・日本のパンと味がほとんど同じですごくおいしかった。また現地の人々の工夫がたくさん聞けてよかった。

Q. 天津近代博物館の見学はよかったですか

④ 9人 ③ 3人 ② 0人 ① 0人

- ・中国の近代化の歴史から、日本との交流も学ぶことができたので良かった
- ・自由時間が長くじっくりと見ることができた。世界史で習ったことが出てきて復習になった。

(イ) 研修地の中で「よかった場所（研修）」を書いて下さい。

天津外国語大学附属外国語学校	8人,	后宮・古文化街	7人
香奈維視（天津）有限公司	7人,	イオン天津	4人
天津理工大学	2人,	天津中医薬大学	2人
万亩農業示範基地	2人,	天津近代博物館	1人

(ロ) 研修前と研修後の中国のイメージに変化はありましたか？

- ・中国の人達は日本人と聞くと嫌な顔をされると思ったが、触れ合った人は優しくしてくれ、見方が変わった。
- ・「近代化した中国」というイメージが掴みにくかったが、現物を見ることで近代化のレベルを直に見ることができて良かった。
- ・もっと空気が汚いと思っていたけれどあまり気にならない程度でした。
- ・中国は不親切な人が多い、料理があまりおいしくないなど勝手な偏見を持っていたけど全くそんなことはなくむしろ反対でとても驚いた。この偏見が間違っていることがわかるには実際に中国に行って自分の目で確かめる他ないので、今回この海外研修に参加できて、本当によかった。
- ・パン工場に行って、衛生管理がしっかりしていたり、パンがパサパサでなかったりしていたので、中国の雑で汚いという今までの印象が変わった。
- ・今まで中国人に性格が強いイメージを抱いていたが、実際行ってみるといい人、優しい人、沢山いてやっぱり個人個人で違うんだなと思った。直接行ってみないと分からないとは思いますが。

(エ) 今回の海外フィールドワーク全体を通しての感想を書いて下さい

- ・初めて海外に出でみて日本にいた時は気がつかなかった日本のいい所や悪い所が見えた。中国に対するイメージも実際に行ってみると全然違って、自分がとても型にはまった考え方を持っていたと感じた。今回のフィールドワークで自分の価値観を広げることができた。
- ・先輩後輩で関わられたことがよかった。
- ・本物を見ないと、世界のことは分かりにくい、という事が分かり良かった。
- ・中国のイメージがガラッと変わり、行くことが出来てとてもよかったです。また外国語大学などのたくさんの大学に行けたことで日本と中国の勉強環境の差に気づき、刺激になりました。
- ・天津の学校の人々の話を伺うと自分とは比べものにならないくらい勉強してたいへん良い刺激を受けました。また、食事では文化の違いを特に強く感じたように思います。全体を通して、日本ではできないような貴重な体験ができ、自分の進路選択に良い経験を受けることが出来ました。
- ・中国はとてもいい国だなと感じた。自分の国を大切に思う気持ちが日本人よりとても強く、また誇りを持っている感じがして日本も見習わなければならないところかなと感じた。衛生面では少し心配があったけど、ホテルもきれいで何一つ不自由なく過ごすことができた。今回が初めての海外だったのでとても不安だったが5日間とても楽しく過ごすことが出来、最初の海外が中国でよかったなと思うことが出来た。高校生のうちから貴重な体験ができて本当によかった。
- ・メンバーにまず恵まれた。みんないい人で楽しく過ごせた。その上で、いろんな分野の所へ行けたし、個人的な旅行では絶対に体験出来ないようなこともたくさんでき、本当にいいチャンスを貰えたと思う。食事に関しても悪いところ良いところが体で感じられたし、これも直接行けたからなんだなあと思う。さらに、中国の良いところだけでなく日本の良いところも見えたので、これからはこの研修で得た広い視野をもとに自分の見識を深めていきたい。

### (3) グローバル・アクション

課題研究についての全校あげての成果発表や生徒主体のサークル活動等を通じ、生徒の相互研鑽や実践行動につなげるとともに、地域への提言フォーラム「四高SGHスーパープレゼンテーション」等の開催や外部機関主催の各種研究発表やコンクールへの出場、海外の高校生や大学生との交流会を図ってきた。

また、海外からの学生の訪問を受け入れたり、近隣の大学に留学している留学生徒との交流プログラムを計画するなど、異文化への理解やコミュニケーション力の向上を目指した。また、国内のSGH指定校との交流の実施及び参加やユネスコ・スクールへの取組について発表するなどを行った。

SGH事業を通じて身に付けた市民性・社会性向上の取組として、校内でのボランティア活動の他、校外において部活動単位でも取り組んだ。また、グローバルな外部のイベントや大会等に積極的に参加した。

#### ① グローバル化社会への提言フォーラム

○「四高SGHスーパープレゼンテーション」 平成31年2月5日(火)

このスーパープレゼンテーションは、SGH事業を通して、大学教員や企業の経営者、社員等から学び取り組んだ研究による成果を、地域社会にも還元する場として、地域企業や研究機関等を対象に、生徒自身による提言及び意見交換を行うフォーラムとして開催された。

[内容]

海外研修報告

カンボジア、中国・天津への海外フィールドワークに行った生徒それぞれ12名の生徒たちから研修報告のプレゼンを英語によって行いました。

#### ・カンボジアフィールドワーク

カンボジアの研修報告では、新たに加わった訪問先の学校、施設や大学、歴史、文化の紹介、最後には現地で抱える問題や課題に自分たちがどう関わっていくのかの提言が行なわれました。



#### ・中国（天津）フィールドワーク

中国・天津の研修報告では環境問題、交通など生活事情を中心に説明、訪問した高校、大学の様子も詳しく報告されました。最後には「実際に海外を自分で見ることの大切さ」を強調していました。





・研究発表（生徒論文は添付資料参照）・提言フォーラム

(1) 「森林発電～木を燃やして環境を守る～」 2年4組 飯柴 彩佳

現代において、電気は私たちの便利な生活には欠かせないものとなった。しかし、その生活が今、地球を住みにくい場所へと変えつつある。それでは私たちは便利さを捨てるべきか？

おそらくそれは不可能だろう。今私たちに必要なのは、いかに地球環境を壊さずに便利さを維持するかということだ。そこで私は、化石燃料による発電を代替する発電方法として、「森林発電」（木を燃やして発電する）を提案する。この発電の長所、短所をふまえて、今後の世界の発電の在り方について考えていきたい。



(2) 「児童福祉専門機関の整備による少年犯罪の減少」 2年9組 梶原 知茂

近年、少年による凶悪犯罪がしばしば発生し社会問題となっている。そのような状況下で、少年犯罪の厳罰化を求める世論が大きくなるのも無理はない。しかし少年犯罪の背景は複雑であり、安易な厳罰化は逆効果である。今回は児童相談所の業務内容に注目し、その専門性・効率性を高めることで少年犯罪を予防する筆者の主張する「エンジェル計画」について説明し、児童福祉の視点で日本における少年犯罪の未然防止を考えたいと思う。



(3) 「認知症の明るい未来」 2年9組 中嶋 一貴

過去には痴呆と呼ばれ、治ることのないと言われていた病気。今では認知症という病名に変わったが、その患者数は今も増加している。2050年にはこの数がさらに増加し、日本人口の約12人に1人が認知症になることが懸念されている。これはもはや他人ごとではなく、将来自分になるかもしれないという危機感を持ち、真剣に考えるべき問題である。そこで私は少し変わった視点から解決の糸口を探ってみようと思う。



パネリスト

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| ・四日市大学 学長        | 岩崎 恭典 様 (コーディネーター) |
| ・三重大学人文学部 教授     |                    |
| 地域ECOシステム研究センター長 | 朴 恵淑 様             |
| ・四日市商工会議所会頭      | 種橋 潤治 様            |

S G H運営委員・地元企業・四日市市役所・三重県教育委員会・他高校の教職員、本校保護者など約50名の参加者を迎え、提言フォーラムでは3名のパネリストから専門の分野でのコメントをいただき、発表者との質疑応答、さらには会場の生徒からの質問も寄せられるとともに、来客者からも専門的知見の情報提供もありました。最後にパネリストからそれぞれの研究発表に対し、「現場へ行って現場の話を聞いて疑問を解決する力」の重要性、「持続可能な開発目標（SDGs）」に沿った研究テーマであったこと、確かなエビデンスをどのように集めるのかなどの課題も呈示され、議論が大いに深まりました。



## ② グローバル企業見学研修会

**目的** 地元四日市のグローバル企業を訪問し、事業所や研究所などの見学や社員の方から直接話を伺うことで、社会の中で生きていくことの意味や社会課題に目を向けること、地元企業を知るなかでグローバルな視点をもつことなど社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力などの国際的素養を育む。

**日時** 12月5日(水) 14:00～17:00

**企業名** 東芝メモリ株式会社四日市工場（三重県四日市市山之一色町800番地）

**参加者** 四日市高校1年生 29名、引率教員4名

**日程** 会社・工場概要の説明

工場見学

若手社員とのディスカッション等



今年度は最先端 NAND フラッシュメモリで世界のトップに行く半導体の生産現場を見学しました。その後、生産、技術開発に関わる若手社員8名の方から、入社までの学生生活と、入社後の取り組みや1日の活動などについてプレゼンして頂くとともに、個別懇談会を実施し、活発な質疑応答がなされました。

終了後の感想では、実際の世界最先端技術の製造現場を見られたことや若手社員の方

からの1日の仕事の様子や社員の方の体験談など個別に話を聞いたことが好評で、多くの生徒は参加して「たいへんよかった」と答えていました。次回はもっと様々な企業を訪問したいとの希望がでていました。



### ③ 他のSGH校との連携

(a) 高山グローバルサマーフェスタ 平成30年8月6日(月)～9日(木)

愛知県立旭丘高等学校主催(協力 中部経済連合会・高山市・飛騨市)の学習交流会で、名城大学附属高等学校、富山県立高岡高等学校、本校の4校42名が参加し、岐阜県高山市・飛騨市を会場に3泊4日の日程で行われました。本校からは1年生4名、2年生2名、計6名が参加しました。宿泊は旭丘高校林間学舎に2泊、市内の観光旅館に1泊しました。

**8月6日(月)** 出発～飛騨市～旭丘林間学舎

- ・フォーラム① 「グローバルを飛騨から考える(働く意味・お金の意味)」  
鎌倉投信取締役 新井 和宏 氏
- ・ワークショップ①「日本の伝統技術を世界へ」株式会社飛騨の森取締役 松本 剛 氏
- ・フォーラム② 「世代を超えて時を刻む, コンセプトカー「Setsuna」について」  
トヨタ自動車 辻 賢治 氏

初日は高岡高校以外のメンバーが一宮駅に集合し、バスで出発。アイスブレイクをして交流をはかり、まず、飛騨市を訪れ飛騨市におけるグローバルな取り組みについて、講演を聴いたり、ワークショップを行いました。1日の最後は必ず生活班でリフレクションを行いました。

**8月7日(火)** 旭丘林間学舎及び公民館

・セミナー①②

セミナーリーダー(大学院生や社会人)や外国人留学生在が自分の専門分野に関して、グループの高校生にレクチャーし、アクティブラーニング的に展開する。8つのセミナーに分かれて実施した。

- 1 「世界の社会課題を探ろう!そして解決方法を考えてみよう!」
- 2 「What is Legal Assistance? International Cooperation in the Field of law」
- 3 「教育とPeacebuildingからグローバルリーダーを考える」
- 4 「Protection of investment of Japanese companies in Ukraine and Special Economic Zones in Thailand」

- 5 「Electronic banking and the fight against cybercrime」
- 6 「What is International Understanding Education?」
- 7 「Education System and school culture」
- 8 「Find what you love, connect the dots and make influence as a member of society」  
「研究することはどういうことか?」「グローバルをどれだけ意識しているか?」など  
セミナーリーダーの研究分野における話題を中心に話し合った。

・フォーラム③

「微細藻類が地球を救う」デンソー新事業推進室事業企画担当部長 渥美 欣也氏

「チャレンジと失敗だらけの企業人生&起業アイデアを考えよう」

アライブ株式会社代表取締役 三輪 尚士氏

「人を活かしきる! 離島から世界へ」株式会社「巡の環」代表取締役 浅井 峰光氏

「香道」

香道研究家 荻須 昭大氏

・ワークショップ③

「高山学」 前田さん(高山市役所) 丸山純平さん(岐阜大学地域科学部)

高山市の現状を説明していただき、古民家の活用についてセミナー班でアイデアを出し  
合い発表をおこなった。翌日、高山市内の古民家を訪ね、計画と実際との違いを見聞した。  
2日目は、主として林間学舎でセミナーリーダー、留学生からのレクチャー、その道の専  
門家からのレクチャー、さらには「高山学」として古民家をどう活用するかのワークショッ  
プなど盛りだくさんの内容でした。

8月8日(水)

- ・セミナー③ セミナーリーダー(大学院生や社会人)や外国人留学生からのレクチャー

- ・フォーラム④&ワークショップ④

「リーダーシップと合意形成」 県立広島大学大学院教授 百武 ひろ子 氏

- ・ワークショップ⑤

旅館に移動後、セミナー班にいる留学生の「大切なもの」について英語で聞きだし、英  
語でプレゼン発表を行う。最後に留学生から「大切なもの」についてのコメントを述べて  
もらう。オールイングリッシュで行われ、生徒達は必死で取り組んでいた。

林間学舎から高山市内へ移動し、百武先生のワークショップ、宿泊所の四反田では英語のプ  
レゼン、翌日のインテグレーション準備など、時間を忘れて課題に取り組んでいました。

8月9日(木) 四反田(旅館)~高山市内~帰着

- ・インテグレーション これまでこのフェスタで学んだことを班ごとにまとめ、発表した。

全体を通して

セミナーリーダーによる用意周到なプログラムに、留  
学生も混じり非常にインターナショナルな雰囲気の中で実施  
された。多彩な講師からレクチャーを受け、ただ聞くだけ  
でなく、グループで議論を深め、1日ごとの振り返りの中  
で自分はどうか考えていくかのサイクルができていて非常に  
内容の濃いフェスタとなった。ゆえに消化不良となった内  
容も生徒達の中にはあったろうが、「グローバル」な視  
点を磨く上で貴重な機会となった。今後、このようなセ  
ミナーに多くの生徒が参加して輪が広がることを期待したい。



(b) 平成30年度SGH等カンボジア合同研修会

第4回目を迎えたSGH等カンボジア合同研修会が、西大和学園高等学校と和歌山信愛中学校高等学校が幹事校となり奈良で開催された。本研修会は各校のカンボジアフィールド研修に参加した高校生が一堂に介し、カンボジア研修を通して学び考えたことを他校の生徒と共有し、発展途上国が抱える諸問題、世界が抱える諸問題について向き合い、それらの解決に向けて行動できるグローバル人材への第一歩を踏み出すきっかけを得る機会とすることを目的としている。

その内容は以下のとおり。

開催日 平成31年1月5日（土）～ 6日（日）

会場 奈良ユースホステル（奈良県奈良市）

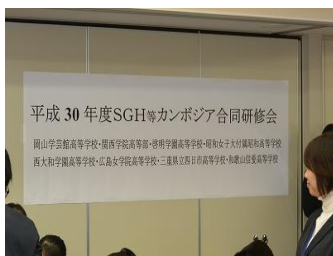
参加校 8校 55名参加

- ①（岡山） 岡山学芸館高等学校（2期校）10名
- ②（兵庫） 関西学院高等部（1期校）3名
- ③（東京） 啓明学園高等学校（アソシエイト指定校）3名
- ④（東京） 昭和女子大学附属昭和高等学校（1期校）11名
- ⑤（奈良） 西大和学園高等学校（1期校）10名
- ⑥（広島） 広島女学院中学高等学校（1期校）6名
- ⑦（三重） 三重県立四日市高等学校（1期校）3名  
真田 優華（2-1），田中 凜子（2-1）  
大森 陽菜香（2-2）
- ⑧（和歌山） 和歌山信愛高等学校（アソシエイト指定校）9名

※H30年度幹事校：西大和学園高等学校，和歌山信愛中学校高等学校

研修日程 <1日目：平成31年1月5日（土）>

13:00 開会行事(西大和学園高校校長挨拶，趣旨説明，2日間日程案内)



13:10 アイスブレイク(グループ内自己紹介など)



13:30 各校カンボジア研修プレゼン（各校 10 分+質疑 5 分）

各学校がそれぞれのカンボジア研修についてプレゼンを行った。四日市高校は本校の紹介，研修日程説明のあと今年度 FW で初めて訪問した「ひろしまハウス」のを中心に，カンボジアの教育事情や課題，自分たちがこれからできること，やるべきことをプレゼンした。

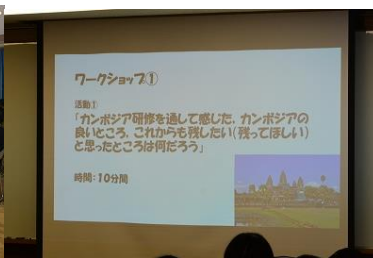


16:00 基調講演

<講師>奈良教育大学次世代教員養成センター 准教授 中澤 静男 先生

「持続可能な社会の創り手となるために－SDGs と ESD－」と題した講演をいただき，その後のワークショップへとつなげる導入をいただいた。

17:10 ワークショップ①(70 分)「カンボジアの良いところ，これからも残ってほしいと思ったところは何だろう」というテーマで討論。



19:40 中澤先生によるワークショップ②(90 分)

WS①をさらに掘り下げて「よりよいカンボジア社会にするために」というテーマで，自分たちなりに考えたカンボジア社会の理想的なあり方について討論を深め，それを発表。最後に宿題が出され，「宣言文」を明日までに 800 字程度で書くことを指示された。



< 2日目：平成31年1月6日（日） >

8:30 ワークショップ③(150分)

アイスブレイクのあと、まず昨日の宿題「宣言文」を共有。

その後、最終テーマとして「カンボジアへのこれからの関わりについて、一度立ち止まってじっくり深く考え、どうやって、いつ、本当にそれは実現できるかについて討論を深化させる」話し合いを行った。最後にグループ発表し、2日にわたるワークショップは終了した。



11:30 閉会行事

- ・ユースホステルオーナーの挨拶（青年海外協力隊としての東南アジア滞在経験）
- ・西大和学園高等学校研究開発部長挨拶

《本校の参加生徒感想》

- ・他の学校のカンボジア研修に行った人と交流することで物事を見る視点が広がりました。交流した人たちは私たちが知らないカンボジアをたくさん知っていて驚きました。私たちはつい気づかないうちに固定観念にとらわれがちなので意識して変えていくべきだとこの二日間で気付きました。また人脈が広がりSGH指定校の中で交流するのは初めてだったのでワークショップなどのグループワークはとても新鮮でした。
- ・ワークショップでは、カンボジアについて深く掘り下げて考えているうちに日本や世界にも同じことが言えるのではないかと、という結論に至り、これから自分がしたいこと、しなければならないことを明確に見つけることができました。また、他校の方の発表や考え方に感動し、人に伝えるという大切さに気づきました。
- ・今回の奈良研修で、私が一番良かったことは、四高と同じ、もしくはより高いレベルの学力の高校の生徒と二日間自分の意見を交換し合えたことです。この研修に参加しなければ、県外の高校生とこのように意見を交換し合ったり、一緒に1つの議題について考えたりすることは出来なかったと思います。基調講演のあと、カンボジアに残りたいことと変えなければいけないことを出し合い、その時に本当に沢山の意見がでて、今までの固定観念や自分の視野の狭さに気付かされました。二日間、とても充実した時間を過ごせました。参加できて本当に良かったと思います。

(c) 2018年度スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム

日時：平成30年12月15日（土）10時～17時

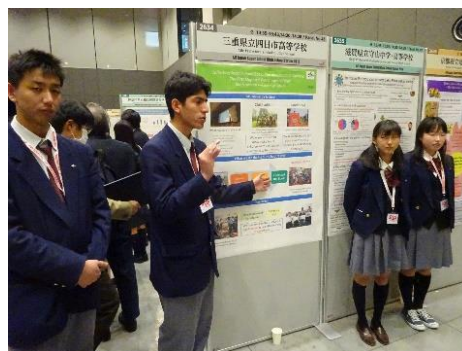
会場：東京国際フォーラム

参加者：代表生徒2年生4名，アジア架け橋プロジェクト留学生1名

午前中に行われた生徒交流会では、「平和・人権・ジェンダー」のテーマ別分科会に参加し、「平和・人権・ジェンダー」に関する問題の中で重要なものは何か、それらに共通する原因や課題として何が考えられるか、「平和・人権・ジェンダー」に関する問題を解決するために、高校生の私たちに何ができるかについて英語で討議しました。全国のSGH指定校の仲間と真剣に討議することを通じて、連帯感が生まれました。



午後のポスターセッションでは、英語によるプレゼンテーションを行いました。5月に鬼丸昌也さん（認定NPO法人テラ・ルネッサンス理事）を講師にお迎えして行われたSGH大テーマ講演会で、世界には子ども兵の問題や、まだ地雷で苦しむ人々がいることを知り、四高祭で古本を集めることを通じて、世界平和に貢献する寄付活動を行ったことを発表しました。また、海外フィールドワークに参加する生徒とその成果を共有して平和活動を続けていくことも伝えました。プレゼンテーションに続いて審査員から発表内容について英語の質問があり、分担して英語で答えることができました。



#### 【参加生徒の感想】

- ・プレゼンテーションと質疑応答の両方を英語でするのは難しかったけれど、達成感がありました。テーマ別分科会は自分の英語力を見直すきっかけとなり、相手に伝えたいことを伝える大切さを改めて感じました。
- ・プレゼンテーションとテーマ別分科会を通じて英語で話す楽しさや失敗を恐れない大切さを学びました。生徒交流会で自分の意見を堂々と述べる留学生を見て、将来の目標にしたいと心から思いました。
- ・発表では練習以上にしっかりと英語で話すことができ、自信ができました。日本語で話せる内容をすぐに英語で伝えることができるよう、努力していきます。
- ・自分の意見を持つこと、そして発信していく大切さを痛感しました。他校の発表を聞き、SGH指定校の仲間たちが自分のアイデアを発信している姿に感銘を受けました。



# Collecting Second-Hand Books Can Abolish Child Soldiers: The First Step to a World without War



Mie Prefectural Yokkaichi High School

2634

## Mr.Onimaru's lecture



What happens in the world

(All the photos courtesy of Terra Renaissance, an authorized NPO in Japan)

(References: Terra Renaissance HP, Child Soldiers International HP)

### Child soldiers



(photo: child soldiers in Democratic Republic of the Congo)

We were **shocked** to know that a lot of children were **kidnapped** and **forced** to be **soldiers**.

### Landmines



(photo: Danger sign in Cambodia)

We learned that **64,662** people were **killed** or **injured** by landmines in Cambodia.

## What we did during our school festival



School Festival

Games  
SNS

Collected  
186 Books

### Happy children



(photo: released child soldiers in Republic of Uganda)

## Conclusion



(photo: Abolishment ceremony of weapons in Republic of Uganda)

Collecting second-hand books

Cambodia Visit

We have come to the conclusion that **donation** is **one effective way** to **abolish war**



(d) Meijo Global Festa 2018 平成30年11月11日(日)

名城大学附属高校主催による「Meijo Global Festa 2018」が名城大学ナゴヤドーム前キャンパスで開催されました。東海地方を中心としたSGH指定校16校の生徒・教員が集まり、本校からは2名の生徒が参加しました。

国連サミットにおいて「持続可能な開発目標(SDGs)」採択され、地球上の誰一人として取り残さないための17のゴール・169のターゲットが2030年までの国際目標として設定されました。本フェスタは2030年の世界を担うことになる高校生たちが集まり、当事者意識をもって地域や世界の課題を見つめ、議論し発表する場として企画されました。

フェスタでは「Think globally, Act locally.」をテーマに、午前のフォーラム部門と午後のプレゼンテーション部門があり、本校からは2名の生徒が参加し、熱心に討論に加わりました。

分科会 A 「Is More Immigration Good or Bad for Japan?」

名城大学法学部准教授 David Green

分科会 B 「グローバル・タックス（国際連帯税）の実施に向けて」

名城大学法学部教授 伊川 正樹

分科会 C 「新興国の通貨安からグローバル化を考える」

名城大学経済学部准教授 新井 大輔

分科会 D 「相模原障害者施設殺傷事件と杉田水脈議員のLGBTに関する発言に通底するもの」 名城大学経営学部教授 村松 恵子

分科会 E 「高校生が考える適切なスマホ利用」

名城大学都市情報学部准教授 杉浦 伸

分科会 F 「名古屋城天守閣木造復元をこのまま進めるべきか、そうでないならどうするか？」 名城大学人間学部教授 伊藤 俊一, 水尾 衣里, 笠井 尚,

准教授 原田 知佳

分科会 G 「ベストセラーになった自己啓発本は読みに値するか」

名城大学外国語学部教授 堅田 義明

参加した生徒は、高山グローバルサマーフェスタ等で出会った他校の生徒たちとの再会を通じて人脈をより強いものにし、フォーラム部門、プレゼンテーション部門を通じて大いに刺激を受け、本校でのSGH活動をより活発にしていくモチベーションを得ることができました。



#### ④ 海外の大学生・高校生との交流

##### (a) ホーチミン師範大学生訪問 平成30年7月3日(火)

ホーチミン師範大学の教員養成課程で理科(物理, 化学, 生物)を学ぶ大学生9名・大学院生1名と, 教員1名の一行が7月3日(火)午後四日市高校を訪れました。ホーチミン師範大学は, 教育学部25学科を有するベトナム南部地域最大の教員養成大学で, 三重大学との間で締結された学術交流連携協定に基づき, 6月26日より7月5日まで三重大学を拠点に日本に滞在しました。その間, 日本の高校教育の現場においてどのような理科の教育が行われているかを視察するために, 三重大学の先生の引率で本校を訪問しました。

来校後, 2年生の生物(DNAの検出), 3年生の物理(光学, 力学)の実験を取り入れた授業に参加し, 実験を一緒に行うなど主に英語でお互いコミュニケーションをとって交流を深めました。中には日本語に堪能な学生もいて終始和やかな雰囲気での授業が行われました。



生物実験の様子



物理授業の様子



#### (4) 白熱英語講座

英語による討論を中心とした課外授業「白熱英語講座」を、昨年度に引き続き南山大学等で英会話を教えているEdward Scruggs講師を招いて実施した。各回の討論のテーマをグローバル・マインドで研究している6つの小テーマに絞ることにより、英語による課題研究の時間の一つとして位置付けている。英語をコミュニケーションツールとして課題研究テーマについて意見を出し合うことにより、思考力・判断力・表現力・語学力等、グローバル・リーダーとしての資質を育む機会となるとともに、教員も学習方法の工夫改善の研究にもつながった。対象は第1学年および第2学年希望者として、主に月曜日の放課後に90分の課外形式で実施した。希望生徒に対して柔軟に対応するため、I期とII期に分けて計画した。講義内容をペアワークで確認したあと、自分の意見をまとめてペアで意見交換したり全体に向けて発表したりした。講義・討論・発表は英語で行われ、まさしく英語漬けとなる講座として開催している。

- ・講師 Edward Scruggs 南山大学講師等
- ・日程および講義テーマ

##### 【I期】全4回 登録者53名

平成30年 6月18日(月) 世界各大陸が抱える問題

"What's going on in the world?" Problems on each continent

平成30年 6月25日(月) 世界の貧困問題 "Poverty in the world"

平成30年 7月 2日(月) 発展途上国における教育とその問題点

"Education in developing countries" What does poor education cause?

平成30年 7月 9日(月) 文化の違い・ユーモアについて

"Cultural differences" Humor

<内容に関するアンケート結果> ( )内は昨年I期との比較

	とても満足	やや満足	やや不満	とても不満
1年	80%(↑2p)	20%(↓2p)	0%	0%
2年	100%(↑22p)	0%(↓22p)	0%	0%
計	81%(↑3p)	18%(↓4p)	0%	0%

<感想>

- ・自分の考え方の視野が広がった。日本では当たり前のこと(教育や文化)も外国にはなかったりすることを知った。英語を積極的に聞こうとする意識がついてよかった。
- ・とても専門的でなかなか考えることのない話題であったので、いい機会になったと思う。英語を用いて考え、話すことで、いつもとは違った考えを持てたかもしれないと思う。
- ・分からない部分もあったが、想像力を働かせたり、友達と相談したりしながら、あまり考えたことのない世界の問題について考えることができた。色々な世界を知る先生に教えてもらい、非常によい経験になった。
- ・どのテーマもとても面白く、また、自分の意見を話すためには、学校の勉強とは別に勉強が必要だと痛感できた。

【Ⅱ期】全4回 登録者57名

- 平成30年10月22日(月) 紛争解決について Conflict Resolution  
 平成30年10月29日(月) オリンピックの歴史 History of Olympics  
 平成30年11月 5日(月) 英語の歴史 History of English  
 平成30年11月12日(月) 美術史 History of Art

<内容に関するアンケート結果> ( )内は昨年Ⅱ期との比較

1. この講座を受講して、英語の力がついたと思いますか。

とてもついた	少しついた	つかなかった
58%(↑6p)	42%(↓6p)	0%

2. この講座を受講して、満足度はどれくらいですか。\*昨年データなし

とても満足	まあまあ満足	少し不満	とても不満
62%	48%	0%	0%

3. 受講した感想、意見、要望等

- ・すべて英語の授業に最初は不安でしたが、先生が優しく対応して私たちのペースに合わせてくれたので、苦痛なく楽しめました。
- ・英語(特にListening, Speaking)の大切さ、自分の未熟な点をはっきり分かった。
- ・当たった時など、必死に会話しようとするのが、英語力が伸びる時だと思う。
- ・英語力だけでなく、外国の文化や社会について学べるので、自分の視野を広げられた。
- ・とても貴重な経験でした。自分の世界に関する知識は何と少なかったのか、と思い知りました。
- ・身近な問題をテーマにしており、この知識は今後に生かせると感じた。
- ・この体験を通して、英会話や海外研修などに挑戦したいという思いが強まった。



(5) 市民性・社会性の育成に関する効果測定に活用した尺度【3 関係資料(1)参照】

① 市民性・社会性尺度調査項目(全128項目)の概要

項目A 日常生活スキル(3因子, 24項目)

- ・親和性, リーダーシップ, 感受性, 対人マナー, 計画性, 情報集約力, 自尊心, 前向きな思考

尺度引用(島本・石井2006)

項目B 社会的自己制御(18項目)

- ・自己主張, 持続的対処(根気), 感情(欲求抑制)

尺度引用(原田・吉澤他2008)

項目C 批判的思考態度(28項目)

- ・論理的思考への自覚, 探求心, 論理的思考を妨げるピリーフ

尺度参考(平山・楠見2004, 森・長谷川他1994を参考に独自作成)

項目D 共同作業認識(15項目)

- ・協同効用, 個人志向

尺度引用(長濱・安永・関田・甲原2009)

項目E 異文化受容(23項目)

- ・異文化受容(国際交流), 愛国心

尺度引用(向井・渡部2003, 向井・金児2006, 鈴木・坂元他2000)

尺度参考(愛国心:学習指導要領 文部科学省)

項目F 学習動機(20項目)

- ・内的調整, 同一化的調整, 取り入れ的調整, 外的調整

尺度引用(西村他・河村他2011)

② 調査目的

- ・グローバル人材育成を目的としたグローバル・アクションを含むSGH事業の取組により, 全生徒の市民性・社会性のどの要素が育成されたかについてプログラムの取組前後に効果測定を行う。
- ・効果測定の評価を分析しプログラムの改善に役立て, より効果のあるプログラム企画, 実施に役立てる。

③ 調査方法

(1) 回答用紙, 実施時間:マークシート, 約30分

(2) 対象:初回全学年生徒(2回目以降は1, 2年生のみ)

最終年度の本年度は3年生のみ実施

(3) 実施回数:平成26年度は年間3回, 27・28・29年度は年2回

30年度は1回

(4) 効果測定・効果分析については, 名古屋産業大学水谷明弘先生, 長崎外国語大学の藤原和政先生の指導助言をもとに検討している。

④ 調査結果

調査結果については, SGH事業における生徒の変容を検証するために, 水谷教授にお願いした。

【調査分析】名古屋産業大学教授 早稲田大学客員教授 水谷 明弘 先生

## 【分析結果の概要】

### (1) 調査結果A 平成28年度入学生（現3年生）の全体傾向

スーパーグローバルリーダー事業の指定3年目に入学した生徒であり、各種の取組が満足なものとなっているかを評価できるものとしてデータ分析を行った。

- ・ 全体的に3年次の第5回で増加傾向がでている。とくに「コミュニケーションスキル」の尺度では、計画性、情報集約力、自尊心が増加傾向にあった。これらはこの事業で身につけさせたい力であり、プログラムの有用性を示している。また、この計画性・情報集約力の向上が、自尊心・前向きな思考の向上につながったと思われる。
- ・ 「学習動機」の尺度の結果では、一般に進学に意識が行くと内的要素が下がり、外的要素が上がる。しかし今回のデータでは内的要素・外的要素ともに3年間の数値はほぼ横ばいであり、内的調整では3年次で微増傾向にある。自律した学習が定着していると思われる。

### (2) 調査結果B 「グローバル・リーダー学」への参加・不参加生徒の比較

- ・ 論理的思考力の探究心、異文化受容、国際交流、愛国心の尺度の得点が高い傾向にあった。これは「グローバル・リーダー学」参加者は、グローバル人材に求められる能力が、不参加者に比べてより多く身についたと考えられる。

### (3) 調査結果C 「海外派遣」 参加・不参加生徒の比較

- ・ 海外派遣に29年度参加者は、探究心、学習動機、自国、異文化受容が不参加者に比べて各得点が高い傾向にある。海外派遣に28年度参加者は、持続的対処・根気がやや高い傾向にある。海外派遣参加者は、グローバル人材に求められる能力が、不参加者に比べてより多く身についたと考えられる。

### (4) 調査結果D 「白熱英語」 参加・不参加生徒の比較

- ・ 28年度のみ参加者は不参加者よりも、コミュニケーションスキル、論理的思考力、セルフコントロール、チームワーク、自国、異文化受容の分野で高い傾向がみられ、グローバル人材に求められる能力が、不参加者に比べてより多く身についたと考えられる。

## 【分析結果を受けて】

スーパーグローバルリーダー事業の取組で3年間の高校生活を受けた生徒の測定結果から、本校のプログラムについて、一定の評価を確認することができた。次年度も引き続きグローバル教育を推進していく必要があると考える。

## (6) その他、グローバルな取組

### ① オーストラリア海外語学研修旅行

本年度海外語学研修には数多くの希望者が応募し、海外で自らの英語力を伸ばす企画となっている。①語学力，コミュニケーション能力を高める，②将来の進路選択に向けての意識付けをする，③グローバル社会で活躍できる人材になるために視野を広げる，の3つを目的に計画・実施した。

プログラムには，語学研修だけでなく現地の人々と文化体験や交流のできるアクティビティを設けることや現地大学での見学・授業体験等を入れることを条件に入れることで，本校独自の内容を充実させた。また，英語力を伸ばすことを中心に4回の事前学習を行った。帰国後は文化祭でオーストラリア文化紹介等の取組を行った。

#### <行程>

平成30年7月31日(火)～8月9日(木) 参加生徒 30名(2年:30名)

日 時		研修場所・内容等
7/31 (火)	11:30 14:50	四日市高校発 中部国際空港出発(成田国際空港経由)
8/1 (水)	5:55 13:00	ブリスベン空港到着 語学学校到着，オリエンテーション，ホストファミリーと対面
8/2 (木)	午前 午後	英語レッスン 現地小学校訪問
8/3 (金)	午前 午後	英語レッスン アクティビティ(カランビン野生動物公園)
8/4 (土)	終日	アクティビティ(ドリームワールド)
8/5 (日)	終日	ホストファミリーと一緒に
8/6 (月)	午前 午後	英語レッスン 交流学習(ボンド大学)
8/7 (火)	午前 午後	英語レッスン 現地高校訪問
8/8 (水)	午前 17:05	英語レッスン，修了式，セレモニー，フェアウェルパーティー ブリスベン空港出発(シドニー空港経由)
8/9 (木)	5:15 10:30	羽田国際空港到着 四日市高校到着

#### <成果と課題>

- ・ ホームステイについて

ホームステイ先一家庭当たり1名の配置により，生徒は英語のみでコミュニケーションを図る努力を行った。英会話を行う必然性が高まり，かなりコミュニケーション能力が鍛



えられた。また、家族と深くかかわることによって、より深い異文化の体験をすることができた。

- ・ 英語レッスンについて

語学学校ではレベル別で授業を行ったため、それぞれに応じたカリキュラムで英語力を伸ばすことができた。

- ・ 現地校訪問（ロビーナ高校，パシフィックパインズ小学校）について

10名単位の小グループで授業に参加することで、必然的に英語で会話する機会が増え、親しく交流することができた。日本語を学ぶ意欲の高い生徒の姿を見て、英語の勉強を頑張りたいというモチベーションを高めることができた。

- ・ ボンド大学見学について

大学見学によってモチベーションが上がった生徒がとても多く、また生徒の反応もかなり良いものであった。大学はとても広く、設備も整っており、キャンパスツアーを楽しむ生徒の様子が印象的だった。また、案内をしてくれた大学生はとても親切で、海外からの留学生が多く学んでいるとの説明があり、海外留学に対する興味が高まった。

- ・ アクティビティ（カランビン野生動物公園，ドリームワールド）について

カランビン野生動物公園ではオーストラリアの自然，野生生物保護の現状について学ぶことができた。土曜日にテーマパーク（ドリームワールド）に観光に行くのは本校語学研修では初の試みで，休日にホームステイ先に観光に連れて行ってもらうのが難しいという課題を解決することができた。

- ・ 語学研修先授業内容について

本校海外語学研修は語学力を伸ばし，日本ではできない文化体験をオーストラリアで行うことを目的として実施した。語学研修についてのアンケート結果は「とても良かった」60%，「まあまあ良かった」27%と高い満足度を示した。

- ・ ホームステイ先について

生活に必要な会話を英語だけで行う研修を行った。アンケート結果は「とても良かった」70%，「まあまあ良かった」27%，「普通」3%であった。語学学校と並んでホームステイ体験を重要視する生徒が多く，しっかり自分の英語を聞いてくれる優しいホストファミリーに対して感謝する声が多かった。



## ② エンパワーメントプログラム

平成30年8月6日(月)から10日(金)までの5日間、本校1年生51名、四日市南高校生6名、川越高校生3名の合計60名が参加した。

全体を進行するファシリテーターを中心に、全生徒を5～6名からなる11のグループに分け、各グループに有名海外大学からの留学生等によるグループリーダーが入り、彼らの指導の下、様々なテーマについてオールイングリッシュで討論し、ポスター作成、プレゼンテーションを行った。

初日は初対面の生徒が多く、ぎこちない雰囲気ではあったが、日を迫うごとに積極性も増し、グループ内で信頼関係も築かれ、個々の能力に合わせて全て英語のみを使用し、一生懸命討論を行っていた。最終日の午後には、全員が皆の前で、今回のプログラムで得たこと、自分自身の意識の変化や、将来の目標などについて2分程度でスピーチした。生徒は、自信を深め、自らの今回の成果を確認していた。

今年度は参加人数が多く、多目的ホールを目一杯使った講座となったが、各人が課題を持って取り組んだおかげで、熱気にあふれるプログラムとなった。

### 【アンケート結果から】

- ・最初は緊張したけど、すごく楽しいプログラムで5日間があつという間に感じた。
- ・英語で難しい問題について考えることができた。
- ・普段からしたことの無いような内容で、英語でディスカッションできて楽しかった。
- ・英語を聞いたり、話したりすることがとても楽しく感じられた。
- ・外国人と話す事ができ、いろいろな価値観に触れられた。
- ・色々な考え方や、日本にない事にふれることができ、とても楽しかった。
- ・グループディスカッションで考えを共有することで新たな視点を得られた。
- ・1人1人の夢を聞かせてもらったり、さまざまな大事な事を教えてもらったりした。
- ・何を言っているのかわからないこともあったけど、優しく教えてくれた。
- ・日本のアニメが海外でもとても広まっていることを知り、驚いた。海外の文化などを知れて楽しかった。
- ・このプログラムが始まる前のアンケートでは、自分は価値のないネガティブな人だと思っていましたが、今では、このアンケートに記入したように、価値のある自分だと思えるようになった。
- ・ネガティブ思考がポジティブ思考になった。
- ・失敗する事は次のステップに進むためのよいことだということを学んだ。



### ③ PDA東海公立高校即興型英語ディベート交流大会

開催日時：平成 30 年 6 月 16 日（土）10:30-14:30

会 場：岐阜県立岐阜高等学校

参 加 者：生徒 34 名（本校から 6 名）

ジャッジ：名古屋大学，名古屋工業大学，南山大学，東京大学，東京農工大学他

東海地区公立高校 岐阜高校，岡崎高校，静岡高校，四日市高校の 4 校の生徒が，即興型英語ディベート交流大会に出場しました。

はじめに開催校の折戸校長先生より，「皆さんが即興型英語ディベートという新しいことにチャレンジしようという気持ちが素晴らしい。そんな皆さんがこれからの社会を切り開いて行くのだと思います。また，ディベートをする中で，高校生同士のネットワークもぜひ広げていってください。素晴らしい時間を過ごすことを期待しています。」とのメッセージが送られました。

次に，PDA 代表理事中川先生（大阪府立大学・准教授）より，自らのディベート経験や研究の場でのディスカッション経験などを踏まえて，即興型の英語ディベートが相手に伝えなければならないことを的確に伝えるためにいかに貢献できるかというお話とともにエールが送られました。

1 ラウンドの論題は「High school students should have part-time jobs.（高校生はアルバイトをするべきである）」でした。

各 3～4 名のチームで限られた時間の中で論題についての打ち合わせを行い，ディベートに臨みました。



今お金を稼ぐことができたならどんな自分への投資を行うかや，勉強との両立など，自分たちだったらどうだろう，という視点で様々な議論が繰り広げられました。ラウンドが終わった後も，ジャッジの先生のコメントをととても真剣に聞いていました。

2 ラウンド目の論題は「Development of AI weapon should be banned.（AI 兵器の開発は禁止されるべきである）」でした。

2 ラウンド目では各テーブルジャッジからのアドバイスを参考に，POI を効果的に

行ったり、社会の出来事に目を向けてみたりしながら論題に取りかかることができました。ラウンド終了後、ジャッジの先生がコメントを考えている時間に、相手のチームに対して「君の話していた例がとても分かりやすかった」など様々なコメントを掛け合い、交流することもできました。



昼食の後は、各高校から選抜された生徒 6 名によるエキシビジョンディベートです。論題は、「Japan should accept more refugees. (日本は移民を受け入れるべきだ)」でした。他の生徒もジャッジになったつもりでフローシートに前で話している生徒のスピーチのメモをとっていきました。議論はとても白熱し、たくさんの POI もみられました。

エキシビジョンディベートが終わり、ディベーターとしてみんなの前でスピーチを行った生徒は、「英語でディベートするのは焦ったりして難しかったが楽しかった。」「新しい意見なども知ることができ、交流ができて楽しかった。」「またここにいるみんなでディベートをしたい。」と感想を述べました。



生徒の声 (アンケートより)

- ・学校で練習したときよりも、今回のほうが、自分の意見をはっきりと相手に伝えることができ、自分の成長を心より感じられた。
- ・普段関わることがない高校の方々と交流することができて、更に他校のレベルの高さに刺激を受けることができた。
- ・ディベートでは、自分の英語スキルを知れたのはもちろん、知識の浅さを知ることができました。
- ・全国レベルになると、こんなことになるとは驚いた。大学受験では全国なので、現実を知ることができた。



### 3 関係書類

#### (1) 市民性・社会性の育成に関する調査結果の概要

三重県立四日市高等学校SGH事業

## 市民性・社会性に関する 調査結果の概要

2018年12月21日

名古屋産業大学教授  
早稲田大学客員教授 水谷明弘 分析資料

1

# 調査の概要

## —調査方法と調査内容—

2

### 【調査方法】

■ 調査時期と分析対象者

調査回数	調査時期	分析対象者
第1回目調査	2016年4月	四日市高等学校1年生
第2回目調査	2017年2月	四日市高等学校1年生
第3回目調査	2017年4月	四日市高等学校2年生
第4回目調査	2018年2月	四日市高等学校2年生
第5回目調査	2018年6月	四日市高等学校3年生

※第1回目～第5回目の調査において正確に回答している生徒のみを分析対象とした。

3

### 【調査内容】

■ 下記の内容に関する尺度や項目を調査した。

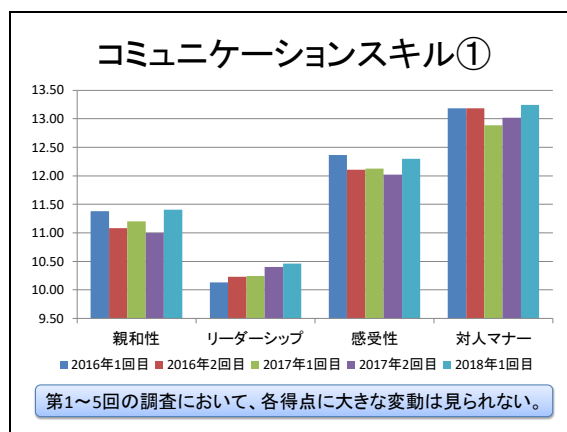
- ・ コミュニケーション能力
- ・ 論理的思考力
- ・ セルフコントロール
- ・ チームワーク
- ・ 情報集約、活用
- ・ 学習動機
- ・ 自国、異文化受容

4

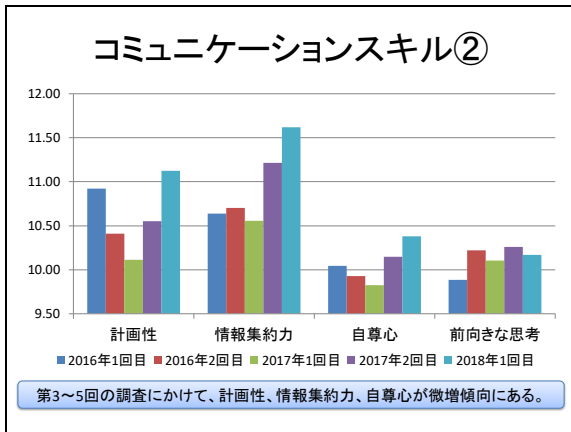
# 調査結果 A

## —全体傾向—

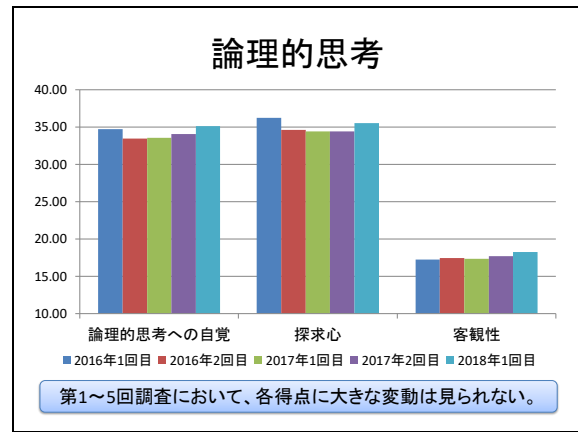
5



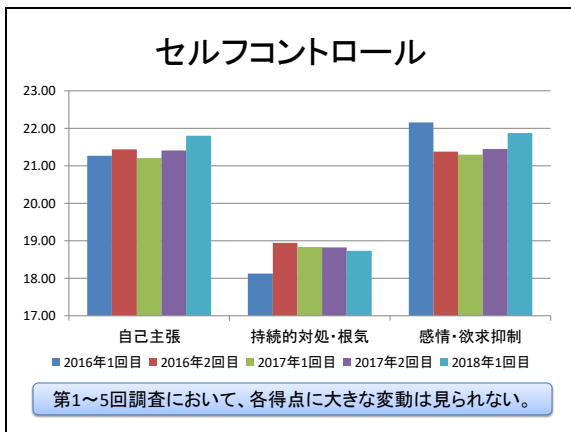
6



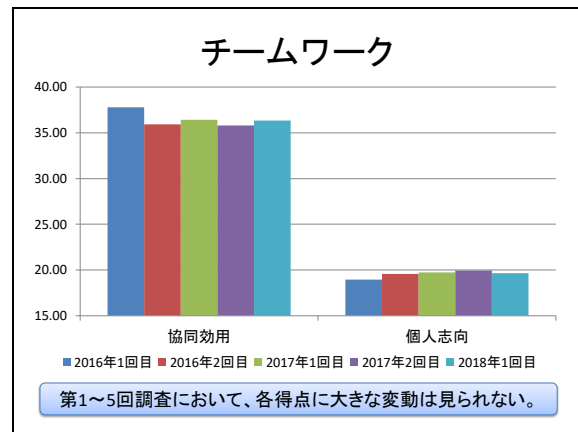
7



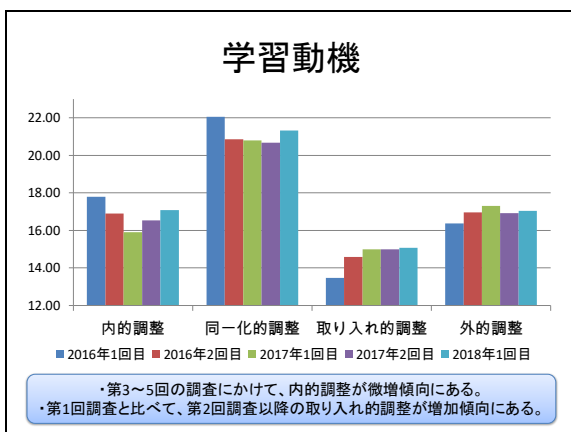
8



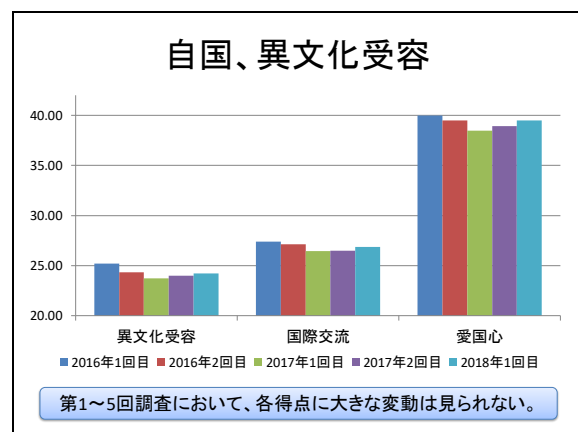
9



10



11



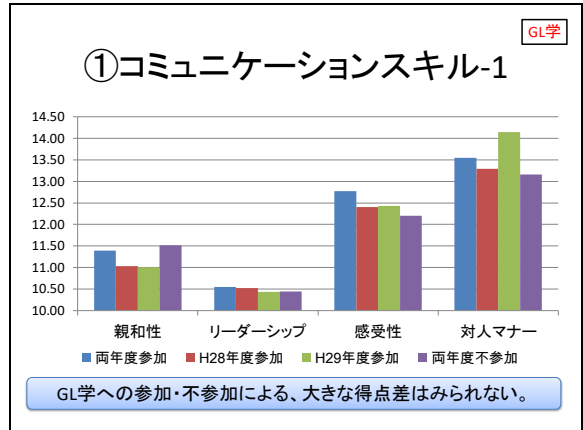
12

# 調査結果B

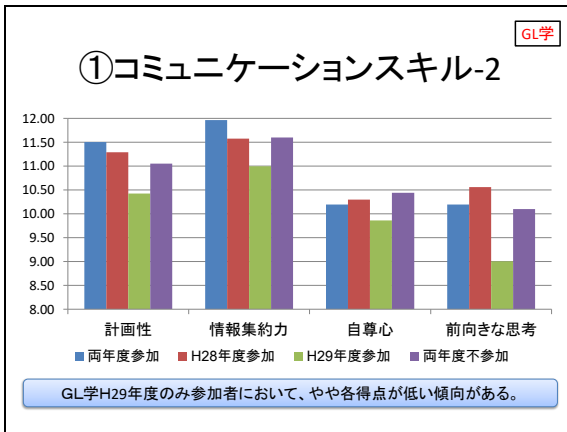
## 『グローバルリーダー学』 参加者と不参加者の比較

※2018年1回目の調査結果  
※両年度参加者：31名、H28年度のみ参加：62名、H29年度のみ参加者：7名、  
両年度不参加者：234名

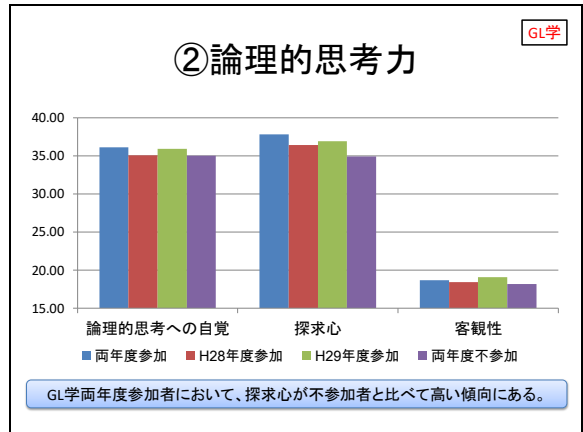
13



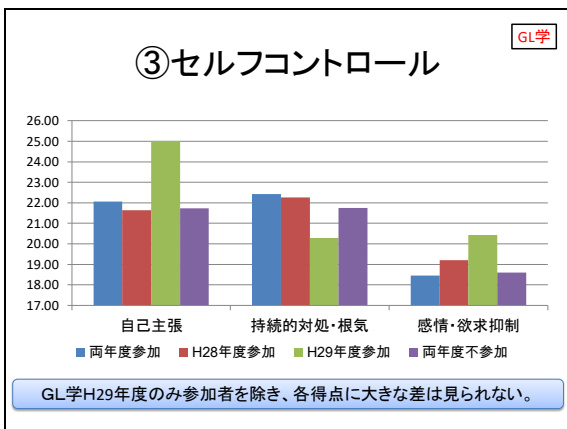
14



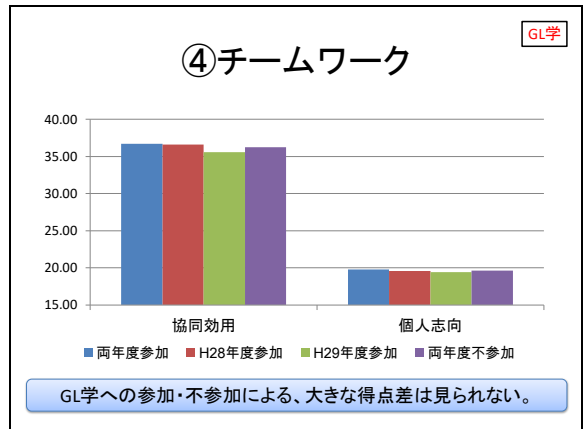
15



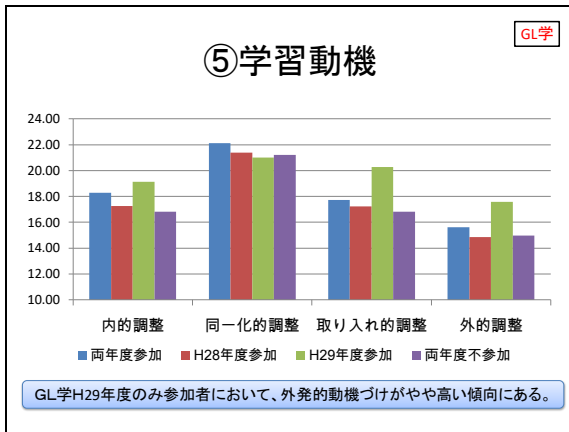
16



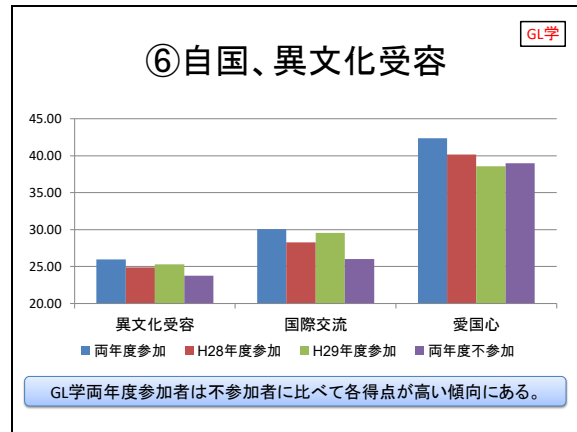
17



18



19



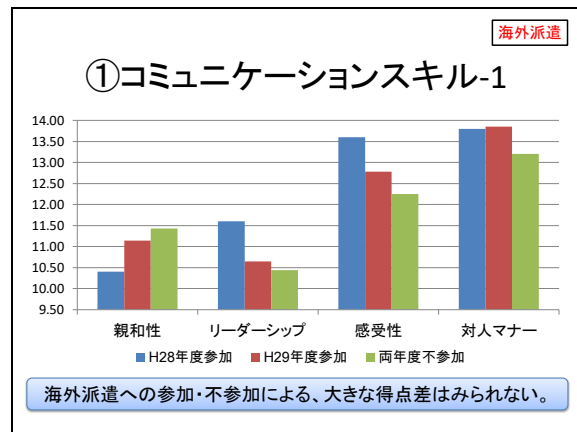
20

# 調査結果C

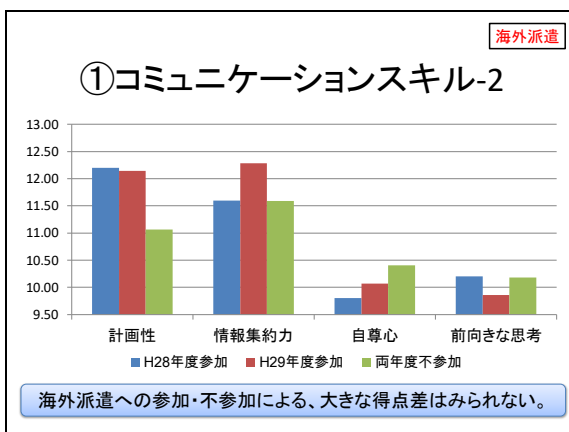
## — 『海外派遣』 参加者と不参加者の比較 —

※2018年1回目の調査結果  
※H28年度のみ参加：5名、H29年度のみ参加者：14名、両年度不参加者：315名

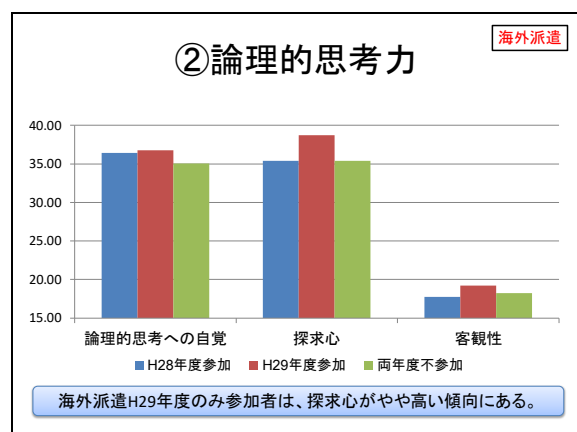
21



22

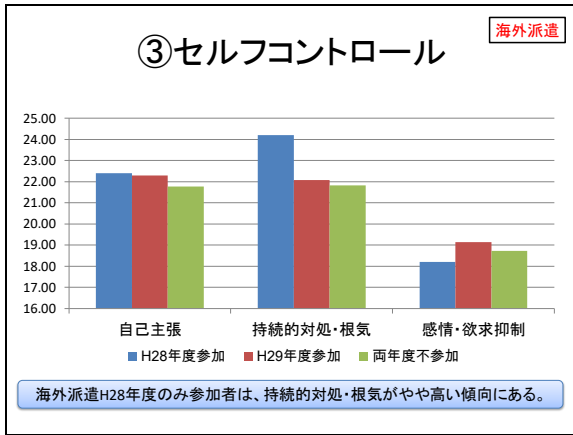


23

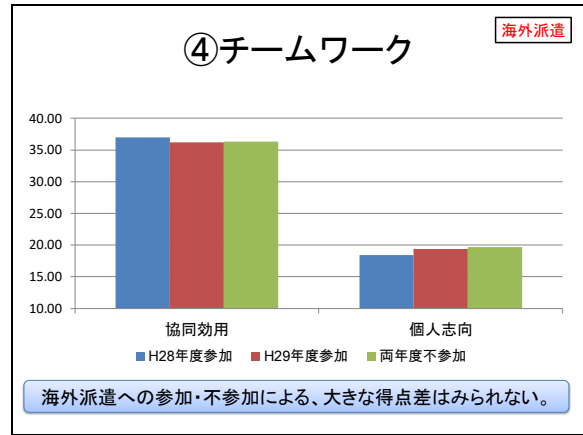


24

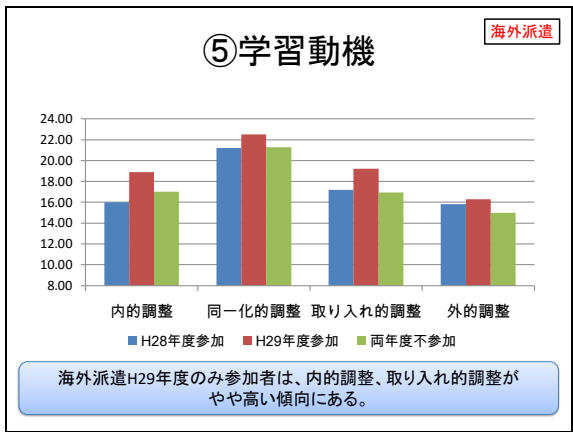




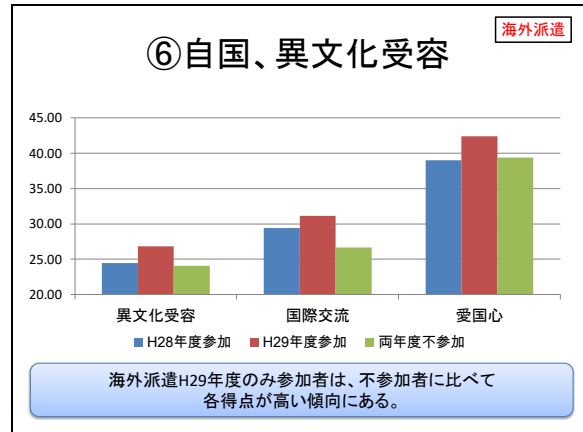
25



26



27



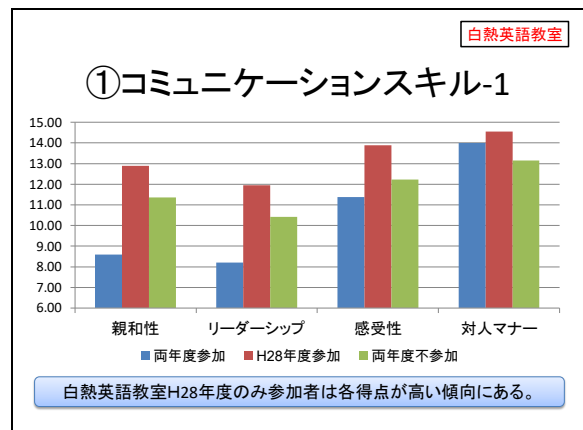
28

# 調査結果D

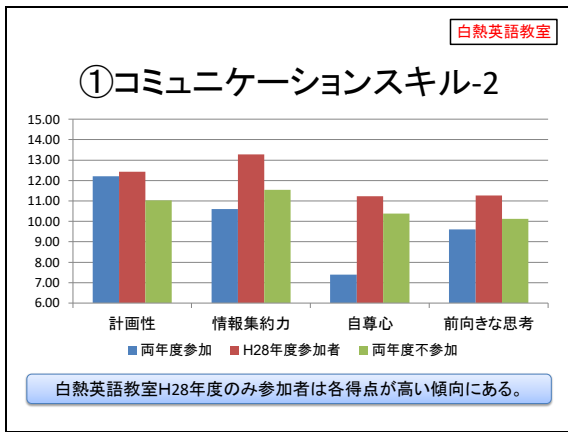
## 『白熱英語教室』 参加者と不参加者の比較

※2018年1回目の調査結果  
※両年度参加者：5名、H28年度のみ参加者：18名、両年度不参加者：311名

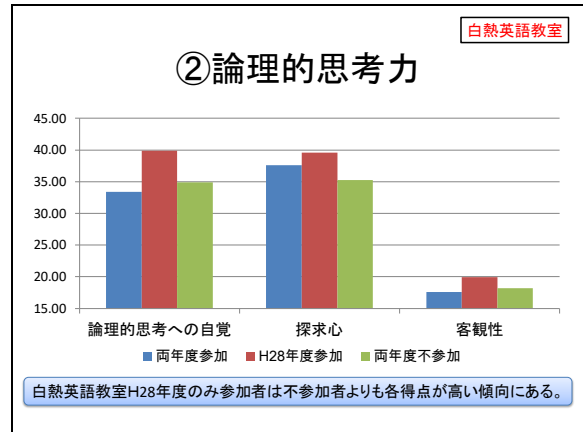
29



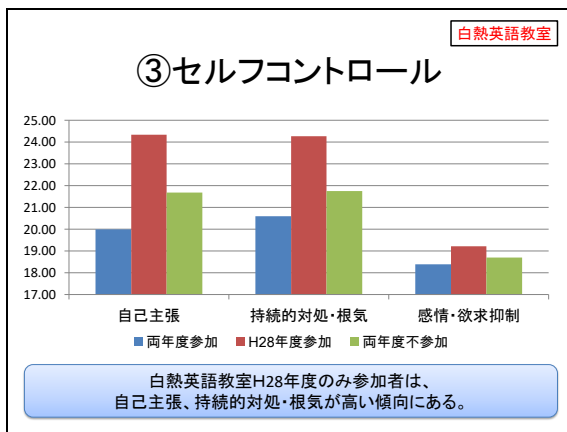
30



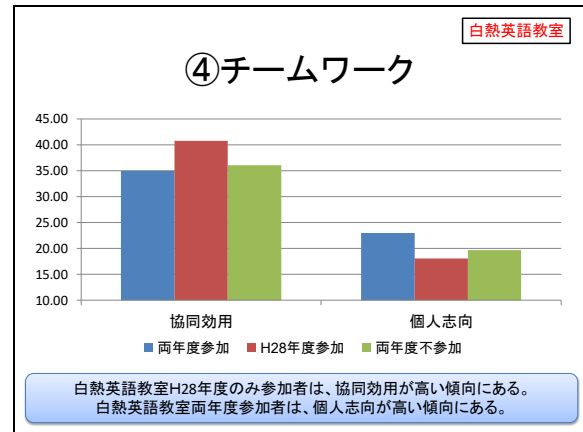
31



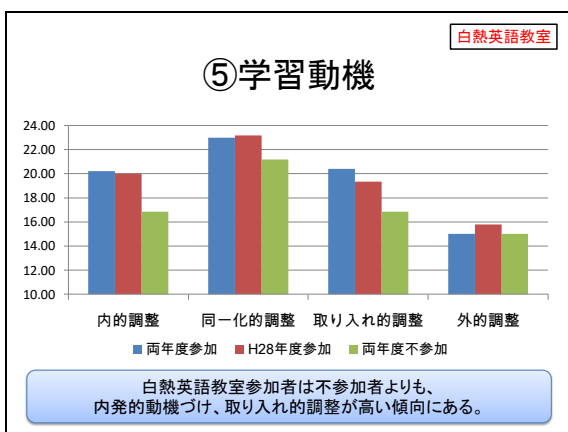
32



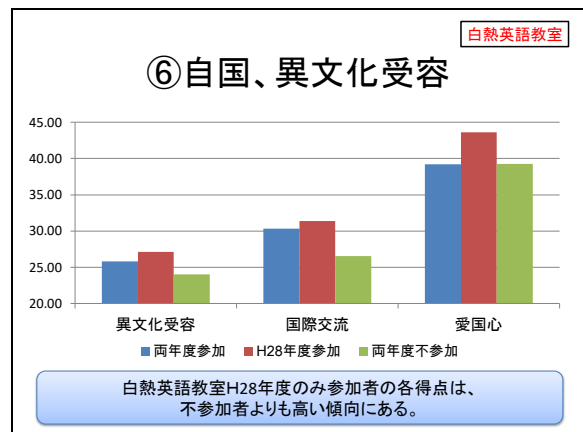
33



34



35



36

# 調査結果まとめ

—結果のまとめと示唆されること—

37

## 【調査結果のまとめ：全体傾向】

- 2018年1回目の調査において、下記の尺度の得点が増加傾向にあった。

- ・ **コミュニケーションスキル**  
: 計画性、情報集約力、自尊心
- ・ **学習に対する内発的動機づけ**: 内的調整
- ※ **学習に対する外発的動機づけ**: 取り入れの調整

日々の教育実践により、いくつかのグローバル人材に求められる能力が育成されたと考えられる。

38

## 【調査結果のまとめ：GL学】

- 2018年1回目の調査において、GL学参加者は不参加者よりも、下記の尺度の得点が高い傾向にあった。

- ・ **論理的思考力**: 探求心
- ・ **自国、異文化受容**: 異文化受容、国際交流、愛国心

GL学参加者は、グローバル人材に求められる能力が、不参加者に比べてより多く身についたと考えられる。

39

## 【調査結果のまとめ：海外派遣】

- 2018年1回目の調査において、海外派遣H29年度のみ参加者は不参加者よりも、下記の尺度の得点が高い傾向にあった。

- ・ **論理的思考力**: 探求心
- ・ **学習に対する内発的動機**: 内的調整
- ※ **学習に対する外発的動機づけ**: 取り入れの調整
- ・ **自国、異文化受容**: 異文化受容、国際交流、愛国心

- 2018年1回目の調査において、海外派遣H28年度のみ参加者は不参加者よりも、下記の尺度の得点が高い傾向にあった。

- ・ **セルフコントロール**: 持続的対処・根気

海外派遣参加者は、グローバル人材に求められる能力が、不参加者に比べてより多く身についたと考えられる。

40

## 【調査結果のまとめ：白熱英語教室】

- 2018年1回目の調査において、白熱英語教室H28年度のみ参加者は不参加者よりも、下記の尺度の得点が高い傾向にあった。

- ・ **コミュニケーションスキル**  
: 親和性、リーダーシップ、感受性、対人マナー、計画性、情報集約力、前向きな思考
- ・ **論理的思考力**: 論理的思考への自覚、探求心、客観性
- ・ **セルフコントロール**: 自己主張、持続的対処・根気
- ・ **チームワーク**: 協同効用
- ・ **自国、異文化受容**: 異文化受容、国際交流、愛国心

- ただし、白熱英語教室両年度参加者は、各得点において不参加者との大きな差はみられなかった。

白熱英語教室H28年度のみ参加者は、グローバル人材に求められる能力が、不参加者に比べてより多く身についたと考えられる。

41

(2) スーパープレゼンテーション発表論文

【環境問題】

「森林発電 ～木を燃やして環境を守る～」

2年4組 1席 飯柴 彩佳 …………… 81

【法・歴史研究】

「児童福祉専門機関の整備による少年犯罪の減少について」

2年9組 3席 梶原 知茂 …………… 92

【医療問題】

「認知症の明るい未来」

2年9組 29席 中嶋 一貴 …………… 107

小テーマ：環境問題

## 森林発電 ～木を燃やして環境を守る～

2年4組1席

飯柴 彩佳



Forest power generation

～ Burning trees to protect the environment ～

Today, problems such as global warming and exhaustion of natural resources are serious environmental problems common to the world. One of the reasons is that we have used a large amount of fossil fuel for power generation. Now that electricity has become indispensable to our convenient life, it will not be possible to abandon its convenience any longer. What we need now is how to maintain a convenient life without destroying the environment. Therefore, I propose "the forest power generation," which uses trees as a fuel to replace thermal power generation by fossil fuel in the future. This is because forest power generation has the following three merits: (1) it does not increase CO<sub>2</sub>, (2) it is a stable power generation, and (3) it revives Japanese forestry.

## 序論

今日、地球温暖化や資源の枯渇といった問題は、世界に共通する深刻な環境問題となっている。その原因の一つとして、火力発電がある。火力発電は、大量の化石燃料を使用して温室効果ガスであるCO<sub>2</sub>を排出する。電気が私たちの便利な生活に欠かせないものとなった今、もはやその便利さを捨てることは不可能である。私たちに必要なものは、いかに地球環境を破壊せずに便利な生活を維持するかということだ。そこで、私は化石燃料の代替として、木を燃料として育て、その燃焼のエネルギーを利用する「森林発電」を提案する。現在、間伐材や廃材を利用した木質バイオマス発電があるが、私は今後、燃料としての木を育てることを重視する必要があると考え、ここではあえて「森林発電」という名称を使いたい。森林発電には、バイオマス発電のメリットに加えて、①安定した発電ができる、②日本の林業を復活させることができる、というメリットがあると考えられる。バイオマス発電から森林発電へと発展させることで、地球環境の破壊を防ぐ新たなエネルギー形態を見出し、さらに、今後の世界の発電の在り方についても考えていきたい。

## 第1章 森林発電の仕組み

森林発電は、木材を加工して燃やすことで発電するという点においては、木質バイオマス発電と何ら変わらない。これらの違いは、利用する木材が生み出される経緯にある。先ほども述べたように、木質バイオマス発電に用いられる木材は、間伐材や廃材などの使い道のなくなった部分であるが、それに対して森林発電に用いられる木材は、燃料として使うために育てられた木なのだ。なぜ育てた木を用いるのかというと、燃料となる木を生産する方がより多くの資源を安定して得られるため、長期継続的な発電ができるからである。これらのことから森林発電の仕組みについてまとめると、森林で木を育てる→伐採する→燃料として使えるよう加工する→燃やして発電するという流れの繰り返しであるといえる。このように、発電で使った分はまた育てることができるため、森林は枯渇の心配がない再生可能な資源の一つなのだ。

## 第2章 バイオマス発電の現状

まず初めに、バイオマス発電に用いられる「バイオマス」についてだ。バイオマスとは、生物由来の資源を燃料としたもので、大きく次の3種類に分けられる。

### (1)廃棄物系バイオマス

家畜排泄物、食品廃棄物、紙 など

### (2)未利用バイオマス

林地残材、農作物非食部分 など

### (3)資源作物（資源として育てた作物）

さとうきび、藻類、とうもろこし など

ちなみに、木質バイオマス発電と森林発電はどちらも木をバイオマスとして用いるが、現在の木質バイオマス発電に用いられている木は、(2)の未利用バイオマスに分類され、今回私の提案する森林発電に用いる木は、(3)の資源作物に分類される。

また、バイオマス発電には、CO<sub>2</sub>を増加させないという大きな特徴があり、水力発電や風力発電といった環境にやさしい発電のひとつとして近年注目されている。それでは、なぜバイオマス発電がCO<sub>2</sub>を増やさないかという、それは「カーボンニュートラル」という考えに基づいている。

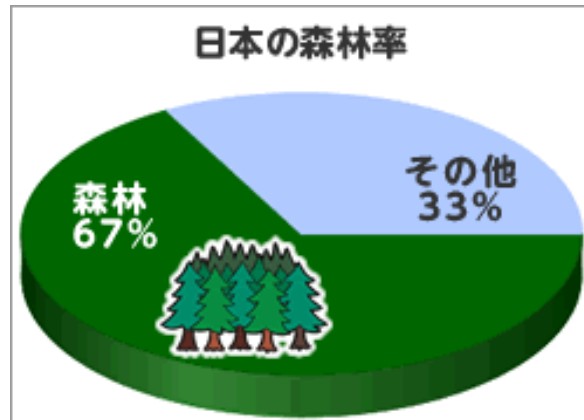
ここからは理論上の話となるが、化石燃料は、何億年も前に生きていた生物や植物の死骸が化石となったものであり、その中には何億年前の炭素が含まれている。つまり、それを燃やして発生したCO<sub>2</sub>は、何億年前のCO<sub>2</sub>であると言えるのだ。だから、大気中のCO<sub>2</sub>はどんどん増えていく。その一方でバイオマスは、植物を例にとると、つい最近まで生きていた植物に含まれる炭素が燃焼によってCO<sub>2</sub>として排出される一すなわち、植物が光合成によって取り入れたCO<sub>2</sub>をそのまま大気中に放出することになるため、排出されるCO<sub>2</sub>と植物により吸収されたCO<sub>2</sub>の量は等しくなり、大気中のCO<sub>2</sub>は増加しないと考えることができるのだ。

### 第3章 森林発電の長所① 安定した発電

森林発電が安定しているといえるのには、次のような3つの理由がある。

#### (I) 日本の豊富な森林資源

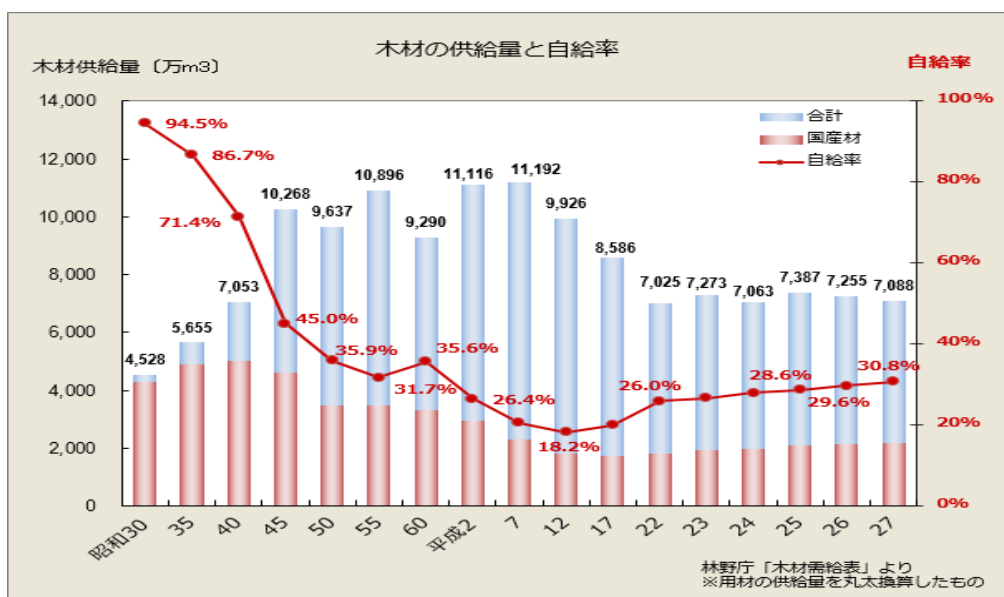
日本には既に広大な木質の栽培用地、すなわち森林がある。日本の国土の中で森林が占める面積の割合は67%と非常に高く、実に国土の3分の2が森林なのである。そのため、十分な量の資源と木を育てる場所が確保されており、多くの資源を持続的に得やすいといえる。



(間伐材. Net より)

#### (II) 安定した資源の供給

現在、世界では、廃棄物を用いたバイオマスの他に、トウモロコシやサトウキビを燃料として栽培し、それをバイオエタノールにして利用するという試みがなされているが、これらの作物は世界的な需要が高いため、価格の高騰を招き、問題となっている。その一方で、日本の木材は、輸入木材の利用によってほぼ需要がないといってもいいほどであり、バイオマスとして用いても市場経済に大きな影響を与えることはなく、安定した供給が可能であるといえる。



(森林・林業学習館 HP より)

### (Ⅲ) 立地や自然環境に左右されにくい

水力 : 大きな川のある山間部

風力 : 風速 6.5m以上の場所, 広い土地

地熱 : 火山の近く, 平坦な土地

太陽光 : 天気が安定している場所, 光が建物に遮られない場所

このように, 他の発電は立地や自然環境の制約があるが, 森林発電は輸送コストがかかるものの基本的にバイオマス発電と同じくみなため, 常に安定して発電することができるだろう。

## 第4章 森林発電の長所② 林業を復活させる

森林発電の良いところは, CO<sub>2</sub>の増加を抑え, 安定しているということだけではない。森林発電の実施に伴い, 日本の林業復活という副産物が生じるのだ。その流れは次のようなものである。

- ① 燃料資源として木を計画的に伐採 (→雇用が生まれる)
- ↓
- ② 森林環境が改善される
- ↓
- ③ 木がより育ちやすくなる
- ↓
- ④ ①に戻る

このような流れを繰り返すことで, 日本の林業は再び活性化され, その後も衰退することなく継続的に成長すると考えられる。このことによって, 新たな雇用が生み出されるだけで



なく、今まで人の手が入らず荒廃していた森林を復活させ、また新たなバイオマスの土壌を形成することができる。

## 第5章 森林発電の課題と解決策

今まで森林発電の良い所ばかりを述べてきたが、もちろん課題もある。それは大きく分けて次の3つである。

### (I) 発電効率 (Loop Club 2015年度データより)

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| 1. 水力    | 80%                |
| 2. 火力    | 45~55%             |
| 3. 風力    | 20~40%             |
| 4. バイオマス | 20% (木質バイオマスのみの燃焼) |
| 5. 地熱    | 10~20%             |

このように、バイオマス発電は発電効率が高いとはとてもいえず、これはバイオマス発電がまだ広く普及しない大きな理由の1つである。

現時点では木材をペレット(木くずなどを円筒形に圧縮加工したもの)やチップ(木材を細かく砕いたもの)という状態に加工したりして発電効率を上げている場合が多い。また、エタノールにして使うという方法もあるが、これについてはまだ開発途中で、今後の研究が大きなカギを握っている。

### (II) 重金属

また、廃棄物の処理も環境にとって重要である。木の燃焼における灰分率は約0.5~12%であり、発電用の燃料として使うと大量の灰を排出することになる。しかし、これらは決して全てが廃棄物というわけではない。むしろ、木質バイオマスの灰は自然の植物から得たミネラルを含むため、肥料として利用されるべきなのだ。ところが、現在は発生した灰のほとんどが廃棄物として処理されている。それは、木質バイオマスの灰には、人間の健康や環境に良くない重金属(鉛、カドミウム、水銀など)が含まれるからである。これらは通常低い濃度で地中に存在し、害を与えることはないが、寿命の長い木はそれらを少しずつ吸収するため、やがて灰での濃度は危険なレベルにまで高まってしまうのだ。

そこで、発電する際に除塵装置を設置して灰から有害物質を取り除き、肥料にできる部分は利用することで、廃棄物を減らすという方法がある。しかし、これには多くのコストがかかると考えられるため、技術力向上によるコストの削減が必要である。

### (III) 木の再生能力

私が森林発電の最も難しい問題だと思っていたのが、この木の再生能力である。木は成長速度がおそいため、他の再生可能エネルギーに比べ、再生するのに極めて長い時間がかかる。過去には、植林として大規模に成長の早いスギを利用してきた。しかし、そのことで現在多くの人々が花粉症で苦しんでいる。現在、成長速度の早い木の開発として、マンチェスター大学による研究(2015年)で、遺伝子操作によってポプラの木の成長を早めるというものがあるが、同時に花粉症などの影響を抑える遺伝子操作も必要と考える。この研究が実証され、実用化することができれば、森林発電の今後の可能性は大きく広がるだろう。

## 第6章 日本から世界へ

ここまで述べてきたように、森林発電には多くの長所がある一方、現時点では課題も多くある。しかし、それらの問題は技術の発達により改善できる部分もあるため、まだ先の話になるかもしれないが、実用化されるには十分な条件が揃っているといえるであろう。

しかし次に問題となってくるのが、この森林発電をどう世界に広めるかだ。確かに日本には豊富な森林資源があるが、それだけでは森林発電を世界で実用化するのには不十分だ。世界での実用化にはまず、発電の土台となりうる大規模な森林が、ちょうど石油や石炭が分布するように存在する必要がある。森林自体は日本以外にも多く存在するのだが、それらの木の多くは木材として利用されるため、日本の木とは違って需要がある。そこで私が注目したのが、熱帯地方に広く分布する熱帯雨林だ。

熱帯雨林が他の森林と異なる点は、木の種類が非常に豊富なことだ。そのため、用材として伐採するには適さず、かつてはほとんどが燃料として利用されていた。しかし、近年の人口増加に伴う焼畑、開拓の増加や、他国への輸出木材の伐採（現在は規制されている）により、その面積は急速に減少している。そこで、熱帯雨林の用途を再び燃料へ戻し、それを計画的に利用して森林発電をおこなうのだ。そうすることでCO<sub>2</sub>の排出を減らせるだけでなく、燃料としての木の需要も高まるため、熱帯雨林の破壊を防ぐ効果も期待できると考えられる。しかし、この森林発電は、一歩間違えると深刻な環境破壊を招く危うさがある。そのため、世界での実用化に向けては入念な計画とプロセスを確立していくことが非常に重要である。

## 結論

森林発電は、CO<sub>2</sub>を増加させないというバイオマス発電の長所に加え、日本などの森林が多く存在している地域における長所もあるということがわかった。その一方でまだ課題は多く、解決には技術と時間を要すると予想される。しかし、それらを解決できれば、火力発電の代替となる新たな発電方法として実践する価値は十分にあるだろう。そして、森林発電を世界へと発信することは、今後の世界のエネルギー観を変え、環境問題への取り組みをより一層前進させることにつながると考えられる。

## 提言

人間は、日々便利さを求め続けここまで発展してきた。そして、そのおかげで私たちはより豊かな生活を送れている。しかし今、その人間の生活が地球を住みにくい場所へと変えつつあるということを忘れてはならない。私たちが便利な生活を維持するためには、地球環境を破壊しない方法をとる必要がある。それを実現するものこそが森林発電なのだ。

ただ、注意したいのは、何を目的にこの発電を利用するかだ。昨年、北海道では震度7という大地震により、全域の電力供給が途絶える“ブラックアウト”（大規模停電）が起きた。その原因は、電気の使用量（需要）が発電する量（供給）を大きく上回ったことであった。そして、このブラックアウトは、逆に供給量が多すぎても発生することがわかっている。さらに、必要以上の供給は資源の無駄遣いにもつながる。つまり、供給量の増加はなんの得に

もならないということだ。そこで、このような事態を防ぐためにも、森林発電を発電量増加のために用いるのではなく、あくまでも現在の発電方法の代替として活用していくべきだと考える。そうすることで初めて、私たちは環境保全と便利な生活の両立が可能なのだ。そして、私はこの森林発電によって、地球を人間だけでなく、すべての生物にとって住みやすい場所にしていきたい。

## 〈参考文献〉

### \* 書籍

- ・偽善エコロジー「環境生活」が地球を破壊する（武田邦彦，幻冬舎文庫）
- ・電力小売全面自由化で動き出すバイオエネルギー（井熊均，日刊工業新聞社）

### \* インターネット

- ・みるみるわかる Energy SB エナジー株式会社
- ・一般社団法人日本木質ペレット協会
- ・焼却灰（天然木由来）の利用の手引き
- ・Science Time(2015.4.16)

# 森林発電

～木を燃やして環境を守る～

1. 提言
2. 森林発電の長所
3. 森林発電の課題
4. 世界での実用化
5. 結論

2年4組 飯柴彩佳

## 環境問題

石油 ガス 石炭

### 火力発電

## 森林発電の仕組み

燃料としての木を育てる 木質バイオマス発電

### 森林発電

## 提言

燃料としての木を育て、化石燃料の代替とする！

### 森林発電

## 森林発電の長所

### バイオマス発電の長所

(CO<sub>2</sub>を増加させない・再生可能な資源)

+

1. 安定した発電
2. 林業の復活

## バイオマス

...生物由来の資源を燃料にしたもの。

- (1) 廃棄物系バイオマス
  - 家庭排せつ物
  - 食品廃棄物
  - 糞尿
  - 紙
  - 製材工場等残材、建設発生木材
  - 下水汚泥、集塵排水汚泥等
- (2) 未利用バイオマス
  - 林地残材
  - 農作物非食用部 (稲わら、もみ殻、麦わら等)
- (3) 資源作物
  - 糖質資源 (さとうきび、てんさい)
  - 炭水化物資源 (いね等)
  - 油脂資源 (なたね、機軸藻類等)

木質バイオマス発電 森林発電

## バイオマス発電の仕組み

地球温暖化進行・非循環型

地球温暖化防止・持続循環型

CO<sub>2</sub>吸収 CO<sub>2</sub>生成

光合成によりCO<sub>2</sub>吸収 CO<sub>2</sub>吸収と資源の再生

バイオマスエネルギー バイオマス製品

## 森林発電の長所

### バイオマス発電の長所

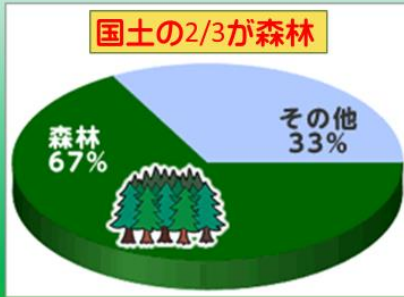
(CO<sub>2</sub>を増加させない・再生可能な資源)

+

1. 安定した発電
2. 林業の復活

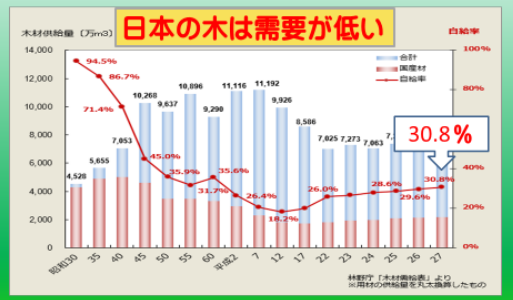
### 森林発電の長所

1.安定した発電 (1) 日本の豊富な森林資源



### 森林発電の長所

1.安定した発電 (2) 安定した供給



### 森林発電の長所

1.安定した発電

(3) 立地や自然環境に左右されにくい



### 森林発電の長所

- (1) 日本の豊富な森林資源
- (2) 安定した資源の供給
- (3) 立地や自然環境に左右されにくい



### 森林発電の長所

バイオマス発電の長所  
(CO<sub>2</sub>を増加させない・再生可能な資源)



- 1.安定した発電
- 2.林業の復活

### 森林発電の長所

2.林業の復活



### 森林発電の課題

- (1) 発電効率
- (2) 重金属
- (3) 木の成長速度

### 森林発電の課題

(1) 発電効率

- 1.水力 80%
  - 2.火力 45~55%
  - 3.風力 20~40%
  - 4.バイオマス 20%
  - 5.地熱 10~20%
- (Loop Club 2015年度データより)



### 森林発電の課題

#### (3) 木の成長速度

**遺伝子組換え“木”は可能なのか**  
 遺伝子組換えは、目的の形質だけを選択的に改良し、その他の形質には影響を及ぼさないという特徴があります。この技術を利用すれば、短期間で新しい形質を付与したり、他の生物種由来の遺伝形質を付与することが可能となります。私たちは、ポプラなど、いくつかの広葉樹種において遺伝子組換え体の作出に成功しています(写真2)。また、形態形成を支配する遺伝子を利用して、ポプラの形態をコントロールすることも成功しています(写真3)。現在、この技術を用い、ジベレリン合成にかかわる酵素遺伝子の発現量を調節し、木の成長を自在にコントロールする研究を進めています。  
 森林総合研究所

写真2: 遺伝子組換え技術により、β-グルクロニダーゼ遺伝子を導入し、発現させたポプラの葉。形質転換体は、β-グルクロニダーゼの酵素活性があり、染色により青色を呈します。

~マンチェスター大学による研究~  
 遺伝子操作によってポプラの木の成長を大きくすることに成功

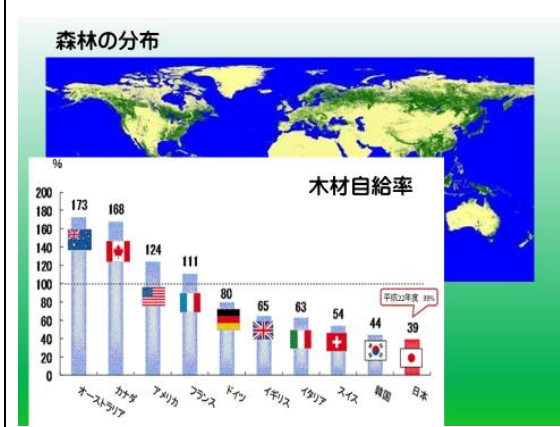
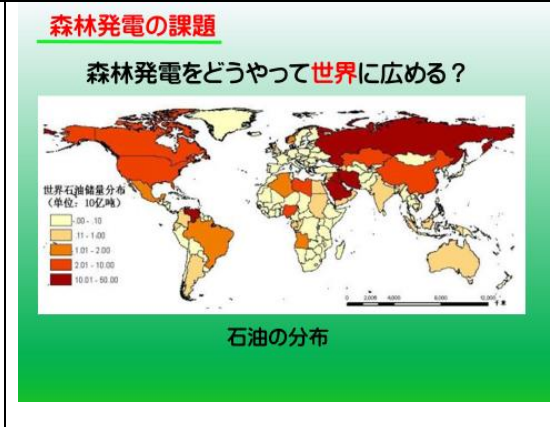
### 森林発電の課題

#### (3) 木の成長速度

**遺伝子組換え“木”は可能なのか**  
 遺伝子組換えは、目的の形質だけを選択的に改良し、その他の形質には影響を及ぼさないという特徴があります。この技術を利用すれば、短期間で新しい形質を付与したり、他の生物種由来の遺伝形質を付与することが可能となります。私たちは、ポプラなど、いくつかの広葉樹種において遺伝子組換え体の作出に成功しています(写真2)。また、形態形成を支配する遺伝子を利用して、ポプラの形態をコントロールすることも成功しています(写真3)。現在、この技術を用い、ジベレリン合成にかかわる酵素遺伝子の発現量を調節し、木の成長を自在にコントロールする研究を進めています。  
 森林総合研究所

写真2: 遺伝子組換え技術により、β-グルクロニダーゼ遺伝子を導入し、発現させたポプラの葉。形質転換体は、β-グルクロニダーゼの酵素活性があり、染色により青色を呈します。

~マンチェスター大学による研究~  
 遺伝子操作によってポプラの木の成長を大きくすることに成功



近年は・・・

- ・人口の増加にともなう焼畑、開拓の増加
- ・他国への輸出木材の伐採(現在は規制)

→ 熱帯雨林が減少

焼畑農業

国	森林面積減少 (千ha)
ブラジル	2,642
オーストラリア	982
インドネシア	498
フィリピン	410
タンザニア	403
ザンビア	327
コンゴ	311
ミャンマー	310
ボリビア	290
ベネズエラ	286



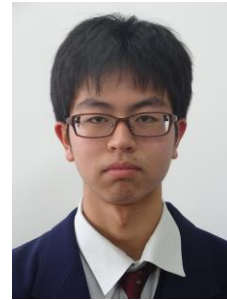


ご清聴ありがとうございました

小テーマ：法・歴史研究

# 児童福祉専門機関の整備による 少年犯罪の減少について

2年9組3席 梶原 知茂



Establishment of special welfare institution for child welfare  
reduces juvenile offense

Nowadays, the problem of juvenile crimes is serious in Japan. But even if children are punished severely, this problem isn't settled because what they have experienced so far have a bad effect on them. For example, child abuse is one of these factors. We must make several agencies which work about children's welfare. Those agencies are to cooperate and increase staff's specialty, and children can grow up soundly. And that leads to criminal prevention.



## 序論

近年、少年による凶悪犯罪がしばしば報道され、我々は犯行の残虐さと、犯人がまだ少年であるということに驚かされる。

しかし、罪を犯した少年は少年法に守られ、「罰則」より「更生」を重視した対応が様々な面で見られる。これは「未来ある少年には罪を反省し健全に育てほしい」という考えの表れだが、この寛大な処分に対し不満の世論が高まっている。

犯罪への罰則は当然必要だが、少年犯罪には犯罪少年の様々な生い立ちが複雑に関係しており、単に刑罰を重くすれば犯罪が減るといような簡単な問題ではない。高まる少年法改正の機運に合わせ、より効果的な制度を作るため私は以下の提案をする。

## **提言** 児童福祉行政の効率化・専門化を通し子どもの健全育成を図る

### 「エンジェル計画」の導入

今までの法整備では、犯罪少年の更生など、主に事件発生後の対応に重きが置かれてきたが、これでは犯罪の根本的撲滅にはつながらない。これからは、犯行の原因となる「少年の家庭環境」に目を向け、児童福祉の観点から子どもの健全な育成をサポートする行政サービスを提供することが必要であり、これにより少年犯罪を未然に防ぐことができると考える。

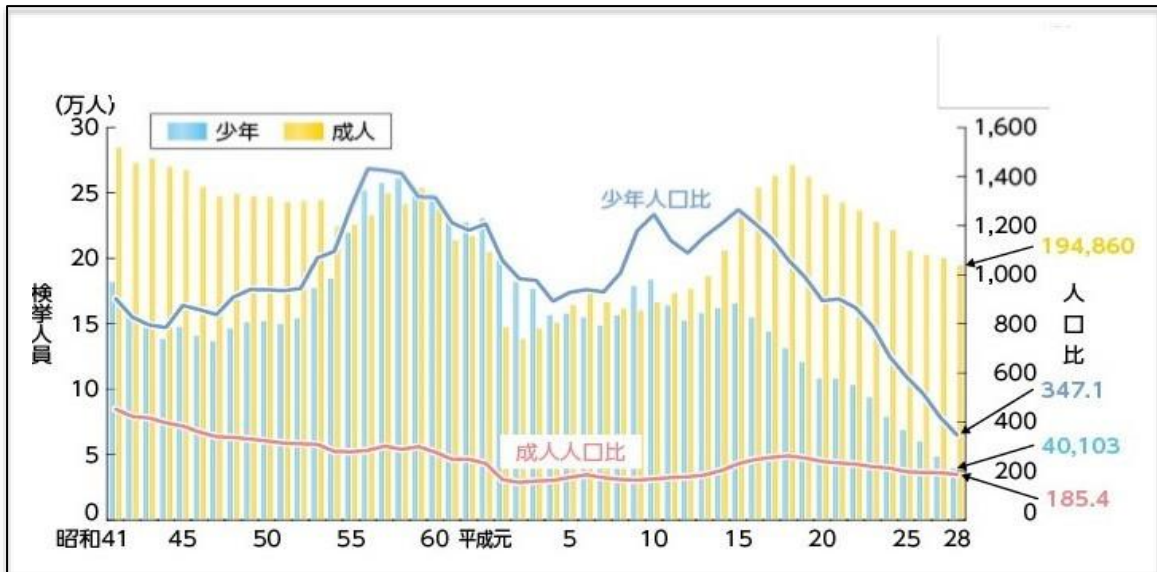
そのためには児童相談所などの行政機関の再整備が必要で、筆者はこの一連の計画を「エンジェル計画」と名付ける。筆者の提言は、児童相談所の業務効率化・専門化を通し子どもが健全に成長できる環境を整えることで少年犯罪・非行を防ぎ、その結果として社会全体の犯罪削減を目指すものだ。

## 第1章 少年犯罪の現状

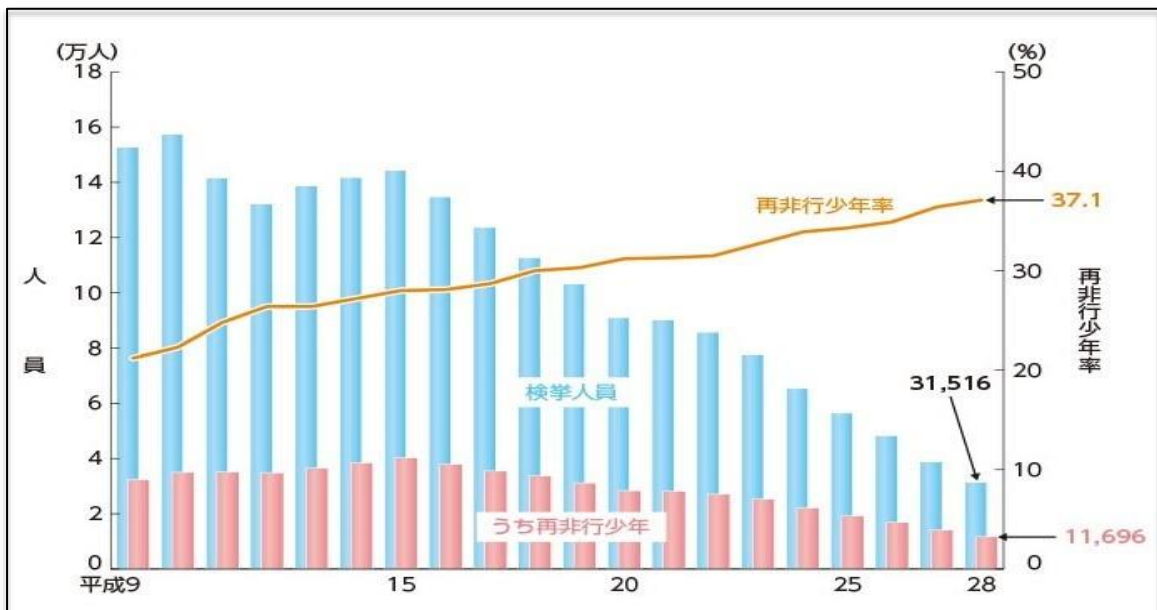
この章では、読者の皆様により筆者の提言を理解してもらうため、「平成29年版 犯罪白書（法務省）」から、近年の少年犯罪の動向について述べる。

少年刑法犯検挙人数は減少傾向にあるものの、依然として年間40,103件（平成28年）発生している。さらに人口比（10歳以上の少年人口10万人当たりの検挙人員）は347.1（平成28年）であり成人比約1.9倍と依然として高く、決して楽観視できる状況ではない。（図1）

検挙された少年のうち、再非行少年（前に道路交通法違反を除く非行により検挙（補導）されたことがあり、再び検挙された少年）の人員は、平成16年から毎年減少している。しかし再非行少年率（少年の刑法犯検挙人員に占める再非行少年の人員の比率）は10年から毎年上昇を続けていて、37.1%（28年）となった。これはつまり「逮捕された少年のうちおよそ5人に2人は再犯」ということで、少年犯罪は将来の日本の治安も左右する課題だといえる。（図2）



(図1) 少年刑法犯検挙人数

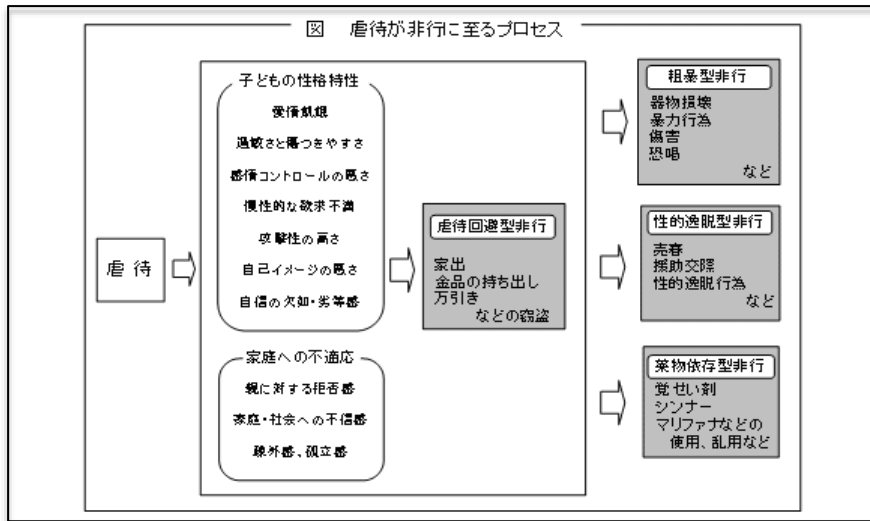


(図2) 再非行少年人員・再非行少年率

出典：(図1) (図2) 共に平成29年版 犯罪白書(法務省)

グラフから読み取れるような少年犯罪の減少要因としては、現行の少年法による矯正システムが効果的に作用してきたことがある。しかし現行の制度では「初犯防止」の観点では不十分だ。これからは「犯罪少年の更生」だけでなく、「少年犯罪の未然防止」を考えた政策への転換をより一層進める必要がある。

少年犯罪の原因については様々あるが、筆者は犯罪少年の家庭環境に注目したい。例えば、問題がある家庭環境の例として児童虐待が挙げられるが「虐待を受けた子どもは非行に走りやすい」という研究が内閣府の調査(平成11年)で発表されている。こうした家庭環境の問題解決が少年犯罪の減少につながるのだろう。(図3)



〈図3〉虐待が非行に至るプロセス 出典：内閣府

## 第2章 児童相談所の現状・問題点

筆者は論文冒頭で「児童相談所」について言及した。この章では、児童相談所の現行制度と問題点について述べる。

児童相談所は、子どもの福祉と権利擁護を目的として都道府県や一部都市に設置される行政機関である。業務は下記の4つに分類され、児童福祉の理念及び児童育成の責任の原理に基づき行われる。

〈児童相談所の業務

(出典：厚労省資料)〉

### ①市町村支援機能

- ・市町村相互間の連絡調整，市町村に対する情報の提供その他必要な援助

### ②相談機能

専門的な知識や技術を必要とする子どもの相談

- ・子どもについて専門的観点からの総合的調査，診断，判定
- ・援助指針の決定

### ③一時保護機能

- ・子どもに危険がある場合，保護者や児童本人の同意なしに子どもを一時的に保護する

### ④措置機能

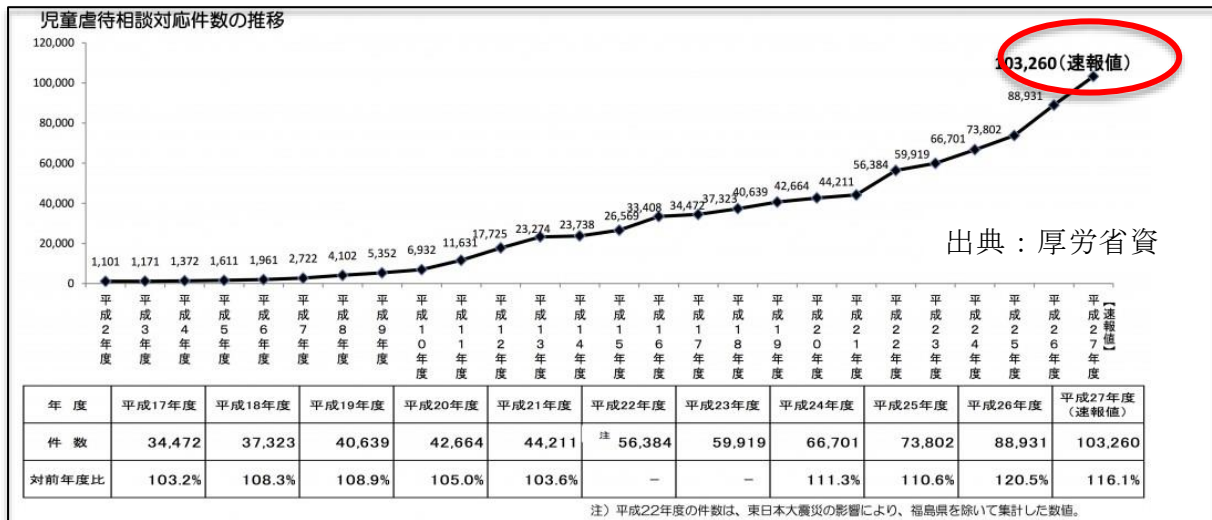
- ・児童福祉司指導措置等

(子どもや保護者への指導，保護者に訓戒を加え誓約書を提出させる)

- ・施設入所措置
- ・里親委託措置

しかし現状の制度の問題点として、以下のような事例が挙げられる。

### 問題点 1. 仕事量の増加と人員不足



現在、児童相談所は仕事量の大幅な増加に対し職員数が不足し慢性的な人手不足に悩まされている。

多角化する児童相談所の業務のうち、虐待相談を例にとり説明する。上の図の通り、年間10万件を超す相談が全国の児童相談所に寄せられ、職員はそのひとつひとつに対応しなければならない。しかし日本の児童相談所職員は10,738人、そのうち児童福祉司は3,250人（平成27年）程しかおらず、現状全く足りていないのだ。

児童相談所での勤務経験もある茂木健司・群馬医療福祉大学専任講師は、職員一人当たりの担当相談・対応件数は、虐待だけで月に10～20件に上るとしたうえで、「2000年以降、虐待が増え始めてからは通告があれば48時間以内に駆けつけることがスタンダードになった。早急に親との面接を設定するのは時間との勝負だ。最近では親となかなか面接の設定ができないケースが増えている。面接が設定できるまでに2～3週間かかるケースや、夜の面接や訪問も日常的に起きている。親との衝突で職員が疲弊するケースもある」旨の発言をしている（出典：シノドス）が、相談業務以外にも、児童養護施設への措置後の保護者支援や施設支援など職員の業務が広範囲に渡るため、現状の職員数に対し現場から不満が上がっている。

### 問題点 2. 職員の技能低下

役所内の定期的な人事異動で、福祉行政の知識経験がない公務員が児童相談所に配属されるケースがあり、専門的知識と熱意が必要となる問題対応に支障が出る。さらに、指導的立場のスーパーバイザー（児童福祉法などが定める、5年ほどの児相勤務経験がある児童福祉司）となるべきベテラン人材が育たないことで業務統括や後進の指導に支障が出るなど、影響は広範囲に渡っている。

### 問題点 3. 一時保護施設の不整備

児童相談所は、虐待を疑われる家庭への臨検を行い、保護者と子どもを同居させることが危険と判断される場合、子どもの一時保護を行う権利を持つ。一時保護制度そのものが必要なのは言うまでもないが、制度運用には課題があると筆者は主張する。施設によっても異なる

るが、一時保護所の設備が劣悪だというのだ。

児童相談所関連の書籍も出版している慎泰俊氏は一時保護所について「まるで刑務所のよ  
うに暗く、規則が厳しいところもあった。窓を大きく開けられず、数センチ開いた窓から手  
を出してみたら、センサーが反応して職員が駆けつけてきた、なんてこともあった。あるい  
は、朝から5分刻みで日課が決まっていて、違反すると『個別対応』という名の罰が与えら  
れ、3畳の部屋ですずっと反省文を書かなければならないところもあった。もちろん子どもが  
落ち着いていられる良い雰囲気のところもありますが、施設による差が大きいなど感じた」  
旨の発言をしている。（出典：yahoo ニュース）

このような、行動がかなり制限された閉鎖環境下に子どもを閉じ込めておくのは一種の人  
権侵害とも言え、この環境下での保護が子どもの健全育成に資するとは言い難く、逆に非行  
の原因にすらなりかねない。

### 第3章 「エンジェル計画」の内容

この章では、筆者の児童相談所改善計画「エンジェル計画」について説明する。

#### 計画1：児童福祉司の国家資格化・担当職員の福祉職化

児童福祉司とは、児童相談所に置くことが定められた職位で、児童福祉の専門家として各  
種問題の対処にあたる。下記は、その任用資格であるが、これを見ると、児童福祉司の任用  
には特別な資格が必要ないことが分かる。

##### 児童福祉司任用資格（児童福祉法第13条）

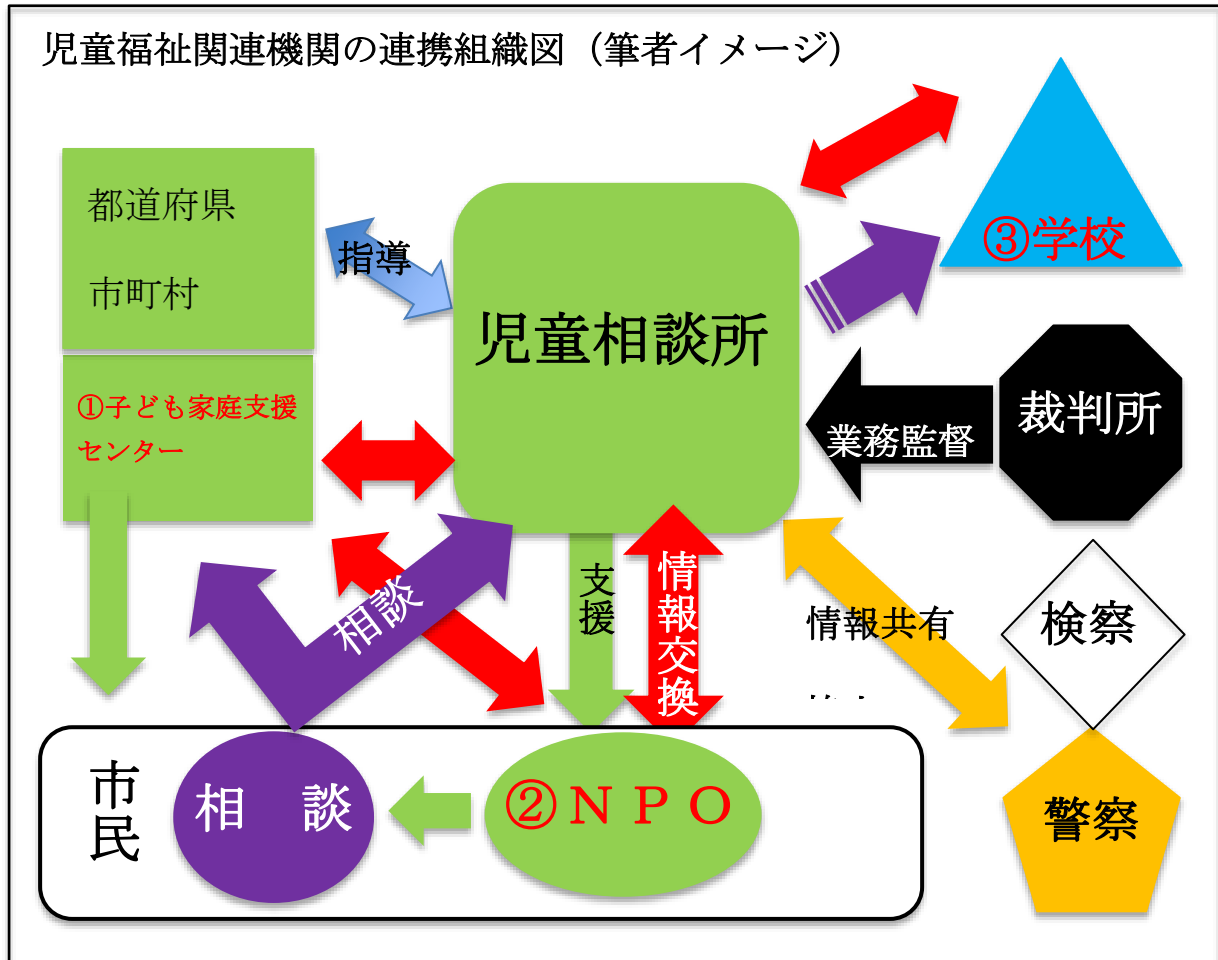
- 一 都道府県知事の指定する児童福祉司若しくは児童福祉施設の職員養成学校・施設を卒業し、又は都道府県知事の指定する講習会の課程を修了した者
- 二 大学で心理学、教育学若しくは社会学を専修する学科又はこれらに相当する課程を修めて卒業し、厚生労働省令で定める施設において一年以上児童その他の者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行う業務に従事したもの
- 三 医師
- 四 社会福祉士
- 五 社会福祉主事として二年以上児童福祉事業に従事し、厚生労働大臣が定める講習会の課程を修了したもの
- 六 前各号に掲げる者と同等以上の能力を有すると認められる者で、厚生労働省令で定めるもの

筆者は、資格の第一、二、五、六項を改正し新たに「児童福祉司任用国家試験」を新設することを提案する。これにより児童福祉司の質が全国的に統一される。

また、その他の職員も福祉職職員からの任用を制度化することで、専門性の高い活動が可能になる。

## 計画 2：外部機関との業務振り分け・協定

児童相談所の業務は年々増加するが、それに対応できる専門職員の増員は自治体の財政上限界がある。業務効率化のため児童相談所と他の機関の業務の分担を進めるべきだ。



### ①子ども家庭支援センターとの役割分担

子ども家庭支援センターとは、市町村に設置され子どもに関する問題に対処する機関であり、現在東京都などで設置が進んでいる。このセンターの特徴は地域密着型であることだ。ここを地域の児童福祉政策の拠点として利用し乳幼児家庭の面談・訪問や情報提供、母子健康診査などを行えば、家庭環境の把握が効率よくできるのみならず、親の情報獲得、交流の場ともなり不安感の解消につながる。更にセンターに保育所や児童館を併設することで子どもが成長しても施設を利用できる。

また、地域密着型の支援は海外での成功例がある。フィンランドの「ネウボラ制度」では、かかりつけの保健師や助産師が、妊娠中から子どもが就学するまで親を継続してサポートする仕組みが無料で利用できる。妊婦の利用率は 99.8%と非常に高く、家庭の状況を早期に把握することで孤立や産後うつ、虐待の防止に役立つ（出典：西日本新聞（2016年01月12日））など、日本での導入にも同様な効果が期待できるため、地域密着型の対応をセンターに任せ、児童相談所の業務を専門性、緊急性が高いものに限定することで業務効率化が期待できるだろう。

## ②NPOへの一部業務委託

現在日本には児童福祉について活動するNPOが数多くあり、おもちゃ、食べ物等の寄付や独自の勉強会、里親事業に取り組んでいる。この中には行政と連携して事業に取り組んでいるものが多い。例えば福岡市は12年から、夜間の泣き声通告の安全確認をNPO法人に委託している。泣き声通告は緊急でない場合も多く、児童福祉司は負担が減り、深刻な案件に集中できるようになった。行政がNPOに必要な費用を援助した上、緊急性が低くNPOの特性を活かせるような業務を委託することでサービス効率化が図れるのではないだろうか。

## ③学校への相談窓口の拡大

児童福祉の諸問題については小さい範囲で行うことが望ましい。小中学校はどの地域にも一定数あるため、スクールカウンセラーなどの専門家を常駐（あるいはそれに準ずる状態）させ校区内の子育ての問題に対処する拠点とすれば、数の上で北欧諸国にも引けを取らない規模のネットワークが容易に出来上がる。（資料1）

さらに、虐待や非行といった問題は学校で発覚するケースが多い。（資料2）今までは学校内での活動が中心だったスクールカウンセラーの職権を学外にも広げ、問題対応の最前線としての役割も担わせるべきだ。

（資料1）児童相談所（各国の同様の機関）規模の国際比較（出典：増沢氏資料）

国名	児童相談所	管轄人口
スウェーデン	ソーデルマルムSS	12万
デンマーク	ブロンズホイ 子ども家庭センター	8万

参考…東京23区  
人口：9,302,962人（2017年）  
（出典：住民基本台帳）  
公立小学校：823校（2017年）  
1校当たり人口：11303.7人/校

（資料2）被虐待児の年齢（平成24年度）（出典：厚労省資料）

0歳～学齢前	小学生	中学生	高校生等	総数
29,008(43.5%)	23,488(35.2%)	9,404(14.1%)	4,801(7.2%)	66,701(100.0%)

## 計画3. 一時保護施設の整備

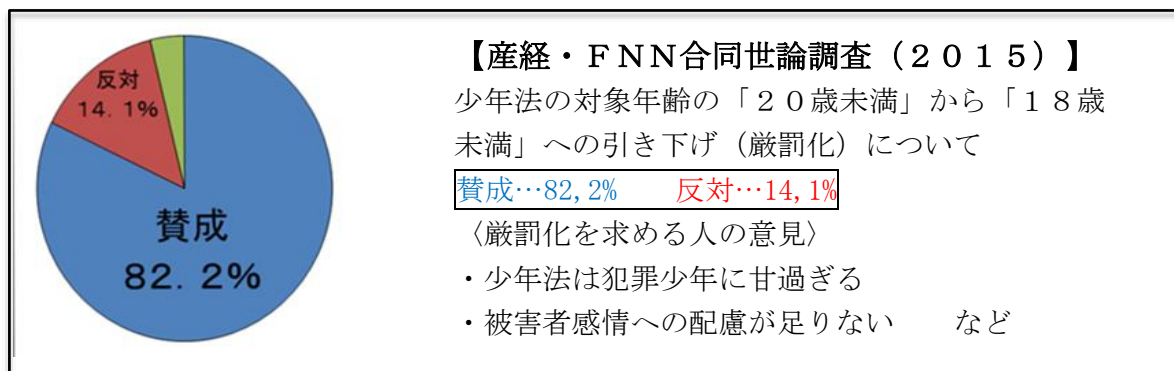
一時保護施設については、子どもが過ごしやすい形にする必要がある。建築などハード面とともに、学習や遊びのサポートといったソフト面での支援も並行して充実させる必要がある。

期間についても短くし、延長の際は裁判所の許可を得る形に法改正をすることで、無駄に長い保護期間を減らし、子どもが一刻も早くしかるべき場所（家庭、施設、里親等）で生活することができるだろう。

このような児童相談所の改革により子どもの健全な育成が図られ、少年犯罪の原因となる要素を早期に取り除いていくことで、将来的には犯罪件数の減少につながるだろう。子どもと向き合う地道な作業が、犯罪の無い安全な日本を作るのだ。

## 第4章 少年犯罪厳罰化の問題点

筆者の提言と、それが少年犯罪減少に貢献し得ることは説明した。しかし近年の日本では少年犯罪の問題を厳罰化で解決しようという世論が大きい。



近年は「凶悪な少年事件が発生するたびに少年法改正の世論が高まり厳罰化が進む」という流れが起きており、この流れは今後も続きそうだが、この章では、少年犯罪厳罰化に対する筆者論の優位性を主張する。

### 優位性の根拠：少年犯罪の厳罰化に踏み切り失敗した例が多い

下の表にあるように、少年に罰則ばかりが与えられ更生の機会が奪われることで再犯が増え、逆に更生を重視することで犯罪が減った海外のデータがあり、「少年犯罪は罰則より更生重視」という考えは既に世界で広まっている。

厳罰化が逆に少年犯罪を誘発する理由について葛野尋之・立命館大法学部教授が「少年が家族や社会生活から長期隔離され、強い否定的烙印を刻み込むことになり、社会的差別や排斥、本人の否定的自己観念が強まることで社会復帰の支援の機会を奪われる。さらに、少年への刑事処分の適用拡大で関係機関の仕事量が増え、施設内外での社会復帰支援が手薄になることで社会復帰が困難になり、ひいては再犯率の上昇を招く」と分析するように、少年犯罪の厳罰化は問題の根本的解決にはならないといえる。

国	年	対応内容	結果
米	1970～90	極端な厳罰化へと傾斜を進め、重大犯罪を効果的に抑止するため少年への刑事処分の適用を積極的に拡大	少年(18歳未満)の殺人…約2.5倍(人口比)に増加 銃規制法違反、少年の麻薬犯罪も激増
独	1990	少年に自由剥奪処分を多く出す裁判官・出さない裁判官で担当した少年の再犯率を比較	重い処分を科されなかった少年の方が再犯率が低い
英	1998	凶悪犯罪増加を背景に、少年でも重大犯罪には厳罰化政策	「再発の防止」を目的にした「改善更生モデル型」の新法成立



## 第5章 結論・提言

少年犯罪は罪ではあるが、少年を見せしめのように厳罰に処しても根本的な事態の解決にはつながらない。犯罪の動機となる少年の周囲環境に目を向け、児童福祉を通して犯罪の未然防止に努める必要がある。

そのために必要なのが、子どもの健全な成育をサポートするため、状況に応じたサービスを提供する公的機関だ。筆者が「エンジェル計画」で取り上げた児童相談所は、これからますます重要性が増してくる。業務の専門性をこれまで以上に高めることでより確実な問題対処が可能になり、「子どもの人権保護」という目的が達成されるであろう。

また、児童福祉は持続可能でなければならない。「エンジェル計画」が関係各所と業務を分担することで二重行政を防ぎ業務効率化を図るのも、この点を意識してのことである。

虐待による死亡事件が連日報道され、現在市民の児童福祉への関心は高まりつつある。しかし東京・港区の児童相談所建設問題など、必ずしも児童福祉行政が好感を持って受け入れられているわけではない。そのような社会情勢の中、高校生がこの問題を考えるにあたり最も重要なことは「子どもは社会が育てる」という意識を早い段階から身に付けることではないだろうか。私たちには今までたくさんの大人たちに支えられてきた事実と共に、次世代を担う子どもたちを優しく協力して育てる責任があることを忘れてはならない。少年犯罪は、成人後の凶悪犯罪のきっかけともなる。凶悪犯罪により苦しむ未来の犠牲者を少しでも減らすため、私たちが子育てを通してできることは確かにあるのだ。

### 〈参考資料〉

#### ●インターネット資料

- ・法務省 「平成 29 年版 犯罪白書～更生を支援する地域のネットワーク～」 [hakusyo1.moj.go.jp](http://hakusyo1.moj.go.jp)  
作成年：2017 年 閲覧日：2018 年 7 月 7 日
- ・産経ニュース 「【産経・FNN 合同世論調査】少年法の対象年齢引き下げに賛成 82%，内閣支持率は 53・6%で 4 カ月連続上昇」 <https://www.sankei.com/politics/news/150330/pl1503300017-n1.html>  
作成日：2015 年 3 月 30 日 閲覧日：2018 年 7 月 7 日
- ・日本経済新聞電子版 「少年法進む厳罰化，「逆効果」指摘も 佐世保同級生殺害事件」  
[https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG2800R\\_Y4A720C1CC0000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG2800R_Y4A720C1CC0000/)  
作成日：2014 年 7 月 28 日 閲覧日：2018 年 7 月 7 日
- ・外務省 「『児童の権利に関する条約』全文」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/zenbun.html>  
6 月 10 日作成日：2017 年 7 月 12 日 閲覧日：2018 年 6 月 10 日
- ・しんぶん赤旗 「過度な競争主義改めよ 日本政府に 3 回目の勧告 国連子どもの権利委員会」  
[https://www.jcp.or.jp/akahata/aik10/2010-06-27/2010062714\\_01\\_1.html](https://www.jcp.or.jp/akahata/aik10/2010-06-27/2010062714_01_1.html)  
作成日：2010 年 6 月 27 日 閲覧日：6 月 10 日
- ・葛野尋之 「アメリカ少年法の失敗になにを学ぶか」 (サイト「子どもの視点から少年法を考える情報センター」内の論文) <http://www.kodomonoshiten.net/shonenhoUSA.htm>  
作成年：2013 年 閲覧日：2018 年 6 月 10 日
- ・NHK 「クローズアップ現代+『少年事件の背景に何が 加害者の“愛着障害”』」

<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3613/1.html>

作成日：2015年2月9日 閲覧日：2018年6月13日

- ・内閣府「平成17年度 少年非行事例等に関する調査研究報告書」

<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/hikou/kenkyu/6.html>

閲覧日：2018年9月18日

- ・増沢高「アメリカ・イギリス・北欧における 児童虐待対応について」（厚労省の会議の参考資料）

[https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000060829_6.pdf)

[Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000060829\\_6.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000060829_6.pdf)

閲覧日：2018年9月30日

- ・沖縄タイムス+「木村草太の憲法の新手（82）目黒の少女虐待死 強制力持つ調査機関を」

<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/268565>

作成日：2018年6月17日 閲覧日：2018年10月1日

- ・西日本新聞「妊娠、育児支援切れ目なく 国、フィンランド参考に 本年度 150市町村に拠点施設」

[https://www.nishinippon.co.jp/feature/life\\_topics/article/217855/](https://www.nishinippon.co.jp/feature/life_topics/article/217855/)

作成日：2016年01月12日 閲覧日：2018年10月1日

- ・厚生労働省「児童虐待の定義と現状」

[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/dv/about.html](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/about.html)

閲覧日：2018年10月20日

- ・立命館大学「参考資料 日本の虐待の現状」

<https://www.ritsumei.ac.jp/~yamamoto/seminar/03goudou/rits2ss.htm>

閲覧日：2018年10月20日

- ・警察庁「総合的な少年非行防止対策」

<https://www.npa.go.jp/hakusyo/h17/hakusho/h17/html/G3040200.html>

閲覧日：2018年10月23日

- ・厚生労働省「児童相談所運営指針の改正について」

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv-soudanjo-kai-honbun1.html>

閲覧日：2018年12月24日

- ・厚生労働省「児童相談所関係資料」

[https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000104093.pdf)

[Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000104093.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000104093.pdf)

閲覧日：2018年12月28日

- ・朝日新聞デジタル「増える虐待、対応「もう限界」 児相職員、すり減る心身」

<https://www.asahi.com/articles/ASJC31D7FJC2UTIL077.html>

作成日：2016年11月20日 閲覧日：2018年12月27日

- ・シノドス「児童虐待の相談件数が急増、人手や予算の不足も。改めて考える、「児童相談所」の役割と課題とは？和田一郎×茂木健司×荻上チキ」 <https://synodos.jp/welfare/20563/2>

作成日：2017年10月30日 閲覧日：2018年12月27日

- ・IWJ「「虐待していなくとも…」親の同意なしで一時保護、親子の面会禁止のまま長期間隔離、子どもへの危険な薬物投薬 ～医師・弁護士らが児童相談所被害の実態を報告」

<https://iwj.co.jp/wj/open/archives/182320>

作成日：2014年10月15日 閲覧日：2018年12月30日

- ・ yahoo ニュース「子どもを虐待から救うため、児童相談所はどうあるべきか」  
<https://news.yahoo.co.jp/feature/1125>  
作成日：2018年10月24日 閲覧日：2019年1月31日
- ・ 西日本新聞「児童相談所の課題<上>人材育成 増員で埋められない『質』」  
[https://www.nishinippon.co.jp/feature/life\\_topics/article/464216/](https://www.nishinippon.co.jp/feature/life_topics/article/464216/)  
作成日：2018年11月09日 閲覧日：2019年2月1日

●書籍資料

- ・ 少年法（最終改正：平成28年）
- ・ 児童虐待防止法（最終改正：平成28年）
- ・ 児童福祉法（最終改正：平成30年）
- ・ 「新版 少年法・少年犯罪をどう見たらいいのか～厳罰化・刑事裁判化は犯罪を抑止しない～」2001年出版  
著者：石井小夜子，坪井節子，平湯真人 発行者：石井昭男 発行所：明石書店
- ・ 「『改正』少年法を批判する」2000年出版  
著者：団藤重光，村井敏邦，斉藤豊治ほか 発行者：大石進 発行所：日本評論社
- ・ 「それでも少年を罰しますか」1998年出版  
著者：野口善國 発行者：藤野雅之 発行所：共同通信社
- ・ 「よくわかる少年法 ～罪を犯したらどうなるの？～」2016年出版  
監修：後藤弘子 発行者：山崎至 発行所：PHP研究所
- ・ 「少年Aと少年法」1999年出版  
著者：篠崎 俊博 発行所：明石書店
- ・ 「ちょっと待って少年法『改正』」1999年出版  
著者：団藤 重光ほか 発行所：日本評論社

# 児童福祉制度の整備と 少年犯罪の減少

2年9組（法・歴史）梶原知茂

## 提言

児童福祉行政の  
効率化・専門化を通し  
児童の健全育成を図る  
「エンジェル計画」  
の整備

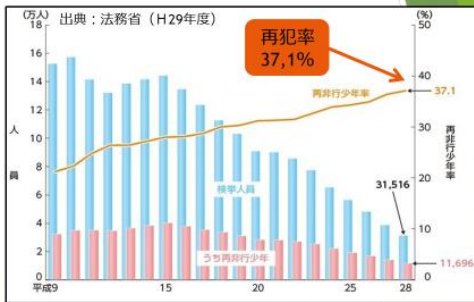
## 1. 日本の少年犯罪の現状



●件数（4万件/年） ●人口比（大人比1.9倍）



●再犯率（4割）



●現行制度の問題点とは？

【現行制度モデル】



「少年犯罪の未然防止」  
を考えた政策設計が必要

●子どもはなぜ犯罪を起こすのか？

→子供の成育環境が影響

- ・経済的苦境
- ・虐待
- ・家庭環境
- ・いじめ

問題解決が少年犯罪減少に  
つながる  
→児童相談所改革が必要

## 2.計画の内容

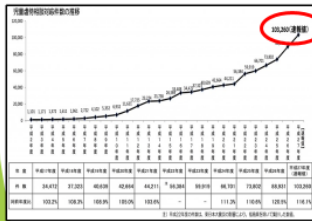
計画1. 職員の専門化

問題：職員の技能低下  
→人事異動などが原因

- ・児童福祉司の国家資格化
- ・現場職員の福祉職化
- 職員の高質の統一

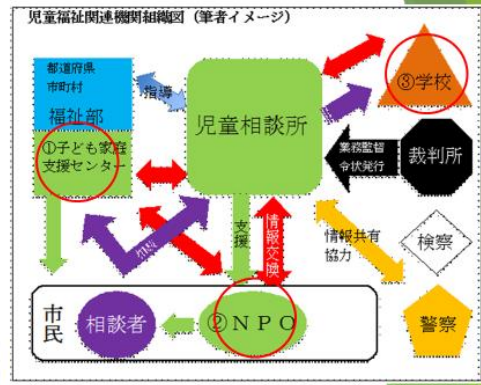
## 計画2. 外部機関との協力

**問題：**仕事量増加・人員不足  
→業務分担が必須



相談件数  
13万件超  
(H29年)

職員数  
10,738人  
(H27年)



### ①子ども家庭支援センター

センターを市町村に設置  
→**地域密着型**の支援拠点

- ・面談、訪問、情報提供
- ・健康診査、子育て指導  
→ネウボラ制度（フィ）

・託児所など併設で長期利用

### ②NPO

活動：おもちゃ・食品等の  
配布、里親事業など

→**経験豊富な部分・軽い  
業務の委託**



### ③学校への相談窓口

児童福祉：小さい範囲での対処

国名	児童相談所	管轄人口
スウェーデン	ソーデルマルムSS	12万
デンマーク	ブロンズホイ 子ども家庭センター	8万
日本	東京都中央児相	215万

→管轄人口は少ないほうが良い

現状：各学校に教育相談窓口

学校の相談窓口を外部に開放  
→**支援ネットワークを簡単に  
構築可能**

例：東京23区（2017年）  
人口（9,302,962人）÷小学校（823校）  
= 小学校1校当たりの住民数  
**1万1,307人**

## 計画3. 一時保護機能の改善

一時保護：緊急時、児相が  
子供を保護する

**問題：**

- ・劣悪な環境の一次保護施設
  - ・一時保護期間が長い（1カ月）
- 児童福祉の観点から不適

- ・一次保護施設の環境、施設の整備
  - ・一時保護の期間短縮化、延長の際の許可制
- 子どもの人権確保  
保護者との信頼関係の構築**

## 4. 結論・提言

エンジェル計画

子供の健全  
な成長

非行・犯罪  
の減少

安全な社会

地域の実情に合った政策立案

私たちにできる事

**「子供は社会が育てる」**  
という意識の早期育成



ご清聴ありがとう  
ございました

小テーマ：医療問題

## 認知症の明るい未来

2年9組29席 中嶋 一貴



### The bright future of dementia

The dementia is one of the most challenging diseases in the world. It will become a social problem in Japan in the very near future. In this article, I discuss cure, prevention and simple test method to detect early stage of dementia. This test may be able to decrease the number of patients. Although there are many supporters of dementia, they cannot support them because it is difficult to distinguish ordinary people from patients. Therefore, I recommend that patients carry the international pictogram showing the person is dementia, so that supporters can support them much easier.

## 序論 研究動機

過去には、痴呆と呼ばれ、治ることのないと言われていた病気。今では認知症という病名に代わったが、その患者数は今も増加している。物事を記憶したり、考えたり、判断したり、会話をしたり、人とコミュニケーションをしたりするなど、日常生活を営む上で欠くことのできない認知機能が失われてしまう病気、これが認知症である。最も代表的な症状が記憶障害である。また認知機能の低下に伴って、精神的に不安定になったり、徘徊などの問題行動が起こることもある。介護をする家族にとっても大きな負担になる。代表的な認知症であるアルツハイマー病では、徐々に脳細胞が失われ、発病から平均して約 8 年、長い人でも十数年で死亡するという統計結果が出ている。一度失われた脳細胞は、残念ながら現代の医学では元に戻すことはできないため極めて恐ろしい病気である。現在、高齢者の 4 人に 1 人がなると言われている認知症は、将来の私たちに大きな問題を突きつけると考える。図 1 に示すように今後、日本では認知症患者数が増加し 2060 年には人口の約 12 分の 1 の人が認知症になることが懸念されている。

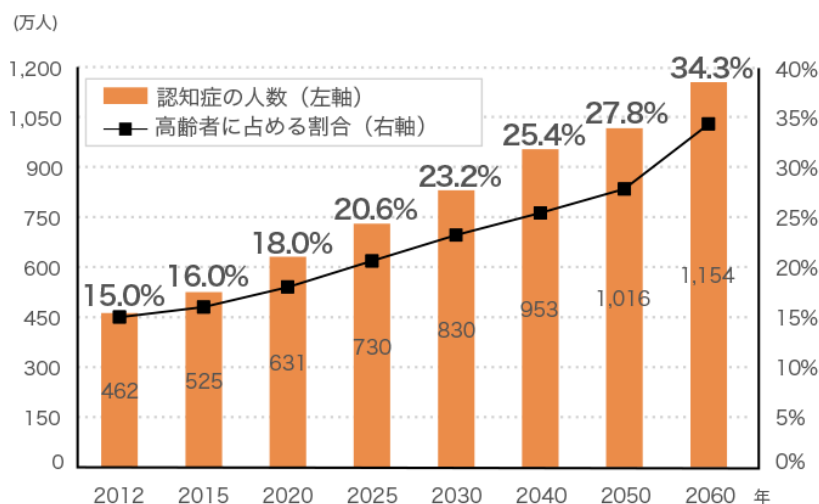


図 1 日本における認知症患者数の推移 (出典：三菱 UFJ 信託銀行)

また、図 2 に示すように、アメリカ、イギリスなどの国々を含む 35 カ国で構成された経済開発協力機構(OECD)が 2017 年に調査した結果、日本の認知症患者の割合は、2.33%であり、2 位イタリア(2.25%)、3 位ドイツ(2.02%)を上回り第 1 位である。興味深いのは、上位の国が先進国であるということである。衛生環境が良く所得の高い国では、認知症の発症率が高い傾向にあると言われている。これは衛生環境が良いことで免疫が衰え、アルツハイマーにも関係する免疫細胞が作られにくくなるのが原因であると考えられる。



### 経済協力開発機構が調査した 認知症患者の割合

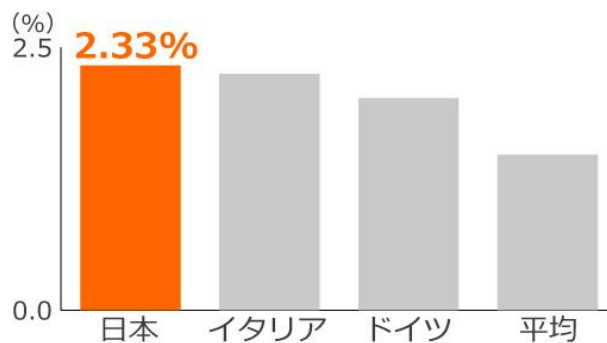


図2 諸外国と日本の認知症患者の割合（出典：経済開発協力機構）

図1, 2 からわかるように日本は他の国と比べても認知症患者の割合が高く、またこの先の割合は増加する一方であるだろう。このことから私は、「認知症は日本の中で大きな社会問題となる。」と考える。手遅れになる前に有効と思われる打開策について考えてみることにした。

## 提言

私は、「認知症は治す病気ではなく予防をする病気である。」と述べたい。現在では認知症の進行を遅らせることを目的として様々な薬が使われているが、その薬では認知症は治らない。認知症は発症する前に手をうつべき病気なのである。しかし、この予防により、認知症患者数が一人もいなくなるとは考えにくい。そこで認知症という病気を個人個人が今まで以上に知ることによって認知症という病気に対する偏見、誤解をなくすことが必要になってくるはずである。そのためには認知症及びその患者に対する知識を育成する場をこれまで以上に増やし「認知症という病気はわたしたちの身近にある」ということを再確認しなければならない。

## 第一章 薬による認知症の治療の現状

認知症の原因はアミロイドβというタンパク質が脳に沈着することで発生する。アミロイドβを取り除く有効な治療薬として塩酸ドネペジル、塩酸メマンチン、ガランタミン、リバスチグミンなどが存在する。（出典 認知症，アルツハイマー病）しかし、これらの薬はあまり良い成績が得られていないだけでなく、薬自体に副作用があり、認知症患者に迂闊に投与できないといったデメリットがある。治療法としては薬による治療法だけでなく、非薬物療法(回想法)と呼ばれるものがある。この治療法は20~30年前にとったビデオなどを認知症患者に見せることで、その周辺部の記憶がよみがえるといった治療法であり、実際に効果も上がっている。しかし、この回想法と呼ばれる非薬物療法は比較的軽度から中軽度の症状である患者にしか効果がないといった欠点がある。このことから私は、薬や回想法による認知

症の進行の抑制は必要ではあるが、完治が見込めない治療法と考える。また、最近の新聞記事で、記憶を担う神経を働きやすくする物質「ヒスタミン」が認知機能障害の治療薬開発につながると期待されるという記事が掲載されているが、実用化されるまでには、まだ長い年月が必要であると予想される。

そこで私は治療と同時並行で予防も行うべきであるという結論に至った。

## 第二章 MCI スクリーニング検査を健康診断の必須項目に

現在、日本には、将来自分が認知症になりやすいかどうかを判定できる MCI(軽度機能障害)スクリーニング検査と呼ばれる技術がある。先に述べたように、認知症はアミロイドβの沈着によって神経細胞を破壊されることで発症する。この検査は、血液中に存在している、アミロイドβを排除する作用を持つ三つのタンパク質（アポリポタンパク質、補体タンパク質、トランスサイレチン）を調べることにより MCI を判定することができ、結果は図 3 に示すように 4 段階で判定される。検査のために入院する必要はなく、採血のみであるため比較的簡単に行うことができる。

### ■ MCI検査によるリスク判定は4段階

判定	アドバイス
A	今回の検査で異常は見られませんでした。今後も1年に1度、定期的に検査を受けられることをお勧めします。
B	軽度認知障害(MCI)のリスクが中等度あります。詳細な検査を受けられることをお勧めします。
C	軽度認知障害(MCI)のリスクが高い可能性があります。専門医による早期の検査/診断を受けられることをお勧めします。
D	

(上はMCBI社の判定結果用紙による)

図 3 MCI スクリーニング検査による判定 (出典：NIKKEI STYLE)

しかしながらこの検査はあまり普及していない。この検査は保険の対象外であり、一回の検査に約 20,000 円の費用がかかるため、自分から受けに行く人が少ないと考えられる。また、自分がかかるはずがないと思っている病気にはまったく目を向けないのである。このこともまた検査が広まっていない理由の一つになるだろうと考える。そこで、この MCI スクリーニング検査を健康診断の必須項目に入れてみてはどうかというのが私の考えである。実際、健康診断では採血が行われていることは一般的であるので、そこに加えることはそれほど難しいことではない。検査の結果、将来自分が認知症になる可能性が高いと判断されれば、自分から発症する前に何らかの対策を取ろうと考えるはずである。発症する前に手を打たなければ手遅れになる病気が認知症なのである。図 4 に示されるように MCI から認知症に進行するまでにはおよそ 5 年かかる。言い換えると、MCI にかかっても元の正常な状態に戻ることができるということである。だから私は MCI かどうかが一目でわかる MCI スクリーニング検査を強く推奨するのである。

## 正常→MCI→認知症までの流れ

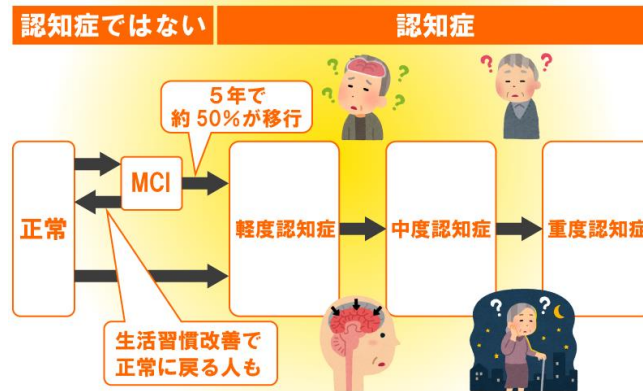


図4 認知症になるまでの流れ(出典：みんなの介護)

この診断をきっかけに病気が治るケースや MCI から正常に戻ったケースもある。また、きちんと MCI のことを受け止められると、予防に取り組む意欲につながり、自分や家族にとって人生の転機にもなるという点で、この検査を受ける意義は大きいだろう。

それでは、残念ながら C や D の判定が出てしまった場合はどうしたらいいのだろうか。または、既に認知症を発症しているという診断が出てしまった場合はどうすればよいのだろうか。いったん発症すれば、有効な治療法は存在していないのである。考えてみれば、アルツハイマー型認知症が発見されてすでに 100 年以上が経過しており、日夜治療法の開発が進められているにも関わらず、いまだに有効な治療法が見つかっていない。不治の病なのである。人間は永久に生き続けることはできない。これは逃れられない事実であり、恐らくすべての人が受け止めている運命であろう。それでは認知症はどうか？ 可能であればその事実を認めたくないというのが、大方の意見であろう。しかし、いったん発症すれば、この病気から逃れることはできないのである。そうであれば、患者やその家族もその事実を受け止め、残された人生を出来るだけ長く、有意義に過ごすことを考えるべきなのである。これが私の考える認知症の明るい未来である。そこで、明るい未来を達成するために、どのような取り組みが必要であるか考えてみることにした。

### 第三章 認知症に対する意識改革の必要性

認知症は様々な誤解や偏見があると私は思う。明らかに行動がおかしい、何度も同じことを聞きかえす。過去には痴呆と呼ばれていたのだから無理もないかもしれない。しかし、これは白血病や心臓病と同様、ちゃんとした病気なのである。身近な人が認知症と診断されて初めてこの病気について勉強する人が殆どだろう。患者を支えるべき家族だけでなく、社会全体に対しても同じことが言える。そもそも認知症という病気に対する理解が乏しいのが今の日本の現状である。認知症を正しく理解すること、これは、認知症患者を支える社会を造ることにつながると私は思う。この社会無くして、認知症に明るい未来は来ない。

この社会を造る第一歩として、認知症サポーターを養成する取り組みが行われている。認知症サポーターとは、地域住民、金融機関や商店・スーパー・コンビニ・銀行などの従業員、

小，中・高等学校などが参加する認知症を含めた全ての人が暮らしやすい地域づくりをするためのボランティアであり，サポーターを養成する講座も開かれている。この講座を受講することで，認知症について正しい知識を持つことができ，認知症の人やその家族をサポートし，よき理解者となって支援することができるようになる。

### 認知症サポーターの人数（平成 17 年～平成 27 年の累計）

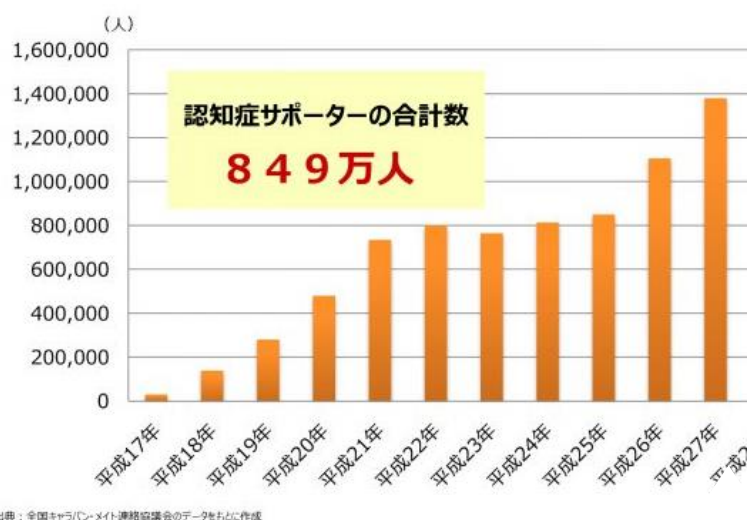


図 5 認知症サポーターの人数（出典：介護の 1，2，3）



図 6 認知症サポーターの証（出典：介護の 1，2，3）

図 5 に示すように認知症サポーターの人数は平成 28 年の時点で 849 万人となり，その数は 10 年前と比較すると明らかに増加していることが分かる。サポーターには図 6 のようなリストバンドがサポーターの証として配布される。サポートしてくれる人が一目で分かる。それでは，認知症患者の方はどうであろうか？ これだけサポーターの数が増加しているにも関わらず，認知症患者の行方不明者は図 7 に示すように年々増加しているのである。

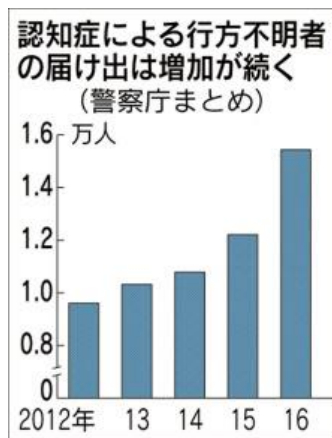


図7 認知症による行方不明者の届け出数(出典：日本経済新聞 2017.7.8)

これは、認知症である患者が、普通の人と見わけがつかないので、サポーターの支援を受けられないことが原因の一つではないかと考えられる。現在、義足や人工関節を使用している患者、内部障害や難病の患者、精神障害、知的障害[1]または妊娠初期の人等、援助や配慮を必要としていることが外見では分からない人々が、周りに配慮を必要なことを知らせることで、援助を得やすくなるよう、東京都によってヘルプマークと呼ばれる絵文字が考案された。このマークは、平成29年7月20日にJIS(案内用図記号)に採用され、全国に普及しつつある(図8)。



図8 ヘルプマーク(出典：東京都福祉保健局)

このヘルプマークのように、認知症患者の人専用のピクトグラムを国際的に決めてみてはどうかというのが私の提案である。このマークを作ることによって少なからず認知症患者は、支援を受けやすくなると思われる。そうするとそのマークを付けることが恥ずかしいといった患者が出てくるであろう。しかしそのこと自体が間違った考えなのである。まずは認知症に対する意識改革を、患者だけでなく、社会全体で変えていく必要があるのだ。社会が変われば、たとえ認知症と診断されても悲観することはないと思う。認知症の理解が浸透し、医師や薬のレベルが向上し、患者に対する社会全体のサポートが今以上に得られれば、認知

症が進行するスピードが遅くなり、充実した生活を送ることが可能になると考えられる。これが私の考える認知症の明るい未来である。

## 結論

これまで認知症のことについて述べてきたが、私が最も伝えたいことは、認知症という病気が予防が必須であること、そして仮に認知症と診断された場合でも、充実した生活を送れるようにするため、意識改革の一つとして認知症患者を示すマークを国際的に決めることの二つである。これらのことが達成されれば、認知症の未来は明るくなるはずだ。この目的を達成するために、社会全体の協力、すなわち一人一人の協力で世界は変えることが出来るということを理解する必要がある。

## 〈参考文献〉

- ・ 認知症・アルツハイマー病 株式会社 法研 林榮史 2006 年刊
- ・ 新版 認知症・アルツハイマー病 株式会社 主婦の友社 吉岡 充 2010 年刊
- ・ 認知症 専門医が語る診断・治療・ケア 株式会社 中公新書 池田 学 2014 年刊
- ・ 三菱 UFJ 信託銀行ホームページ  
<https://www.tr.mufg.jp/shisan/mamori/dementia/02.html> (図 1)
- ・ みんなの介護入居相談センターホームページ  
<https://www.minnanokaigo.com/news/kaigogaku/no385/> (図 2)
- ・ NIKKEI STYLE ホームページ  
<https://style.nikkei.com/article/DGXMZ085376860X00C15A4000000> (図 3)
- ・ みんなの介護入居相談センターホームページ  
<https://www.minnanokaigo.com/news/kaigo-text/dementia/no19/> (図 4)
- ・ 介護の 1 2 3 ホームページ  
<https://kaigo123.net/ninchisho-supporter/> (図 5, 6)
- ・ 日本経済新聞ホームページ  
[https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG14HB2\\_V10C17A6CR0000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG14HB2_V10C17A6CR0000/) (図 7)
- ・ 東京都福祉保健局 ホームページ  
[http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shougai/shougai\\_shisaku/helpmark.html](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shougai/shougai_shisaku/helpmark.html) (図 8)
- ・ 中日新聞 2019 年 1 月 10 (木曜日) 朝刊
- ・ 金内メディカルクリニックホームページ  
<http://www.kmc.or.jp/examination/mci.html>
- ・ NK メディコホームページ  
[https://www.nk-m.co.jp/project/mci\\_screening/](https://www.nk-m.co.jp/project/mci_screening/)

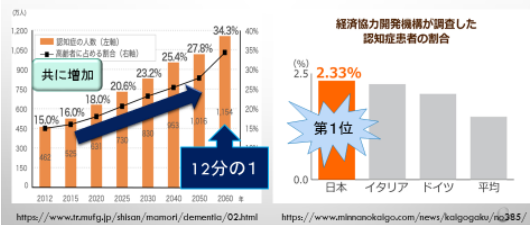
# 認知症の明るい未来

2年9組29席中嶋一貴

皆さんは認知症という病気を知っていますか？



## 諸外国と日本の認知症患者



## 2つの図から私が考えること



## 提言

- 認知症は治す病気ではなく 予防をする病気である。
- 認知症は私たち一人一人が考えるべき問題である。

## 3つの観点から認知症について考える

- ① 薬による認知症の治療の現状
- ② MCIスクリーニング検査の導入
- ③ 認知症に対する意識改革の必要性

### ① 薬による認知症の治療の現状

認知症の進行を遅らせる薬は存在する。

副作用がある。完治が見込めない。

治療だけでなく**予防**も必要である。

### ② MCIスクリーニング検査の導入

MCIスクリーニング検査とは？

血液中に存在する3つのたんぱく質

アポリポたんぱく質

補体たんぱく質

トランスサイレチン

検査

## MCIスクリーニング検査の検査結果例

4段階

### ■ MCI検査によるリスク判定は4段階

判定	アドバイス
A	今回の検査で異常は見られませんでした。今後1年に1度、定期的に検査を受けられることをお勧めします。
B	軽度認知障害(MCI)のリスクが中等度あります。詳細な検査を受けられることをお勧めします。
C	軽度認知障害(MCI)のリスクが高い可能性があります。専門医による早期の検査/診断を受けられることをお勧めします。
D	軽度認知障害(MCI)のリスクが高い可能性があります。専門医による早期の検査/診断を受けられることをお勧めします。

(上はMCB社の判定結果用紙による)  
<https://style.nikkei.com/article/DGKXZ085376860X00C15A4000000>

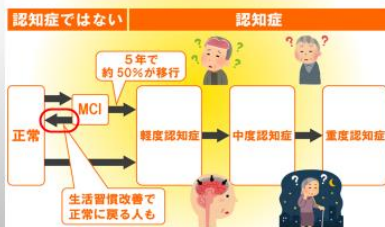
採血による検査

## この検査が普及していない理由

保険の適用外であり、費用は約2万円！  
 認知症に対して無関心

## 認知症になるまでの流れ

正常→MCI→認知症までの流れ



MCIから正常に戻る可能性も

## MCIから元に戻す方法として

一日遅れ日記の作成 脳を積極的に動かす



比較的簡単

## 私が考える対策

「MCIスクリーニング検査を健康診断の必須項目に」



認知症患者の減少

## けれども。。

認知症と診断された人  
 すでに認知症である人は？

有効な治療法  
 はない

不治の病

## 大前提として。。

人間は永久に生き続けることはできない  
 認知症と診断されたら、事実を認めたくない

認知症の明るい未来

## ③認知症に対する意識改革の必要性



認知症の理解が乏しい



## 認知症の理解が乏しい例

- ・何度も同じことを聞き返す認知症患者に対して怒ってしまうケース。
- ・明らかに認知症の症状がはっきりしているのに対処しようとしめないケース。

認知症サポーター養成講座

## 認知症サポーターの推移



認知症サポーター数 **11,101,518人**

(うちサポーター・メンバー 156,893人) [平成30年12月31日]

## 認知症の人々を支援する証として・・・



## しかしながら。。

認知症患者の行方不明数は年々増加している。

認知症による行方不明者の届け出は増加が続く (警察庁まとめ) 1.6万人

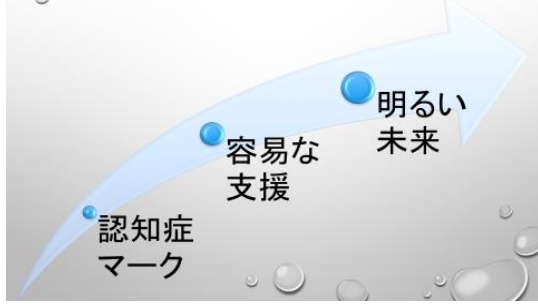
認知症患者と認知症ではない人との見分けがつかないため。

2012年 13 14 15 16

ヘルプマークを知っていますか？  
援助が必要な方のためのマークです。

外見からは分からなくても援助が必要な方がいます。このマークを見かけたら、電車内で席をゆずる、困っているようであれば声をかける等、思いやりのある行動をお願いします。

## このヘルプマークのように・・・



## 結論

- 認知症は予防が必須の病気である。
  - 認知症患者を示すマークを国際的に決める。
- この目的の達成には・・・
- 社会全体の協力**が大前提である！

ご清聴ありがとうございました。



**The world can  
be changed in  
every one of  
cooperation**

平成30年度 実施教育課程表  
三重県立四日市高等学校(全日制) 普通科

教科	科目	標準単位	1年				2年				3年			
					文系	文系選択	理系	理系	文系	文系選択	理系	理系選択		
国語	国語総合	必履4	5											
	現代文B	4		3			2		2			2		
	古典B	4		3			3		3			3		
	国語研究(学)							1						
地理歴史	世界史A	必履2	1				2							
	世界史B	必履4		3								4		
	日本史A	選択必履2				▲	2							
	日本史B	選択必履4		△	3			▽	3			4		
	地理A	選択必履2				▲	2							
	地理B	選択必履4		△	3			▽	3			4		
	世界史研究(学)							▽	3	3				
近現代史(学)														
公民	現代社会	必履2	1											
	公民研究(学)								3			4		
	国際関係(学)													
数学	数学Ⅰ	必履3	3											
	数学Ⅱ	4		3			3							
	数学Ⅲ	5					1					4		
	数学A	2	3											
	数学B	2		3			2							
	数学研究(学)								3					
	数学表現(学)									3				
数学応用(学)												3		
理科	物理基礎	必履2												
	物理	4				■	3				◆	3		
	化学基礎	必履2		2			2							
	化学	4					2					4		
	生物基礎	必履2												
	生物	4				■	3				◆	3		
	物理研究(学)								◇	2				
化学研究(学)								◇	2					
生物研究(学)								◇	2					
保健体育	体育	必履7~8	2	2			2		3			3		
	保健	必履2		1			1							
	体育研究(学)									3				
芸術	音楽Ⅰ	選択必履2	▼ 2											
	音楽Ⅱ	2				2				2				
	音楽Ⅲ	2								1				
	美術Ⅰ	選択必履2	▼ 2											
	美術Ⅱ	2				2					2			
	美術Ⅲ	2									1			
	書道Ⅰ	選択必履2	▼ 2											
書道Ⅱ	2				2						2			
書道Ⅲ	2										1			
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	必履3	3											
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		3			3							
	コミュニケーション英語Ⅲ	4							3			3		
	英語表現Ⅰ	2	3											
	英語表現Ⅱ	4		2			2		3			2		
	英語研究(学)					2								
	英語実践(学)									3				
家庭	家庭基礎	必履2	1											
	家庭応用(学)									3				
情報	情報の科学	必履2		1			1							
理数	理数物理	選択必履3~8												
	理数化学	選択必履3~8												
	理数生物	選択必履3~8												
SSH(学)	探究Ⅰ(学)		2											
	探究Ⅱs(学)													
	探究Ⅱa(学)													
	探究Ⅱb(学)													
	探究ⅡL(学)													
	探究Ⅲ(学)													
	科学総合Ⅰ(学)		3											
	科学総合Ⅱ(学)													
論文英語(学)														
グローバルリーダー(学)		2												
グローバルリーダー(学)		※1		※1			※1							
科目の単位数の計			31~32	29~30	2		31~32		25	6		27	4	
特別活動	ホームルーム活動		35h			35h					35h			
総合的な学習の時間			3~6	1		1					1			
単位数の総計				32~33			32~33				32			
週当たり授業時数				33~34			33~34				33			
備考														

必履修科目 1年生芸術は▼より1科目選択。  
2年生文系は地歴の△より1科目選択。  
2年生理系は地歴の▲より1科目選択。

選択科目 ※グローバル・リーダー学(学)は1、2年で選択できる。  
2年生文系は選択科目より1科目選択。  
2年生理系は理科の■より1科目選択。  
3年生文系は地歴の▽より1科目選択。  
3年生文系は理科の◇より2科目選択。  
3年生文系は選択科目より2科目選択。ただし、芸術はⅡ・Ⅲで1セット。  
3年生理系は理科の◆より1科目選択。  
3年生理系は選択科目より1科目選択。

<SSH研究開発のため現行教育課程の基準によらない教育課程の特例を適用>

SSH科目 「探究Ⅰ」の履修をもって「情報の科学」1単位の履修に替える。

(必履修) 「科学総合Ⅰ」の履修をもって「地学基礎」2単位の履修に替える。

「グローバル・ヒューマン学」の履修をもって「世界史A」「現代社会」「保健」「家庭基礎」各1単位の履修に替える。

1年生の総合的な学習の時間においては、SGH事業におけるSGHマインド論文作成の実施も含む。

平成30年度 実施教育課程表  
三重県立四日市高等学校(全日制) 普通科国際科学コース

教科	科目	標準単位	1年							
			2年		3年		理系		理系選択	
			1年	文系	文系選択	理系	文系	文系選択	理系	理系選択
国語	国語総合	必履4	5							
	現代文B	4		3		2	2		2	
	古典B	4		3		3	3		3	
	国語研究(学)						1			
地理歴史	世界史A	必履2	1			2				
	世界史B	必履4		3						4
	日本史A	選択必履2				▲ 2				
	日本史B	選択必履4		△ 3			▽ 3			4
	地理A	選択必履2				▲ 2				
	地理B	選択必履4		△ 3			▽ 3			4
	世界史研究(学)						▽ 3			
公民	現代社会	必履2	1							
	公民研究(学)							3		4
	国際関係(学)							3		4
数学	数学Ⅰ	必履3	3							
	数学Ⅱ	4		3		3				
	数学Ⅲ	5				1				4
	数学A	2	3							
	数学B	2		3		2				
	数学総合(学)						3			
	計算処理(学)							3		
理科	物理基礎	必履2								
	物理	4				■ 3			◆ 3	
	化学基礎	必履2		2		2				
	化学	4				2				4
	生物基礎	必履2								
	生物	4				■ 3			◆ 3	
	物理研究(学)						◇ 2			
	化学研究(学)						◇ 2			
	生物研究(学)						◇ 2			
	国際科学史(学)							3		4
保健体育	体育	必履7~8	2	2		2	3		3	
	保健	必履2		1		1				
	体育研究(学)							3		
芸術	音楽Ⅰ	選択必履2	▼ 2							
	音楽Ⅱ	2			2			2		
	音楽Ⅲ	2						1		
	美術Ⅰ	選択必履2	▼ 2							
	美術Ⅱ	2			2			2		
	美術Ⅲ	2						1		
	書道Ⅰ	選択必履2	▼ 2							
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	必履3	3							
	英語研究(学)				2					
	英語実践(学)							3		
家庭	中国語(学)							3		
	家庭基礎	必履2	1							
情報	家庭応用(学)							3		
	情報の科学	必履2		1		1				
理数	理数物理	選択必履3~8								
	理数化学	選択必履3~8								
	理数生物	選択必履3~8								
英語	総合英語	5~14	3							
	英語理解	4~8		3		3	3		3	
	英語表現	5~8		2		2	3		2	
	異文化理解	4~8						3		
SSH(学)	探究Ⅰ(学)		2							
	探究Ⅱs(学)									
	探究Ⅱa(学)									
	探究Ⅱb(学)									
	探究ⅡL(学)									
	探究Ⅲ(学)									
	科学総合Ⅰ(学)		3							
科学総合Ⅱ(学)										
論文英語(学)										
グローバル・リーダー学(学)		2								
グローバル・リーダー学(学)		※1		※1		※1				
科目の単位数の計			31~32	29~30	2	31~32	25	6	27	4
特別活動	ホームルーム活動		35h		35h		35h			
総合的な学習の時間			3~6	1		1		1		
単位数の総計			32~33		32~33				32	
週当たり授業時数			33~34		33~34				33	
備考										

必履修科目 1年生芸術は▼より1科目選択。  
2年生文系は地歴の△より1科目選択。  
2年生理系は地歴の▲より1科目選択。

選択科目 ※グローバル・リーダー学(学)は1、2年で選択できる。  
2年生文系は選択科目より1科目選択。  
2年生理系は理科の■より1科目選択。  
3年生文系は地歴の▽より1科目選択。  
3年生文系は理科の◇より2科目選択。  
3年生文系は選択科目より2科目選択。ただし、芸術はⅡ・Ⅲで1セット。  
3年生理系は理科の◆より1科目選択。  
3年生理系は選択科目より1科目選択。

<SSH研究開発のため現行教育課程の基準によらない教育課程の特例を適用>

SSH科目 「探究Ⅰ」の履修をもって「情報の科学」1単位の履修に替える。

(必履修) 「科学総合Ⅰ」の履修をもって「地学基礎」2単位の履修に替える。

「グローバル・ヒューマン学」の履修をもって「世界史A」「現代社会」「保健」「家庭基礎」各1単位の履修に替える。

1年生の総合的な学習の時間においては、SGH事業におけるSGHマインド論文作成の実施も含む。